吉岡下ノ段遺跡第11次・第12次

発掘調査報告書

2017

掛川市教育委員会

吉岡下ノ段遺跡第11次・第12次

発掘調査報告書

2017

掛川市教育委員会

例　　言

1　本書は、平成26年度に現地調査を行い、平成27、28年度に整理調査を行った吉岡下ノ段遺跡第11次、第12次発掘調査の報告書である。

2　調査は、茶園改植に伴う緊急発掘調査で、国および県の補助金を得て、掛川市教育委員会が実施した。

3　発掘調査に係る期間、担当は以下のとおりである。

第11次発掘調査

確認調査　　平成25年11月12日、13日　　夏目不比等

本発掘調査　平成26年７月22日～11月28日　夏目不比等

第12次発掘調査

確認調査　　平成25年７月15日～７月16日　大熊茂広

本発掘調査　平成26年10月20日～平成27年２月20日　井村広巳

5　本書の執筆と編集は、第11次調査については夏目不比等が、第12次調査については井村広巳が行い、Ⅲ（２）炭化材の樹種同定と年代測定については株式会社古環境研究所が執筆した。

6　調査によって得られた資料及び出土遺物は、掛川市教育委員会社会教育課が保管している。

凡　　例

1　本書で用いる座標値は世界測地系に基づく。方位は座標北とし、標高値は数値で示した。

2　遺構の略番号は、以下のとおりである。

SB：竪穴住居跡　　SH：掘立柱建物跡　　SD：溝

SK：土坑　　SP：小穴　　SX：性格不明遺構（土坑）

3　遺構番号は、現地調査時に呼称したものをそのまま使用した。

4　遺物の番号は、挿図と写真図版において同一番号である。

目　　次

例言　凡例

Ⅰ　はじめに……1
　1　調査に至る経緯……1
　2　遺跡をめぐる環境……1
　　（1）地理的環境 ……1
　　（2）歴史的環境 ……1

Ⅱ　吉岡下ノ段遺跡第11次発掘調査
　1　調査に至る経緯……9
　2　調査の方法と経過……9
　3　調査の成果……11

Ⅲ　吉岡下ノ段遺跡第12次発掘調査
　1　調査に至る経緯……79
　2　調査の方法と経過……79
　3　調査の成果……81
　　（1）遺構・遺物 ……81
　　（2）掛川市吉岡下ノ段遺跡における自然科学分析報告 ……85
　4　まとめにかえて……93

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡位置図…… 4
第２図　周辺遺跡調査位置図…… 5

吉岡下ノ段遺跡第11次発掘調査
第３図　遺構全体図…… 39
第４図　SB01、02、03実測図 …… 41
第５図　SB04実測図 …… 42
第６図　SB07実測図 …… 43
第７図　SB09実測図 …… 44
第８図　SB11実測図 …… 45
第９図　SB13、19実測図 …… 46
第10図　SB14実測図 …… 47
第11図　SB15実測図 …… 48
第12図　SB16実測図 …… 49
第13図　SB17、20実測図 …… 50
第14図　SD01実測図 …… 51
第15図　SD01エレベーション図 …… 52
第16図　SD02実測図 …… 53
第17図　SD03実測図 …… 54
第18図　SH01実測図 …… 55
第19図　SX07実測図 …… 56
第20図　SX08、09、11実測図 …… 57
第21図　SP88実測図 …… 58
第22図　出土遺物実測図（１）…… 59
第23図　出土遺物実測図（２）…… 60
第24図　出土遺物実測図（３）…… 61
第25図　出土遺物実測図（４）…… 62
第26図　出土遺物実測図（５）…… 63
第27図　出土遺物実測図（６）…… 64
第28図　出土遺物実測図（７）…… 65
第29図　出土遺物実測図（８）…… 66
第30図　出土遺物実測図（９）…… 67
第31図　出土遺物実測図（10）…… 68
第32図　出土遺物実測図（11）…… 69
第33図　出土遺物実測図（12）…… 70
第34図　出土遺物実測図（13）…… 71
第35図　出土遺物実測図（14）…… 72
第36図　出土遺物実測図（15）…… 73
第37図　出土遺物実測図（16）…… 74
第38図　出土遺物実測図（17）…… 75

吉岡下ノ段遺跡第12次発掘調査
第１図　遺構全体図…… 97
第２図　SB01実測図（１）…… 98
第３図　SB01実測図（２）…… 99
第４図　SB01（３）、SB02、SB03実測図　100
第５図　SB04実測図 …… 101
第６図　SH01、SX01、SP355実測図 …… 102
第７図　SP17、74、85、88、89、93、265、288、307、333実測図 …… 103
第８図　出土遺物実測図（１）…… 104
第９図　出土遺物実測図（２）…… 105
第10図　出土遺物実測図（３）…… 106
第11図　出土遺物実測図（４）…… 107
第12図　出土遺物実測図（５）…… 108

挿表目次

周辺遺跡地名表…… 4
第11次調査　出土遺物観察表…… 27
第12次調査　出土遺物観察表…… 94

図　版　目　次

カラー図版１　吉岡下ノ段遺跡全景（東から）
カラー図版２　上　第11次調査　北区全景
　　下　第11次調査　南区全景
カラー図版３　上　第12次調査　北区全景
　　下　第12次調査　南区全景

吉岡下ノ段遺跡第11次発掘調査

1　調査区北区遺構検出状況（南から）
　調査区北区完掘状況（南から）
2　調査区南区完掘状況（北から）
　調査区南区完掘状況（北から）
3　調査区南区作業風景（北から）
　調査区南区作業風景（南西から）
4　SB01、02、03完掘状況（南西から）
　SB01土器検出状況（西から）
5　SB02完掘状況（北から）
　SB02完掘状況（南西から）
6　SB03炉跡（南から）
　SB03炉跡断面（東から）
7　SB03土器検出状況（南から）
　SB03、04内土器検出状況（南から）
8　SB04完掘状況（北東から）
　SB04完掘状況（南から）
9　SB04炉跡（南から）
　SB04炉跡断面（南から）
10　SB04内焼土（南から）
　SB04土器等集積部分検出状況（北から）
11　SB04土器等集積部分検出状況（北から）
　SB04土器等集積部分検出状況（北西から）
12　SB05想定部完掘状況（北東から）
　SB05内勾玉検出状況
13　C-3区（SB05）土器検出状況（南から）
　SB06想定部、SB07完掘状況（北西から）
14　SB06想定部土器検出状況（南から）
　SB07完掘状況（南西から）
15　SB07炉跡（東から）
　SB08完掘状況（南から）
16　SB08内炉跡検出状況（南から）
　SB08内炉跡（南から）
17　SB08内炉跡検出状況（西から）
　SB08内炉跡断面（北西から）
18　SB09完掘状況（北西から）
　SB09完掘状況（南西から）
19　SB09床検出状況（東から）
　SB09内炉跡（南から）
20　SB09内炉跡断面（西から）
　SB11完掘状況（北から）
21　SB11完掘状況（南から）
　SB13完掘状況（東から）
22　SB14炉跡（南から）
　SB14炉跡断面（北東から）
23　SB15完掘状況（北から）
　SB15完掘状況（東から）
24　B-4区SB15北側炉跡検出状況（南から）
　SB15土器検出状況（南東から）
25　SB16完掘状況（西から）
　SB16内炉跡検出状況（西から）
26　SB17完掘状況（北西から）
　SB17完掘状況（南西から）
27　SB17炉跡断面（東から）
　SB17内土器検出状況（南から）
28　SB19完掘状況（南から）
　SB19完掘状況（西から）

29　SB19内炉跡（西から）
　　SB19炉跡断面（南から）
30　SB20完掘状況（東から）
　　SB20完掘状況（西から）
31　SB11、SD01完掘状況（北西から）
　　SD01完掘状況（北から）
32　SD01内土器検出状況（南から）
　　D-4区（SD01内）検出土器（南から）
33　SH01完掘状況（東から）
　　SH01完掘状況（西から）
34　SX07完掘状況（南東から）
　　SX07土層断面（南東から）
35　SX07土層断面（南西から）
　　SX07内焼土検出状況（南から）
36　SX07内検出焼土断面（南から）
　　A-2区SX08北側土器検出状況（北から）
37　SX09土器検出状況（西から）
　　SX11および周辺完掘状況（北から）
38　SX11完掘状況（東から）
　　SP22、23土器検出状況（東から）
39　SP88遺物検出状況（西から）
　　SP127断面（南から）
40　SP193断面（南から）
　　SP193礫検出状況（南から）
41　SP311焼土検出状況（北東から）
　　SP313完掘状況（北西から）
42　SP319土器検出状況（北から）
　　SP319完掘状況（北から）
43　出土遺物（１）
44　出土遺物（２）
45　出土遺物（３）
46　出土遺物（４）
47　出土遺物（５）
48　出土遺物（６）
49　出土遺物（７）
50　出土遺物（８）
51　出土遺物（９）
52　出土遺物（10）
53　出土遺物（11）
54　出土遺物（12）
55　出土遺物（13）
56　出土遺物（14）
57　出土遺物（15）
58　出土遺物（16）
59　出土遺物（17）
60　出土遺物（18）

吉岡下ノ段遺跡第12次発掘調査

1　調査区北区全景（西から）
　　調査区南区全景（西から）
2　SB01北半部遺物出土状態（北から）
　　SB01北半部遺物出土状態（東から）
3　SB01、SK01南半部遺物出土状態（北から）
　　SB01、SK01南半部遺物出土状態（西から）
4　SB01遺物出土状態（東から）
　　SB01遺物出土状態（北から）
5　SB01炉Ａ（東から）
　　SB01炉Ｂ（北から）
　　SB01内SP09（北から）
6　SB01北半部完掘（北から）
　　SB01北半部完掘（東から）
7　SB01、SK01、SB04完掘（東から）
　　SB01、SK01、SB04完掘（北から）
8　SB02土器、貼床、焼土検出状況（東から）
　　SB03遺物出土状態（東から）
9　SB03完掘（東から）
　　SB03完掘　（北から）
10　SB04遺物出土状態（北から）
　　SB04遺物出土状態（北から）
11　SB04炉（南から）
　　SB04貼床検出状況（北から）
12　SB04完掘（東から）
　　SB04完掘（北から）
13　SH01（東から）
　　SH01（北から）

14　SP85土器出土状態（東から）
　　SP88土器出土状態（北から）
　　SP89土器出土状態（南から）
15　SP288（東から）
　　SP307土器出土状態（東から）
　　SP307完掘（東から）
16　出土遺物（１）
17　出土遺物（２）
18　出土遺物（３）
19　出土遺物（４）

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経緯

掛川市、菊川市、島田市、牧之原市、川根本町で行われている茶草場農法は、平成25年度に「静岡の茶草場農法」として世界農業遺産に認定された。掛川市は温暖湿潤でお茶の生育に適した豊かな自然環境であり、'茶処掛川'として、全国有数の茶生産量を誇っている。平成26年度に和田岡地区では、発掘調査が２地点で実施されたが、当地区は市内でもお茶の生産が最も盛んな地区の一つである。市内の北西部を流れる二級河川原野谷川が形成した河岸段丘上には、広大な茶園が展開している。この段丘上には縄文時代早期から始まる多くの遺跡が分布しているが、茶園を経営していくなかで、より生産性の高い優良な品種への改植は必要であり、それによる遺跡の破壊は避けられない場合が多い。掛川市教育委員会では、このような状況となった遺跡に対し、記録保存を目的とした発掘調査を実施しており、今回調査の対象となった２地点とも茶の改植の計画を受け、本発掘調査に至ったものである。

2　遺跡をめぐる環境

（1）地理的環境

掛川市は、静岡県を３区分した場合西部にあたるが、その中では東側の東遠地区に位置する。現在、掛川市は東遠地区の中心的な市となっている。市域の北部には、掛川市の最高峰である八高山（標高832.1m）を中心とした山地、中央には古大井川の扇状地が隆起して形成された小笠山丘陵があり、南には遠州灘を望むことができるなど、恵まれた自然環境の中にある。今回発掘調査が実施された吉岡下ノ段遺跡は、掛川市の北西、和田岡と呼ばれる袋井市と接する地域に位置する。八高山を源流とする原野谷川は、上流では蛇行しながら北東から南西に流れ、小規模な河岸段丘を形成している。そして、中流域では南に流れを変え、西岸には和田岡原と呼ばれる東西約1.2km、南北約2.2kmに広がる段丘を形成している。また和田岡原の南東に位置する南北約２kmの岡津原は、独立段丘で、かつては原野谷川がこの東側を流れていた。

吉岡下ノ段遺跡が位置する和田岡原段丘は、大きく分けて標高60m前後の吉岡原と呼ばれる上位段丘面と、標高40～50m前後の高田原と呼ばれる下位段丘面に区分される。吉岡下ノ段遺跡は、上位段丘面の東辺、南北約600m、東西約400mの範囲に広がり、標高55m～50mで緩やかに南東方向に傾斜している。段丘の眼下には原野谷川の流れを見ることができる。今回、調査した11次調査地点は南東の段丘端部に、12次調査地点は高田上ノ段遺跡と接する西辺に位置する。

（2）歴史的環境（第１、２図）

ここでは、原野谷川中流域における歴史的環境を概観していく。

旧石器・縄文時代

過去の調査から溝ノ口遺跡、瀬戸山Ⅰ遺跡からスクレイパーが出土しており、原野谷川流域において人々が活動し始めるのは、旧石器時代に遡ると推測される。

今回の調査では縄文時代の遺構は、検出されなかったが、両地点ともに縄文時代中期の土器や石器が出土しており、縄文時代の人々の存在を伺うことができる。表採ではあるが、槍先形尖頭器が高田上ノ段遺跡から発見されており、縄文時代草創期には既に、和田岡原で人々が活躍していた可能性が高い。早期にも、瀬戸山Ⅰ、Ⅱ、高田遺跡において押型文土器が発見されているが、遺跡の性格につ

いては、明確にはなっていない。中期になると遺跡数は増加し、中原、高田、今坂遺跡では石囲い炉を伴う竪穴住居跡が発見されている。原野谷川左岸の岡津原では、岡津原Ⅲ遺跡から中期初頭の土器が多量に出土するなど、中期になると集落が形成され、しだいに拡大していったことが推測される。しかし、後晩期になると少数の土器は確認されるものの、集落規模は縮小し、この地域から移動を余儀なくされたと考えられる。

弥生時代

弥生時代になると、中期中葉の土器棺墓が、今坂遺跡で発見されている。女高Ⅰ遺跡の中期に位置づけられる竪穴住居跡と方形周溝墓の検出は、和田岡原では新たな発見となった。また岡津原Ⅲ遺跡では、中期後葉の大規模な方形周溝墓群が確認されている。後期になると、遺跡は爆発的に増加し、吉岡原、高田原の段丘上では、重複関係にある竪穴住居跡や掘立柱建物が至る地点で確認され、継続する大規模な集落が多く営まれていたことが認められる。これは段丘上だけでなく、微高地上に位置する林遺跡にも当期の集落が及んでいる。

古墳時代

弥生時代後期に数多く存在した集落は、古墳時代前期に継続していくが、次第に集落数は減少し、その規模も縮小していくようである。古墳時代中期になると、全長66mの前方後円墳である各和金塚古墳をはじめとする和田岡古墳群が、段丘の縁辺部に造られる。これらの古墳の周囲には、刀子や直刀を副葬した土坑や方墳、円墳など小規模古墳の存在が確認されている。また、この時期の竪穴住居跡が高田遺跡や女高Ⅰ遺跡で確認されている。今回の11次調査でも平地住居が確認されており、和田岡古墳群を造営した集団の動向は、和田岡原の今後の調査例の増加によって次第に明らかにされるであろう。

原野谷川左岸の中期末から後期初頭の古墳には、標高37m前後の独立丘に位置する５基の円墳と１基の前方後円墳からなる高代山古墳群があり、横穴式石室導入以前のいわゆる初期群集墳（５Ｃ末～６Ｃ初）と考えられている。

古墳時代後期では、６世紀前半の円墳の周溝を高田上ノ段遺跡において検出しているが、これ以上の資料は現段階では認められない。また、原野谷川左岸に目を向けると丘陵上に数多くの古墳群や横穴群が点在していることが認められるが、未調査であり、その実態は明らかにされていない。

吉岡下ノ段遺跡のこれまでの調査歴と周辺の調査結果をここで加えて述べることとする。平成28年度までに吉岡下ノ段遺跡では、確認調査を含め第14次までの調査が行われており、その中でも４地点において本調査が実施された。その内の２地点が今回の調査地点、１地点が平成28年度調査である。本調査された６次調査では、弥生時代後期の方形周溝墓１基が発見されている。8次調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡と小穴が確認調査で検出されたが、埋蔵文化財が保護されることとなったため、本調査には至っていない。他の地点では、遺物は出土したが遺構は検出されなかったことから、本調査は実施されていない。

吉岡原遺跡では、第１次、２次、９次、10次調査で弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、方形周溝墓が確認されている。高田上ノ段遺跡の昭和60年度調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡と６世紀前半に位置付けられる円墳１基が確認されている。平成21年度調査地点では、弥生時代後期を中心とした竪穴住居跡、大型の掘立柱建物跡、柵跡のほか、直径約10.5mの古墳時代中期の円墳１基を確認している。また東原遺跡の第８次調査では、重複関係のある弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡が、多数確認されている。

微高地上の林遺跡では、第１次調査から古墳時代前期の方形周溝墓が、第２次調査からは弥生時代

後期の竪穴住居跡と古墳時代前期の掘立柱建物跡が確認されている。

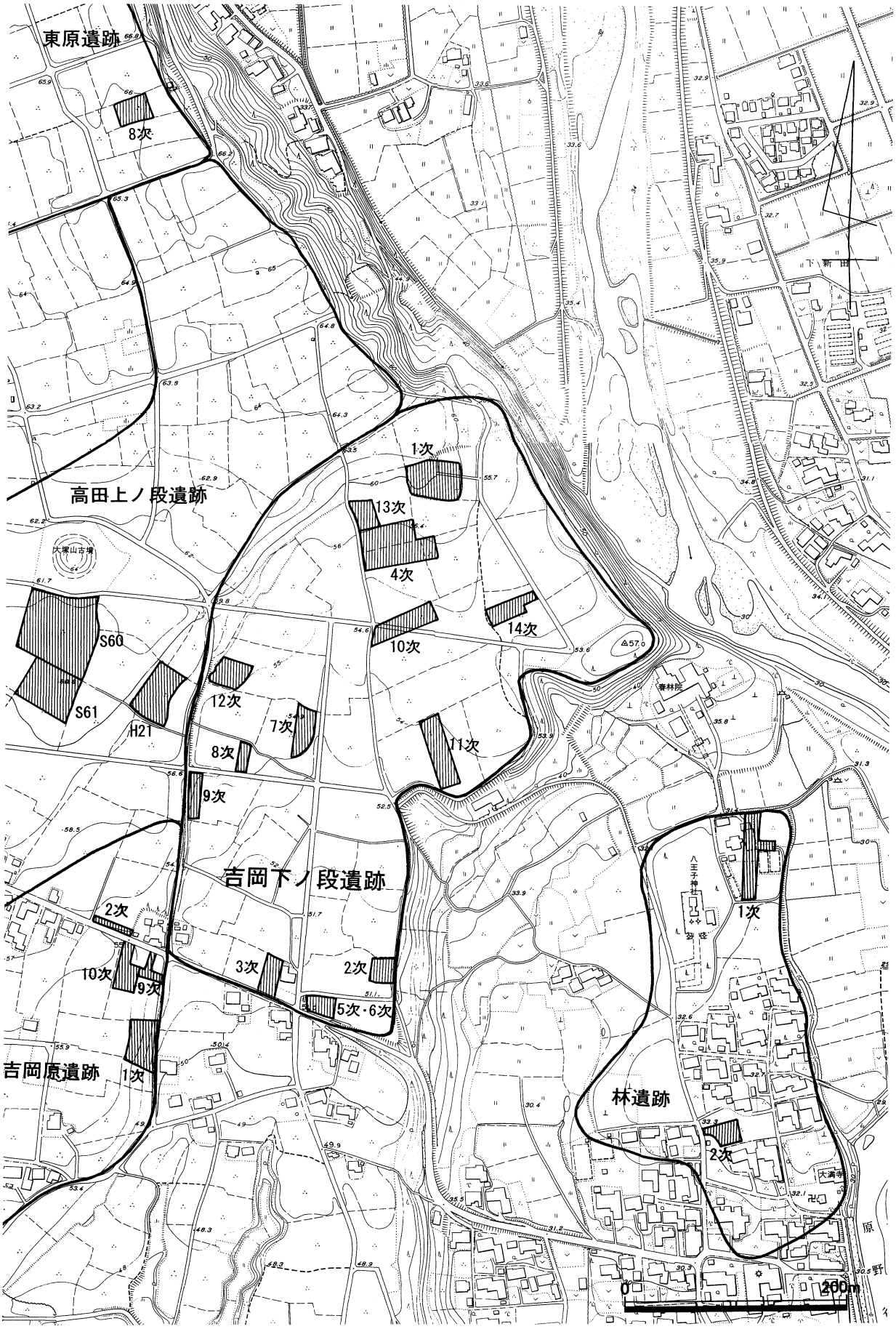
今回の11次調査では古墳時代中期の遺構や遺物で注目されるものが多く、またこれまでの調査結果の情報をふまえ、和田岡原での弥生時代後期から古墳時代中期にかけての人々の動向を改めて見直す必要がある。

参考文献

掛川市教育委員会　1983『行人塚遺跡発掘調査概報』
掛川市教育委員会　1985『女高遺跡発掘調査概報』
掛川市教育委員会　1986『高田上ノ段遺跡発掘調査報告書』
掛川市教育委員会　1990『女高遺跡・行人塚発掘調査報告書』
掛川市教育委員会　1992『岡津原Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
掛川市教育委員会　1993『林遺跡発掘調査報告書』
掛川市教育委員会　1998『岡津原Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
掛川市教育委員会　2000『溝ノ口遺跡』
掛川市　2000『掛川市史　資料編　古代・中世』
掛川市教育委員会　2008『市内遺跡発掘調査報告書』
掛川市教育委員会　2009『今坂遺跡第6次調査　瀬戸山Ⅱ遺跡　高田遺跡第21次調査』
掛川市教育委員会　2011『高田上ノ段遺跡発掘調査報告書』
掛川市教育委員会　2013『幡鎌峯山遺跡 吉岡原遺跡第10次 高田遺跡第25次発掘調査報告書』
掛川市教育委員会　2014『林遺跡第２次 女高Ⅰ遺跡第15次 東原遺跡第８次発掘調査報告書』
掛川市教育委員会　2015『高田遺跡第33次　第35次発掘調査報告書』

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	吉岡下ノ段	縄文･弥生･古墳･平安	20	東登口古墳群	古墳	39	甚佐ヶ谷横穴群	古墳
2	西山城	中世	21	行人塚古墳	古墳	40	山崎	弥生･古墳
3	城ノ腰	弥生･古墳	22	平田ヶ谷	縄文･弥生･古墳	41	山崎古墳	古墳
4	東原	縄文･弥生･古墳	23	女高Ⅰ	弥生･古墳	42	土橋古墳	古墳
5	今坂	弥生･古墳	24	瓢塚古墳	古墳	43	土橋横穴群	古墳
6	溝ノ口	縄文･弥生･古墳	25	高田古墳	古墳	44	高代山砦	中近世
7	中原	縄文	26	高田金鋳原	弥生	45	高代山古墳群	古墳
8	高田上ノ段	弥生･古墳	27	各和金鋳原	弥生	46	土橋古墳	古墳
9	吉岡大塚古墳	古墳	28	各和金塚古墳	古墳	47	権田ヶ谷古墳群	古墳
10	高田	縄文･弥生･古墳	29	各和氏館跡	中近世	48	枕田古墳群	古墳
11	春林院古墳	古墳	30	中氏館	中近世	49	岡津原Ⅰ	縄文･弥生
12	大向	縄文	31	中殿谷古墳	古墳	50	旗差古墳群	古墳
13	吉岡原	縄文･弥生･古墳	32	高藤城	中近世	51	椀貸古墳群	古墳
14	林	弥生･古墳･平安･中近世	33	冷池古墳	古墳	52	二反田	弥生
15	西村	古墳･奈良	34	殿ノ台	弥生	53	富部城跡	中近世
16	瀬戸山Ⅱ	縄文･弥生･古墳	35	穴ノ台古墳	古墳	54	岡津原Ⅱ	縄文
17	瀬戸山Ⅰ	縄文･弥生･古墳	36	若一王子神社古墳	古墳	55	椀貸横穴群	古墳
18	花ノ腰	弥生･古墳	37	堂前横穴群	古墳	56	岡津原Ⅲ	縄文･弥生･古墳
19	瀬戸山Ⅲ	弥生･古墳	38	堂前古墳	古墳	57	岡津原Ⅳ	弥生･古墳

第１図　周辺遺跡位置図



第２図　周辺遺跡調査位置図

吉岡下ノ段遺跡第11次調査

Ⅱ　吉岡下ノ段遺跡第11次発掘調査

1　調査に至る経緯

平成24年度に茶園改植の計画があることがわかり、平成25年11月12日、13日の２日間をかけ、確認調査を実施した。確認調査では住居跡、溝状遺構の一部や小穴が検出され、弥生土器片や土師器片も出土し、地下に遺跡があることが確実となった。

耕作者と遺跡保存のための協議を行った結果、遺構面から保護層を設けての改植は困難であるとの結論に達したため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

平成26年６月27日付けで耕作者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出書」を掛川市教育委員会から静岡県教育委員会に平成26年７月１日付けで進達した。これに対し、平成26年７月15日付けで、県教育委員会から耕作者宛に本発掘調査実施を内容とする「土木工事等のための発掘に係る指示について」が通知された。

2　調査の方法と経過

今回の調査対象地は改植計画範囲1,300㎡とし、発掘調査を実施した。調査で生じる排土を置く場所を確保するため、調査区を南北2つに分割し実施した。北半部から調査を実施し、南半部を排土置き場とした。反転後は北半部を排土置き場とし、南半部の調査を実施した。

調査区は地形に合わせ、５ｍ方眼のグリッドを設定し、実測、遺物取り上げの基準とした。グリッドは東西方向を西から東へＡ、Ｂ、Ｃ…とアルファベットで、南北方向は北から南へ１、２、３…と数字で表した。それらを組み合わせ、Ｂ－２区、Ｃ－３区等と呼称し、グリッド北西隅の杭にグリッド名を付した。調査地点を国家座標で記録するため、基準点測量を業者に委託し、実施した。

調査は平成26年７月22日から開始し、10月27日まで北半部の調査を行い、10月28日から11月４日まで反転を行い、11月５日から11月28日まで南半部の調査を実施した。

茶樹粉砕　重機による掘削に先立ち、トラクター１台を借上げ茶樹の粉砕を行った。

重機掘削　バックホウ1台、クローラーダンプ1台を借上げ、不要な耕作土の除去を実施した。北半部の掘削を３日間、反転及び南半部の掘削を４日間かけ行った。また、調査終了後の埋め戻しも重機を用いて実施している。

遺構検出　重機による掘削後は、鍬、鋤簾を使用し人力で粗掘りを行った。５～10cm程度掘り下げた後、鋤簾で丁寧に土を削り遺構を検出した。

遺構掘削　検出された遺構は、移植ゴテ、竹ベラなどを使用して掘り下げた。遺構同士の切合い関係や土の堆積状況を確認するため、ベルトやサブトレンチを適時設定し観察を行った。

遺構実測　遺構の実測は、遺構平面図や土層断面図は縮尺1/20で作成し、遺物出土状態図や微細図は、縮尺1/10で作成した。

写真撮影　現地調査での記録写真は、６×７判カメラ１台（ブローニーモノクロ用）、35mm判カメラ２台（カラーネガ、カラーリバーサル用）、デジタルカメラ１台を使用し撮影した。調査区の全景写真及び遺構の垂直写真は業者に委託し、ラジコンヘリコプターを使用し撮影した。

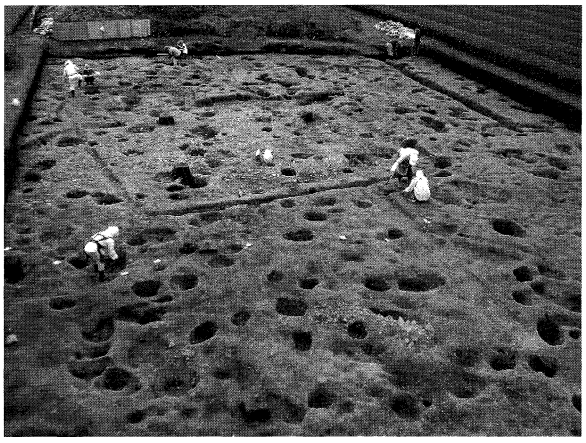
夏休み文化財教室　夏休みに市内の小中学生とその保護者を対象に発掘体験を平成26年８月２日に実施した。午前と午後の１回ずつ体験を行い、合計で20組、51名が参加した。

現地説明会　市民向けの現地説明会を平成26年11月21日に開催した。午前と午後に１回ずつ説明会を行い、54名の参加があった。

整理作業　出土した土器は水洗いした後、脆くなっているものについてはバインダー液を含浸させ強化した。土器本体に注記を行った上で、接合、復元し、実測図を作成した。現地調査で作成した図面は整理し、報告書作成用に編集、清書した。遺物の写真撮影を行い、報告を原稿にまとめ印刷に付した。

重機掘削

遺構掘削



遺構実測

発掘体験

3　調査の成果

第11次調査地点は耕作による撹乱が、遺構検出面まで達しており、遺構の残存状況は良好ではなかったが、調査区北半部では遺構検出時には複数の住居跡が重なっている状況が確認された。竪穴住居跡、平地住居跡、溝状遺構、土坑、小穴などが検出された。調査区南半部では重機による掘削が地山層まで達しており、さらに遺構の残存状況は良好では無かったが、布堀掘立柱建物跡の一部、小穴などが検出された。

（1）遺構

①　竪穴住居跡

竪穴住居跡は炉跡や床の残存状況、遺物の出土の様子などから想定されるものも含めて20軒確認された。

SB01（第４図、第22図）

Ｄ－1区で検出された。SB01は後述するSB02により壊されているため、平面プランの形、規模等は不明である。掘り方は約５cmの深さで、北側のみ残されていた。

出土遺物は第22図の１～７である。

１は台付甕で、SB01の東端にてほぼ完形で出土した。口径は15.3cm、最大径は17.6cm、底径は9.1cm、器高は21.75cmである。口縁部内側と外側全体にハケ目調整が施され、胴部下半部には煤が付着している。胴部と台部の接合部には指頭圧痕が認められる。

２は甕口縁部から胴部にかけての破片で、口径は16.4cm、口縁部には刻み目が施され、口縁部内側と外側は胴部までハケ目調整が施されている。

３は甕口縁部から胴部にかけての破片で、口径は17.4cm、口縁部の先端に刻み目が施され、外側は口縁部から胴部にかけてハケ目調整が施されている。内側は摩滅しているが、ハケ目調整の痕が認められる。

４は甕口縁部から胴部にかけての破片で口径、最大径ともに19.2cmである。２、３と同様に口縁部先端に刻み目が施されている。口縁部から頸部にかけて摩滅しているがハケ目調整の痕跡が認められる。ハケ目調整は外側全体に施されている。

５は壺口縁部の破片で、口径15.0cm、外側はハケ目調整が施され、内側及び口縁部にない調整が施されている。

６は壺の口縁部の小片で、口径17.2cm、口縁部内側と頸部にハケ目調整が施されている。

７は壺で、頸部から底部が残存していた。器径は20.4cm、底径は7.0cmである。頸部に上から櫛波状文、櫛刺突羽状文が施されている。胴部上半は摩滅しており、調整は不明だが、胴部下半から底部にかけてはミガキ調整が施されている。内側には輪積の痕が残り指頭圧痕が認められる。胴部下半の内側には篦ナデ調整が施されている。

１～５、７は弥生時代後期の土器だが、６は土師器であり、混入したものと考えている。

SB02（第４図、第22図、第23図）

Ｃ－２、Ｄ－２区にかけて検出された。平面プラン形は隅丸方形で、主軸の方位はＮ－19°－Ｗを測る。南北方向に4.1m、東西方向は約４ｍと推測されるが、西側はSB03により壊されてい

るため詳細は不明である。主柱穴と想定される小穴は確認できなかった。掘り方は約10cm残存しており、住居跡の中央部分は５～10cm周囲より高く、僅かに床が残存していた。

SB02では北側で遺物が集中して出土しており、出土遺物は第22図の８～13、第23図の14～22である。

８はＳ字口縁甕の口縁部から胴部にかけての破片で器径は推定で17.4cm、口径12.4cmである。口縁部は内側外側ともナデ調整が施され、外側の頸部から胴部上半にかけて斜格子文が施され、その下方はハケ目調整が施されている。胴部内側は篦ナデにより調整されている。

９はＳ字口縁甕の口縁部から頸部にかけての破片で、口径は15.9cmである。口縁部にはナデ調整が施され、頸部外側にはハケ目調整が施されている。

10はＳ字口縁甕の口縁部から胴部で、器径は推定で29.1cm、口径は20.0cmである。口縁部にはナデ調整が施され、頸部から胴部にかけてハケ目調整が施されているが、胴部上半までは縦方向の刷毛目が施され、中程で、横方向のハケ目が入っている。その下方は斜め方向のハケ目調整が施されている。内側は篦ナデによる調整が施され、指頭圧痕が認められる。

11は弥生土器甕口縁部の小破片で口縁部に刻み目が施され、頸部にかけてハケ目調整が施されている。

12は小型壺の胴部下半部から底部で、底径は2.4cmである。摩滅しており、調整の詳細は不明である。

13は台付甕の接合部である。内側、外側にハケ目調整が施されている。

14は複合口縁壺の口縁部から頸部で、口径は25.1cmである。口縁部にはナデ調整が施され、頸部には爪痕を思わせる文様が施され、その下方から胴部上半にかけてはミガキ調整が施されている。

15は複合口縁壺の口縁部の破片で、口径は19.4cmである。内外とも摩滅しており、調整の詳細は不明である。

16は壺頸部の破片である。外側にハケ目調整が施され、その下方に結節縄文が施文されている。

17は壺胴部の破片で、器径は推定で20.0cmである。外側にハケ目調整は施され、内側は篦ナデで調整されている。指頭圧痕が認められる。

18は壺の小破片である。櫛刺突羽状文が施され、円形の浮文が貼り付けられている。

19は壺底部で、底径は10.0cm、摩滅している上、内側は剥離しているため調整の詳細は不明である。木葉痕が残っている。

20は壺底部で、底径は8.4cmである。摩滅しているが、僅かにハケ目調整の痕が認められる。

21は壺底部で、底径は9.0cmである。摩滅しているが、僅かにハケ目調整の痕が認められる。

22は壺底部で、底径は6.8cmである。全体に摩滅しており、調整の詳細は不明である。

SB03（第４図、第23図、第24図、第25図）

Ｃ－２、Ｄ－２区にかけて検出された。平面プランの形は明確ではないが、楕円形又は隅丸方形を呈すると考えられる。長軸約3.5m、短軸約3.0mの規模で、床が検出している。床の範囲はSB02の範囲にも及んでいるため、SB02よりも新しい住居跡と考えられる。また、想定される住居の中心から南西方向に約0.5mの位置で炉跡が検出されている。炉跡は南北方向に0.4m、東西方向に0.5mの規模で楕円形を呈する。

SB03の南東部分で土器が集中して出土しており、出土遺物は第23図23～31、第24図32～39、43、第25図44である。

23は高坏の坏部で口縁部、接合部が欠損している。ナデ調整が施されていると考えられるが、摩滅しているため詳細は不明である

24は高坏の坏部で、口径18.5cm、外側にはナデ調整が施されている。内側及び接合部は摩滅しており、調整の詳細は不明である。

25は高坏の坏部で、口径18.2cm、外側にナデ調整が施されている。内側は摩滅し調整の詳細は不明、接合部には指頭圧痕が認められる。

26は高坏の坏部で、口径19.8cm、内外面にナデ調整が施されている。また、内側にはヘラ削り調整の痕跡も認められる。

27は高坏接合部の破片である。摩滅しており、調整の詳細は不明である。

28は壺口縁部で、口径12.0cm、内外にナデ調整が施されている。

29は壺頸部の破片で、内側にハケ目調整が施され、外側も摩滅しているがハケ目調整の痕が認められる。頸部には上方から櫛波状文、円形浮文が施され、さらにもう一度櫛波状文が施されている。

30は壺底部で、底径7.0cm、摩滅しており、調整の詳細は不明である。

31は小型壺の底部で、底径3.6cm、底が３㎜程度凹んでいる。

32は甕口縁部で、口径は14.6cm、口縁部内側と外側は胴部にかけてナデ調整が施されている。

33は壺口縁部から胴部で、最大径20.0cm、口径15.1cmである。摩滅が著しく、調整の詳細は不明である。

34は甕口縁部の破片で、最大径は推定で23.8cm、口径は18.4cmである。口縁部は折り返し口縁で、口縁部内側と外側、胴部にかけてハケ目調整の痕跡が認められるが、摩滅が著しく詳細は不明である。

35は小型壺でほぼ完形で出土した。最大径8.2cm、口径6.8cm、底径2.4cm、器高は6.95cmである。口縁部内側と外側にナデ調整が施されている。内側は底部から口縁部に向けてナデつけられ、絞り目のようになっている。胴部下半から底部にかけ摩滅している。胴部に指頭圧痕が認められる。

36は高坏脚部で、底径12.7cm、内側は篦ナデで調整され、外側はナデ調整が施されている。

37は高坏脚部の破片である。裾部も欠損している。摩滅しているが、篦ナデ調整の痕が認められる。

38は土製の紡錘車で、直径4.9cm、厚さが最大で1.3cm、軸を通す孔の直径が0.25cmである。片面が丸味を帯びている。

39は甕の口縁部から胴部で、器径27.8cm、口径17.8cmである。口縁部の内側と外側にはナデ調整が施されている。胴部内側には輪積の痕が残り、指頭圧痕も認められる。胴部上半の外側には煤が付着している。

43は壺で口縁部が欠損している。器径24.8cm、底径が7.4cmである。内側と外側にハケ目調整が施され、内側には輪積の痕も認められる。

44は壺で口縁部から頸部にかけて欠損している。胴部内側、外側にはハケ目調整が施され、胴部上半には上方から櫛刺突文、櫛波状文、櫛刺突文の順に施文されている。

SB01からSB03までは重なって検出されたが、切合いの関係や、出土遺物からSB01、02、03の順に新しくなり、年代はSB01が弥生時代後期、SB02が古墳時代前期、SB03が古墳時代中期の住居跡と考えられる。

SB04（第５図、第24図、第25図、第26図）

Ｂ－１・２、Ｃ－１・２区にかけて検出された。掘り方は検出されていない。土器が集中して出土し、炉跡、焼土が検出されたため、住居跡と想定している。主柱穴も明確ではないが、SX06、SP94、SP98、SP122が相当すると考えられる。その場合の主軸の方向はＮ－12°－Ｗを測る。柱穴間の芯々での距離はSX06とSP98の間が3.1m、SP94とSP122の間が3.1m、SX06とSP94の間が2.3m、SP98とSP122との間が2.3mである。

炉跡は想定される住居跡の中心から南西へ約１mの地点で検出された。南北方向に長い楕円形を呈すると考えられ、南北方向に0.8m、東西方向は北側で0.6m、南側で0.4mの規模である。火皿と考える堅く締まった橙色土は北側の狭い範囲に偏っているが、全体の大きさから考えても実際の火皿はより広範囲にわたっていたものと考えられる。炉跡から約0.9m東の位置で焼土が検出されており、壊れた炉の一部と考えられる。

SB04の北東部分で遺物が集中して出土しており、出土遺物は第24図40～42、第25図45～63、第26図64～68である。

40は壺口縁部の破片で、口径11.8cm、口縁部の内側にはハケ目調整が、胴部内側にはナデ調整が施されている。外側は摩滅が著しく僅かにハケ目調整の痕跡が認められる。胴部に炭化物が付着している。

41は壺胴部から底部で、器径13.2cm、底径5.6cmである。内側、外側とも摩滅が著しいが、外側の胴部から底部にかけての部分で僅かにハケ目調整が認められる。

42は壺の胴部から底部で、器径12.8cm、口径5.6cmである。全体に摩滅が著しく、調整の詳細は不明である。

45は壺の底部で、底径5.5cm、全体に摩滅が著しく、調整の詳細は不明である。

46は壺の底部の破片で、底径は5.2cm、内側と外側にナデ調整が施されている。

47は壺の底部の破片で、底径は6.2cm、内側にはハケ目調整が、外側にはミガキ調整が施されている。

48は折り返し口縁壺の口縁部で、摩滅しているが、内側に縄文が施文され、外側にはハケ目調整が施されている。

49は壺口縁部の小片で、口径は推定で14.2cm、内側と外側にナデ調整が施されている。

50は壺の底部で、底径7.4cm、内側と外側にミガキ調整が施されている。

51は折り返し口縁の高坏の坏部で、口径は20.0cm、口縁部には刻み目が施され、ナデ調整が施されている。

52は高坏の脚部の破片で、円窓が三方にあけられている。内側にナデ調整の痕跡が、外側にハケ目調整の痕跡が認められる。

53は高坏の脚部で、底径は13.0cm、三方に円窓があけられている。外側にはミガキ調整が施されている。

54は高坏脚部の破片で、円窓が三方にあけられている。摩滅が著しく、内側に僅かに篦ナデの調整痕が認められる。

55は高坏脚部の小片で、底径は18.1cm、内側にハケ目調整が施されている。外側は摩滅が著しいが、赤彩の痕跡が残されている。

56は高坏の口縁部で、口径は8.8cmである。摩滅しているが、内側にはナデ調整の痕跡が認められ、外側にはハケ目調整が施されている。

57は小型壺の底部の破片で、底径は推定で4.6cmである。内側にはナデ調整が施され、外側は摩滅している。

58は甕口縁部の破片で、口径は14.1cm、口縁部から胴部にかけての外側にハケ目調整が施されている。

59は甕の口縁部の破片で、内側と外側にハケ目調整が施されている。

60はＳ字口縁甕の口縁部の破片で、口径は推定で16.0cm、ナデ調整が施され、頸部にかかる部分に僅かにハケ目調整の痕跡が認められる。

61はＳ字口縁甕口縁部の破片で、口径は13.7cm、内側と外側にナデ調整が施されている。

62はＳ字口縁甕の口縁部から胴部の破片で、ナデ調整が施され、頸部外側には斜格子文が施文されている。

63はＳ字口縁甕の口縁部から胴部で、口径は17.7cm口縁部内側と頸部から胴部にかけてハケ目調整が施されている。

64はＳ字口縁甕の接合部で、摩滅が著しいが、接合部外側にハケ目調整が施されている。

65は台付甕の接合部で、内側と外側にハケ目調整が施されている。

66は台付甕の台部で、底径は9.4cm、内側と外側にハケ目調整が施されている。台部内側の下方と接合部においてナデ調整が施されている。

67はＳ字口縁甕の台部で、底径は9.6cm、全体に摩滅が著しい。底部内側に煤が付着し、接合部の外側にハケ目調整の痕跡が僅かに認められる。

68は台付甕の台部で、底径は10.0cm、内側と外側にハケ目調整が施されている。台部内側の接合部に近い部分でナデ調整が施されている。

SB05（第３図、第26図、第37図）

Ｃ－３区内に想定されるが、遺構検出時に平面形が確認されたのみで、覆土も薄く明確な掘り方は検出されなかった。主柱穴と考えられる小穴、炉跡、床なども検出されていない。

想定範囲内から、祭祀に関わるとされる特徴ある遺物が出土していることもあり、住居跡と考えたい。

出土遺物は第26図69～71、第37図252である。

69は器台の脚部で、底径10cm、円窓が三方にあけられている。外側にミガキ調整が施されている。

70は折り返し口縁壺の口縁部で、口径は19.6cm、口縁部内側と外側に縄文が施文されている。口縁部から頸部に向かう部分でハケ目調整が施されている。

71は鉢で、器径11.2cm、口径11.7cm、器高が8.2cmである。内側にはナデ調整が施され、外側は摩滅しているが、ハケ目調整の痕跡がわずかに認められる。

252は滑石製の勾玉で、縦1.5cm、横0.6cm、厚さ0.3cmである。

SB05から出土した遺物はいずれも祭祀的な意味合いが強く、この地点に集落の祭祀をつかさどる施設があったのではないかと推測される。

SB06（第３図、第26図、第27図、第28図）

Ｂ－３区内、SB05東側、SB07北側の位置に想定される。SB05同様明確な遺構は検出されなかった。遺物が集中して出土しており、住居跡と想定した。

出土遺物は第26図72～76、第27図77～83、第28図84～87、89～91である。

72は壺口縁部の破片で、口径20.2cm、内側と外側にナデ調整が施されている。また、内側には指頭圧痕も認められ、外側には煤が付着している。

73は台付甕で、口縁部から頸部が欠損している。器径は推定で27.5cm、底径が10.0cmである。内側と外側に煤が付着している。胴部内側には輪積の痕跡が残り、指頭圧痕が認められる。外側にはハケ目調整の痕がわずかに認められる。台部は内側、外側共にナデ調整が施されている。

74は壺口縁部から頸部にかけての破片で、口径は16.2cmである。摩滅が著しく、調整の詳細は不明だが、口縁部外側で僅かにハケ目調整の痕跡が認められている。

75は壺口縁部から頸部の破片で、口径は11.4cmである。全体に摩滅しており、調整の詳細は不明である。

76は甕の口縁部から胴部にかけての破片で、口径は19.8cm、摩滅が著しく、調整の詳細は不明である。胴部内側には輪積の痕、篦ナデ調整の痕跡が認められる。

77は壺の頸部から胴部上半にかけての破片で、器径は40.4cmである。全体的に摩滅が著しく調整の詳細は不明である。頸部に僅かにハケ目調整の痕跡が認められる。

78は小型壺で、器径は15.8cm、口径は12.2cm、底径5.0cm、器高は16.1cmである。摩滅しており、調整の詳細は不明だが、頸部外側にナデ調整の痕跡が認められる。内側にもナデ調整が施され、指頭圧痕が認められる。

79は縄文土器深鉢底部の小破片で、底径は推定で11.6cmである。

80は小型鉢で器径7.0cm、口径6.5cm、底径2.6cm、器高3.4cmである。摩滅が著しく調整の詳細は不明である。

81は高坏で、脚部の裾部が欠損している。全体に摩滅が著しく、坏部にナデ調整の痕跡が、脚部にミガキ調整の痕跡が認められる。

82は高坏で、脚部の裾部が欠損している。口径は18.4cm、坏部外側は摩滅し調整の詳細は不明である。脚部外側はミガキ調整が施され、内側には指頭圧痕が認められる。

83は高坏で、口径18.4cm、底径11.7cm、器高13.6cmである。摩滅が著しく、坏部内側にナデ調整の痕跡が認められる。

84は高坏で、口径17.4cm、底径11.8cm、器高11.6cmである。坏部の内側と外側、裾部にはナデ調整が施され、脚部にはミガキ調整が施されている。脚部の内側は絞り目状にナデ調整が施されている。

85は高坏で、口縁部が欠損している。底径は13.0cmである。全体的に摩滅しており、調整の詳細は不明である。

86は高坏接合部から脚部で、底径13.6cm、接合部外側にハケ目調整が施されている。脚部内側はナデ調整が施され、外側は摩滅しており、調整の詳細は不明である。

87は高坏の接合部の破片で、外側は摩滅し調整の詳細は不明である。内側は絞り目状にナデ調整が施されている。

89は高坏の脚部で、底径6.8cm、内側にナデ調整が、外側にミガキ調整が施されている。

90は土師器高坏の脚部で、底径11.8cm、内側と外側裾部にナデ調整が施されている。外側に

はミガキ調整の痕跡も認められる。

91は土師器高坏脚部で、底径は推定で13.6cmである。内側にはナデ調整が施され、外側は摩滅しており、ハケ目調整、ナデ調整の痕跡が認められる。

SB07（第６図）

Ｄ－３・４区にかけて検出された。掘り方は北西部分のみが検出された。南西部分はSD01と切合い明確では無く、東半分は調査区外となっている。平面プランの形は隅丸方形または楕円形を呈するものと考えられる。主柱穴は確認されていない。調査区境界付近にて、床が検出されている。長さ3.8m、幅1.7mの規模で検出され、東側の調査区外へと続いている。住居跡北寄りで炉跡が検出されている。直径約0.5mの歪な円形を呈する。

出土遺物は縄文土器、弥生土器、土師器と考えられるものが出土しているが、小破片のみであり、図化できるものは無かった。

SB08（第３図）

検出状況から、Ｂ－４・５、Ｃ－４・５区にかけて想定されたが、明確な遺構の検出や、伴う遺物の出土は無かった。

SB09（第７図、第28図）

Ｄ－４・５区にかけて検出された。掘り方は南東の一部分のみ検出され、床と炉跡が検出された。明確な主柱穴は確認できなかった。床は長さ3.3m、幅2.3mの範囲で検出された。炉跡は床検出範囲の西端で検出された。炉跡は長軸方向に約0.8m、短軸方向に約0.4mの大きさで検出されたが、西側は壊れていると考えられ、実際はもう少し大きい炉であったと考えられる。

出土遺物は第28図88、92である。

88は土師器高坏の脚部で、内側に絞り目状にナデ調整が施されている。外側は摩滅し、調整の詳細は不明である。

92は土師器高坏の脚部で、底径11.3cm、内側にはナデ調整が施され、外側にはミガキ調整が施されている。裾部は摩滅し、調整の詳細は不明である。

SB10

遺構検出状況からＤ－５・６区に想定されたが、明確な遺構、遺物の検出は無かった。

SB11（第８図）

Ｃ－６、Ｄ－６区にかけて検出された。SD01と切合う北西部分を除いて検出されている。平面形は四角形を呈し、主軸の方向はＮ－12°－Ｗを測る。東西方向は5.2m、南北方向は約５mの規模で、壁溝が巡らされている。掘り方は検出面から約20cmの深さで、壁溝部分はさらに5cm程度低くなっている。主柱穴はSP235、SP238、SP239、SP240で構成され、柱穴間の芯々での距離はSP235とSP238の間が2.5m、SP240とSP239との間が2.5m、SP235とSP240の間が2.5m、SP238とSP239の間が2.7mである。

図化できる遺物は出土していない。

SB12

遺構検出状況からＡ－１区、調査区北端に想定されたが、明確な遺構、遺物は検出されていない。

SB13（第９図）

Ａ－３区内で北東の角の部分が検出された。平面形は隅丸方形を呈すると考えられるが、大半が調査区外となるため詳細は不明である。掘り方は検出面から約10cmの深さであった。主柱穴は確認できていないが、SP152はその内の一つと考えられる。炉跡などの住居に伴う遺構や遺物は出土していない。

SB14（第10図）

Ａ－３・４、Ｂ－３・４区にかけて床及び炉跡が検出されたため、住居跡と想定した。掘り方は検出されず、平面形、規模等は不明である。床は長さ2.7m、幅2.1mの範囲で検出され、床の検出範囲のほぼ中央で炉跡が見つかっている。炉跡は長軸が1.0m、短軸が0.8mを測り、南北方向に長い楕円形を呈し、残存状況は良好であった。最上部の明赤褐色土は１～４cmの厚さで、非常に固くしまっている。

SB14の想定範囲内から図化できる遺物は出土していない。

なお、SB01の北側、Ｂ・Ｃ－４区にかけて浅い窪みが検出されている。南北方向に3.42m以上、東西方向に3.14m以上の規模で、隣接する住居跡とも考えたが、それに伴う遺構や遺物の検出はなく、詳細は不明である。

SB15（第11図、第28図）

Ａ－４・５区にかけて検出された。平面形は四角形を呈する。大きさは南北方向に6.1mを測り、西側が調査範囲外となっているため東西方向の長さは不明だが、平面形からも６m程度であると推測される。主軸の方位はほぼ真北である。掘り方の深さは北側で検出面から15cmを測り、南に行くに従い浅くなっている。周囲には壁溝が巡らされており、壁溝は最も深いところで、検出面から22cmを測る。主柱穴はSP263、SP183及び調査区域外の遺構にて構成されると考えられる。SP263とSP183の間の距離は芯々で3.3mを測る。床の検出は無く、炉跡と考えられる遺構が２箇所検出されている。西側の炉跡は長軸で0.8m、短軸で0.5mの大きさ、東側の炉跡は長軸で0.4m、短軸で0.3mの大きさであるが、どちらも歪な形をしており、後世の撹乱等により壊されたと考えられる。

SB15から出土した遺物は第28図93～95である。

93は弥生土器の甕口縁部から胴部にかけての破片で、器径21.1cm、口径18.6cmである。口縁部内側と外側にハケ目調整が施されている。口縁部には刻み目も施されている。胴部には煤が付着している。

94は土師器のＳ字口縁甕の口縁部から胴部にかけての破片で、口径は11.2cm、口縁部にはナデ調整が施されている。胴部外側は、縦方向のハケ目調整の後、横方向のハケ目調整が施されている。胴部内側には指頭圧痕が認められる。

95は土師器高坏の坏部で、口径16.8cm、外側にミガキ調整が施されている。

SB16（第12図）

Ｂ－５・６区にかけて西側の掘り方のみ検出された。平面プランの形、規模等は不明である。SB16から図化できる遺物は出土していない。

SB17（第13図、第28図）

Ａ－６・７、Ｂ－６・７区にかけて検出された。平面の形は四角形を呈し、南北方向に5.4mを測り、東西方向は遺構同士の切り合いのため明らかではないが、５～5.5m程度と考えられる。主軸の方位はＮ－18°－Ｅを測る。掘り方は深い部分で、検出面から10cm下がる。明確な主柱穴は確認されていない。

SB17のほぼ中央を通るSD03により壊されているが、床と炉跡と考えられる焼土が検出された。

SB17から出土した遺物は第28図96～100である。

96は土師器甕口縁部から胴部の破片で、口径は17.1cm、磨滅が著しく、調整の詳細は不明である。

97は土師器高坏の脚部で、内側に絞り目状にナデ調整が施されている。外側は摩滅し、調整の詳細は不明である。

98は土師器の小型鉢で、口径は推定で10.5cm、底径4.7cm、器高は推定で7.2cmである。胴部内側にナデ調整が、底部内側にハケ目調整が施されている。外側はヘ篦ナデで調整されている。手づくねで製作されたと考えられ、形が歪である。

99は土師器の小型鉢で、胴部の内側、外側にハケ目調整が施されている。底部内側に指頭圧痕が認められる。

100は土師器の小型鉢で、口径6.6センチ、底径3.45cm、器高4.9cmである。内側は絞り目状にナデ調整が施され、手づくねで製作されたと考えられ、形が歪である。

SB18

遺構検出状況から、Ｂ－３・４区内に想定されたが、明確な遺構、遺物は検出されていない。

SB19（第９図）

Ｂ－３・４区にかけて住居跡掘り方の北東部分が検出された。掘り方は深い部分で検出面から10cm、南西に行くに従い浅くなり消滅している。角の部分のみの検出のため明らかではないが、平面形は四角形を呈するものと考えられる。主柱穴は確認されなかったが、床の一部と炉跡が検出されている。床は長さ2.3m、幅２mの範囲で検出された。そのほぼ中央で炉跡が検出されており、直径0.4mの円形を呈す。

明らかにSB19に伴うと考えられる遺物は出土していない。

SB20（第13図）

Ｂ－６・７区にかけて検出された。SB17の東側に位置する。主柱穴など明確な遺構は検出されなかったが、床と炉跡と考えられる焼土が検出した。床は隣接するSB17の掘り方の形状に切られているため、SB17よりも古い住居跡と考えられる。

明らかにSB20に伴うと考えられる遺物は出土していない。

② 平地住居跡

遺構検出時に溝状遺構として検出し、番号を付与したため、遺構の略号はそのままSDで記載する。

SD01（第14図、第15図、第29図）

Ｂ－４～６、Ｃ－４～６、Ｄ－４～６区にかけて検出された。四方に溝が施され、規模は南北方向の溝の外側で10.0m、内側で8.7m、東西方向の溝の外側で9.9m、内側で9.1mを測る。Ａ－Ａ'軸の方位はN－27°－Wを測る。Ｂ－４区、Ｄ－４区、Ｂ－６区に角があり、平面の形はほぼ正方形とである。南東の角はSB11と切合っているため確認できなかったが、Ｄ－６区内に想定される。

溝の幅は検出面で0.3～1.1m、下端で0.1～0.7mを測る。底の検出面からの深さは0.1～0.4mである。土層の観察からSB11より先に作られていることが確認できた。

４箇所の主柱穴と考えられる小穴が確認されている。Ｃ－Ｃ'の柱間の距離は芯々で4.9m、Ｄ－Ｄ'間の距離は5.4m、Ｅ－Ｅ'間の距離は5.3m、Ｆ－Ｆ'の距離は5.2mを測る。Ａ－Ａ'とＢ－Ｂ'の交点から北東に1.2mの地点で炉跡が検出されている。

SD01に伴う遺物で図化できたものは第29図101から104である。

101は土師器壺の口縁部から胴部にかけての破片で、器径17.5cm、口径11.0cmである。口縁部の内側、外側はナデ調整が施されている。頸部は念入りにナデつけられており、指頭痕が残る。

102は土師器壺底部の破片で、底径5.6cm、摩滅が著しく、調整は不明である。

103は土師器壺底部の破片で、底径8.0cm、胴部は摩滅が著しく調整の詳細は不明だが、底部に木葉痕が残る。

104は土師器高坏の脚部で、底径10.2cmである。摩滅しているが、僅かにミガキ調整の痕跡が認められる。

③ 溝状遺構

溝状遺構は２箇所検出されている。

SD02（第16図）

Ａ－５～９区にかけて検出された。南端近くで浅くなり、一部消滅しているが、遺構検出時には一続きの遺構であったため、一体のものとして扱う。南北方向の長さは18.6mを測り、幅は最大で0.8m、最小で0.4mを測る。検出面からの深さは、最深で0.4mを測る。SB15、17を切っており、より新しい遺構と考えられるが、明らかにSD02に伴うと考えられる遺物はなく、詳細は不明である。

SD03（第17図）

Ｂ－５～７区にかけて検出された。中間で浅くなり一部消滅しているが、遺構検出時には一続きの遺構であったため、一体のものとして扱う。南北方向の長さは12.1mを測り、幅は最大で0.8m、最小で0.5mを測る。SB17を切っており、SD02と同じく、より新しい遺構と考えられる。SD02とほぼ並行しているため、同様の性格を持つ遺構ではないかと考えられるが、詳細は不明である。

明らかにSD03に伴う遺物は確認されていない。

④ 布掘り掘立柱建物跡

布掘り掘立柱建物跡は１軒の片側分の柱列が確認された。

SH01（第18図）

Ｂ－４・５区にかけて検出された。桁行３間の柱列と考えられる。布掘りの長さは外側で7.4ｍを測り、幅は最大で0.9m、最小で0.7ｍを測る。外側の柱同士の距離は6.5ｍで、２～2.3mの間隔で柱が立てられたと想定される。Ａ－Ａ'の方位はＮ－71°－Ｅを測る。柱穴の掘り方は布掘りの中に収めたため、楕円形または長方形を呈している。それぞれの長軸の長さは、1.2～1.6ｍまでさまざまであるが、短軸方向はすべて0.8m前後で、布掘りの幅に収まっている。西端の柱穴は幅が1.0ｍで、これのみが布掘りの幅からはみ出している。柱穴の深さは検出面から0.2から0.4ｍを測る。

梁間の反対側の柱列が検出されていないため、建物の規模は不明だが、桁行6.5m、梁間３ｍ以上の建物跡になると推測される。

SH01に伴う図化できる遺物の出土はなかった。

⑤ 土坑

遺構検出時に性格の不明なものをSXとした。番号は11まで付与したが、調査の結果、遺構と確認できたものを記載している。

SX07（第19図、第29図、第30図）

Ｂ－１・２区にかけて検出された。Ａ－Ａ'間で3.7m、Ｂ－Ｂ'間で3.5ｍを測り、平面形は歪な円形を呈している。遺構の肩の部分から緩やかに傾斜し、底の形状は椀状に丸みを帯びている。

SX07から出土した遺物は第29図105～127、第30図128～132である。

105は土師器S字口縁甕の口縁部の小破片である。ナデ調整が施されている。

106は土師器S字口縁甕の口縁部の小破片である。ナデ調整が施されている。

107は土師器S字口縁甕の接合部で、接合部の直径は約6cm、ハケ目調整の痕跡が僅かに認められる。

108は土師器台付甕の台部で、底径9.8cm、内側はナデ調整が施され、下方にはハケ目調整も施されている。底部内側、台部外側にはハケ目調整が施されている。

109は土師器甕口縁部の破片で、口径13.8cm、口縁部内側、外側にナデ調整が施され、頸部付近から胴部にかけハケ目調整が施されている。

110は土師器壺口縁部の破片で、口径15.2cm、内側と外側にハケ目調整が施されている。外側はハケ目調整の上からナデ調整が施されている。

111は弥生土器の壺口縁部の破片で、口径11.6cm、内側には縄文が施文され、外側はハケ目調整が施されている。

112は土師器甕の口縁部の破片で、口径21.0cm、内側と外側にハケ目調整が施されている。

113は土師器壺の底部の破片で、底径6.8cm、内側にハケ目調整が施され、外側は摩滅しているが、ミガキ調整の痕跡が僅かに認められる。

114は土師器壺の底部破片で、底径7.6cm、内側は篦削り調整が施されている。外側にはミガキ調整が施され、底に木葉痕が残る。

115は土師器の小型壺で、口縁部が欠損している。器径7.8cm、底径2.8cmである。内側と外側にはナデ調整が施され、底部外側は篦削り調整が施されている。

116は土師器の小型壺で、器径8.2cm、口径9.8cm、底径4.2cm、器高8.5cmである。全体にナデ調整が施され、頸部外側に僅かにハケ目調整の痕跡が残る。

117は弥生土器の壺口縁部の小破片で、口径は推定で8.6cm、口縁部には刻み目が施されている。

118は土師器小型壺の胴部で、器径8.1cm、内側は絞り目状にナデ調整が施されている。外側は摩滅しているが、ミガキ調整の痕跡が僅かに認められる。

119は土師器壺の底部で、底径3.0cm、磨滅が著しく調整の詳細は不明である。

120は土師器壺の底部で、底径4.8cm、底部外側の中央部が押し込まれ高台状になっている。内側にはナデ調整が施されているが、外側は摩滅しており、調整の詳細は不明である。

121は土師器小型鉢で底径4.4cm、器高4.4cmである。内側にはナデ調整が施され、外側は篦削り調整が施されている。

122は土師器高坏で、裾部が欠損している。口径18.8cm、坏部内側は摩滅し調整の詳細は不明である。外側はナデ調整が施されている。脚部内側は絞り目状にナデ調整が施され、外側にはミガキ調整が施されている。

123は土師器高坏で、口径15.0cm、底径11.4cm、器高は推定で9.7cmである。全体の磨滅が著しく、調整の詳細は不明である。脚部内側には絞り目状にナデ調整が施されている。

124は土師器小型高坏の接合部で、坏部内側にハケ目調整が施されている。外側は摩滅しており、調整の詳細は不明である。

125は土師器高坏の脚部で、全体の磨滅が著しく、調整の詳細は不明である。

126は土師器高坏の脚部で、内側にナデ調整が、外側にハケ目調整が施されている。

127は土師器高坏の脚部で、内側にハケ目調整が施されている。外側は摩滅し、調整の詳細は不明である。

128は土師器高坏の接合部で、内側にナデ調整、外側にミガキ調整が施されている。三方に円窓があけられている。

129は土師器高坏の接合部で、磨滅しているが、外側にミガキ調整の痕跡が僅かに認められる。三方に円窓があけられている。

130は土師器器台で外側にハケ目調整が施されている。

131は土師器高坏の口縁部で、口径は推定で8.4cm内側、外側にミガキ調整が施されている。

132は土師器器台の脚部で、外側は摩滅が著しく調整の詳細は不明である。底部内側にハケ目調整が施されている。

SX08（第20図、第30図）

Ａ－２区で検出された。平面形は長方形を呈し、長軸の長さは1.1m、短軸の長さは0.9m、検出面からの深さは0.5mを測る。長軸の方向はＮ－82°－Ｅを測る。内部には明赤褐色土が堆積していた。

SX08から出土した遺物は、第30図133、134である。

133は土師器の小型丸底壺で、器径7.8cm、口径は推定で7.4cm、底径4.8cmである。口縁部内側

から外側にかけてナデ調整が施され、頸部から胴部にかけてはハケ目調整の跡が認められ。胴部下半から底部にかけてヘラ削り調整が施されている。

134は土師器小型壺の底部から胴部にかけての破片で、底径3.4cm、内側外側ともナデ調整が施されている。

SX09（第20図、第30図）

A－4区、SB15壁溝を切る形で検出された。平面形は円形を呈し、A－A'間で0.8m、B－B'間で0.9mを測る。検出面の深さは最深で0.3mを測る。

SX09から出土した遺物は、第30図135～138、140～142である。

135は土師器壺の口縁部で、口径14.4cm、内側にハケ目調整が施されている。

136は土師器S字口縁甕の口縁部で、口径15.8cm、口縁部はナデ調整が施され、頸部から胴部にかけてハケ目調整が施されている。内側はナデ調整が施され、指頭圧痕が認められる。

137は土師器S字口縁甕の口縁部で、口径15.8cm、口縁部はナデ調整が施され、頸部から胴部にかけてハケ目調整が施されている。内側は摩滅しており、調整の詳細は不明である。

138は土師器S字口縁甕の口縁部で、口径14.6cm、口縁部はナデ調整が施され、頸部から胴部にかけてハケ目調整が施されている。内側はナデ調整が施され、指頭圧痕が認められる。

140は土師器S字口縁甕の台部で、底径8.0cm、内側にナデ調整、外側にハケ目調整が施されている。

141は土師器高坏の坏部で、口径17.6cm、内側と外側にミガキ調整が施されている。

142は土師器小型壺で、器径10.1cm、口径9.3cm、底径4.2cm、器高11.3cmである。口縁部内側と外側全体にミガキ調整が施され、胴部内側にはハケ目調整が施されている。

SX11（第20図、第30図）

B－9区で検出された。長軸が1.3m、短軸が1.0m、検出面からの深さは最深で0.6mを測る。

SX11から出土した遺物は、第30図143、144である。

143は弥生土器の壺口縁部の破片で、磨滅が激しいが口縁部内側と外側にわずかに縄文の施文が認められる。外側の口縁部下方にキザミ目が施されている。

144は土師器坏の底部の破片で、底径6.3cm、高台が張り付けられている。SX11内から出土しているが、形式的に新しく後世の混入と考えられる。

⑥ 小穴

小穴は数多く検出されているが、特徴的な遺物が出土し、図化できたものを記載する。

SP88（第21図、第30図、第31図）

C－4区、SD01の北東の角付近にて検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸が0.9m、短軸が0.66m、検出面からの深さは最深で0.22を測る。土層の観察による遺構の切りあいの関係からSD01よりも新しい遺構と考えられる。

SP88から出土した遺物は第30図148、第30図159である。

148は土師器小型鉢で、器径14.0cm、口径12.6cm、底径5.6cm、器高12.7cmである。

159は鉄製の刀子で、全長12.5cm、刃部の長さ8.5cm、茎部4.0cmである。幅は刃部で最大1.8cm、

茎部で1.0cmである。茎部には柄材に使用された鹿角が残存している。

その他のSPから出土した遺物を以下に記載する。（第30図、第31図）

SP82から第30図145,147が出土した。

145は弥生土器の高坏接合部で、坏部内側と脚部外側にミガキ調整が施され、坏部外側と脚部内側にハケ目調整が施されている。

147は弥生土器の壺胴部の小破片で、櫛描流水文が施文されている。

SP316から第30図146が出土した。

146は土師器台付甕の接合部で、内側にハケ目調整が施されている。外側は摩滅しているが、僅かにハケ目調整の痕跡が認められる。

SP290から第30図149が出土した。

149は土師器小型鉢で、口径9.0cm、底径4.2cm、器高6.9cmである。口縁部内側にハケ目調整、外側にナデ調整が施されている。胴部から底部にかけては内側、外側ともにナデ調整が施されている。

SP146から第30図150が出土した。

150は土師器壺の底部の破片で、底径4.2cm、内側にハケ目調整が施されている。

SP175から第30図151が出土した。

151は弥生土器の壺口縁部の破片で、口径17.2cm、内側にハケ目調整が施され、口縁部にはわずかに縄文の施文が認められる。赤彩がわずかにわずかに残存している。

SP22から第30図152が出土した。

152は弥生土器の折り返し口縁壺の口縁部で、口径20.6cm、口縁部には縄文が施文され、刻み目も施されている。口縁部から頸部にかけての外側にはハケ目調整が施されている。また、口縁部内側には円形浮文が３個ずつ、三方に貼り付けられている。

SP272から第31図153が出土した。

153は土師器壺で、器径15.2cm、口径11.6cm、底径4.0cm、器高17.4cmである。全体に摩滅が著しく調整の詳細は不明だが、内側にハケ目調整、ナデ調整の痕跡が僅かに認められる。外側胴部下半に煤が付着している。

SP273から第31図154が出土した。

154は土師器高坏の坏部で、口径13.6cm、内側と外側にミガキ調整が施されている。

SP313から第31図155、156が出土した。

155は土師器小型高坏の坏部で、磨滅が著しく調整の詳細は不明である。

156は土師器高坏の接合部で、内側にナデ調整、外側にミガキ調整が施されている。

SP181から第31図157が出土した。

157は土師器高坏の脚部で、外側にミガキ調整が施されている。三方に円窓があけられている。

SP328から第31図158が出土した。

158は土師器高坏の底部で、底径8.8cm、磨滅が著しく調整の詳細は不明だが、外側にミガキ調整の痕跡が僅かに認められる。

（2） 遺物

遺構に伴わず出土した遺物の内、図化が可能であったものを記載する。

①弥生土器、土師器

第31図160～165は台付甕で、口縁部の内側と外側にハケ目調整が施されている。163の接合部には粘土帯が貼り付けられ、篦でナデつけられている。166は丸底甕で、摩滅が著しく、調整の詳細は不明である。

第32図167、168、170～178は壺である。167、178の底部には木葉痕が残されていた。168は弥生土器の壺の小破片で、櫛波状文、山形文が施文されている。171は弥生土器の壺の小破片で、流水文が施文されている。175は弥生土器の壺頸部で、櫛刺突羽状文、簾状文、直線文が施文されている。176は弥生土器の壺で、頸部に櫛波状文、簾状文、扇状文が施文され、その下方はハケ目調整とミガキ調整が施されている。第33図179～193、第34図194～197は高坏で、187は焼成不良のためか口縁部が大きく歪んでいる。192は口縁部の小破片だが、赤彩が残されていた。198は土師器鉢で、器径9.9cm、口径9.9cm、底径5.2cm、器高3.9cmである。199～202は土師器の小型壺で、200は手づくねで制作されたためか歪な形をしている。201は底部の破片で、赤彩が残されていた。203、204は土師器の器台である。203には円窓が三方にあけられ、204は六方に円窓があけられている。

②縄文土器

第32図169は深鉢口縁部で山形文が施文されている。第35図205は押型文土器の破片である。208、209は深鉢の把手である。210～212、214～218、第36図226～228は深鉢の口縁部である。239は深鉢の底部である。

③石器

第36図240、241は刃部が作り出されており、何らかの加工具と考えられる。242, 243は石鏃、244は加工前の剥片、245は石核である。第37図246、247は打製石斧、248は叩石、249～251は磨り石である。第38図253は使用痕があり、歪な形状をしているが石皿と同様の用途で使われた道具と考えている。

吉岡下ノ段遺跡第11次調査　出土遺物観察表

（単位：cm）

図版番号	番号	調査区	遺構	種別	細別	器　径	口径	底径	器高	残存	色調
22	1	D-1	SB01	弥生土器	くの字甕	17.6	15.3	9.1	21.8	100%	橙色
22	2	D-1	SB01	弥生土器	くの字甕		16.4			口縁部のみ30%	にぶい黄褐色
22	3	D-1	SB01	弥生土器	くの字甕		17.4			口縁部のみ25%	明黄褐色
22	4	D-1	SB01	弥生土器	くの字甕	19.2	19.2			口縁部から胴部25%	にぶい褐色
22	5	D-1	SB01	弥生土器	壺		15.0			口縁部のみ20%	橙色
22	6	D-1	SB01	土師器	甕		17.2			口縁部のみ10%	明褐色
22	7	D-1	SB01	弥生土器	壺	20.4		7.0		頸部～底部90%	橙色
22	8	D-2	SB02	土師器	S字甕	(17.4)	12.4			口縁部～胴部40%	にぶい橙色
22	9	D-2	SB02	土師器	S字甕		15.9			口縁部のみ20%	橙色
22	10	D-2	SB02	土師器	S字甕	(29.1)	20.0			口縁部～胴部40%	にぶい黄橙色
22	11	D-2	SB02	弥生土器	くの字甕					2×4	にぶい黄褐色
22	12	D-2	SB02	土師器	小型壺			2.4		胴部下半40%	浅黄橙色
22	13	D-2	SB02	土師器	くの字甕					接合部のみ	浅黄色
23	14	D-2、C-1	SB02、SB04	土師器	二重口縁壺		25.1			口縁部～頸部90%	明黄褐色
23	15	D-2	SB02	土師器	二重口縁壺		19.4			口縁部のみ30%	橙色
23	16	D-2	SB02	弥生土器	壺					頸部のみ25%	暗灰黄色
23	17	D-2	SB02	土師器	壺	(20.0)				胴部のみ30%	明黄褐色
23	18	D-2	SB02	弥生土器	壺					3×2.5	にぶい燈色
23	19	D-2	SB02	弥生土器	壺			10.0		底部のみ20%	浅黄色
23	20	D-2	SB02	土師器	壺			8.4		底部のみ75%	浅黄色
23	21	D-2	SB02	土師器	壺			9.0			にぶい褐色
23	22	D-2	SB02	土師器	壺			6.8			橙色

地図データ国土地理院長の承認を得て使用

（単位：cm）

図版番号	番号	調査区	遺構	種別	細別	器　径	口径	底径	器高	残存	色調
23	23	D-2	SB03	土師器	高坏					坏部のみ	明黄褐色
23	24	C-2	SB03	土師器	高坏		18.5			坏部のみ60%	橙色
23	25	C-2	SB03	土師器	高坏		18.2			坏部のみ60%	橙色
23	26	C-2	SB03	土師器	高坏		19.8			坏部のみ45%	
23	27	D-2	SB03	土師器	高坏						橙色
23	28	D-2	SB03	弥生土器	壺		12.0			口縁部のみ60%	にぶい橙色
23	29	C-2	SB03	弥生土器	壺					頸部のみ	黄橙色
23	30	D-2	SB03	土師器	壺			7.0		底部のみ100%	橙色
23	31	C-2	SB03	土師器	壺			3.6		底部のみ100%	橙色
24	32	C-2	SB03	土師器	壺		14.6			口縁部～胴上部%	浅黄橙色
24	33	D-2	SB03	土師器	壺	20.0	15.1			口縁部～胴上半部50%	にぶい黄褐色
24	34	C-2	SB03	土師器	甕	(23.8)	18.4			口縁部～胴上半部%	橙色
24	35	D-2	SB03	土師器	小型壺	8.2	6.8	2.4	6.95	100%	にぶい黄橙色
24	36	D-2	SB03	土師器	高坏			12.7		40%	橙色
24	37	D-2	SB03	土師器	高坏					40%	にぶい橙色
24	38	D-2	SB03		紡錘車	径4.9			1.3	100%	にぶい黄褐色
24	39	D-2	SB03	土師器	壺	27.8	17.8			口縁部～胴上半部40%	にぶい黄橙色
24	40	C-1北	SB04	土師器	壺		11.8			口縁部～胴上部15%	にぶい黄橙色
24	41	C-1	SB04	土師器	壺	13.2		5.6		20%	にぶい黄褐色
24	42	C-2東	SB04	土師器	壺	12.8		5.6		30%	橙色
24	43	C-2	SB03	土師器	二重口縁壺	24.8		7.4		40%	橙色
25	44	C-2	SB03	土師器	壺	24.3		7.7		80%	明赤褐色
25	45	C-1、2	SB04東	土師器	壺			5.5		20%	にぶい黄橙色
25	46	C-1	SB04北	土師器	壺			5.2		10%	にぶい橙色

（単位：cm）

図版番号	番号	調査区	遺構	種別	細別	器　径	口径	底径	器高	残存	色調
25	47	C-1、2	SB04東	土師器	壺			6.6		底部のみ20%	灰黄褐色
25	48	C-1	SB04北	弥生土器	壺		(14.2)			6×3	にぶい橙色
25	49	C-1	SB04東	土師器	壺		(10.0)			3×2.5	にぶい黄褐色
25	50	C-1	SB04	土師器	壺			7.4		50%	にぶい黄褐色
25	51	C－1	ＳＢ04	弥生土器	高坏		20.0			坏部のみ40%	明黄色
25	52	C－1、2	ＳＢ04	土師器	高坏					5×5	橙色
25	53	C－1、2	ＳＢ04東	土師器	高坏			13.0		脚部のみ90%	橙色
25	54	C－1、2	ＳＢ04	土師器	高坏					脚部のみ40%	浅黄橙色
25	55	C－2	ＳＢ04	土師器	高坏			18.1		脚部のみ10%	にぶい橙
25	56	C－1	ＳＢ04北	土師器	高坏		8.8			坏部のみ30%	にぶい橙色
25	57	C－1	ＳＢ04北	土師器	小型鉢			4.6		50%	にぶい橙色
25	58	C－1、2	ＳＢ04東	土師器	くの字甕		14.1			口縁部のみ40%	にぶい橙色
25	59	C－1、2	ＳＢ04東	土師器	くの字甕		17.5			口縁部のみ20%	にぶい黄橙色
25	60	C－1	ＳＢ04北	土師器	Ｓ字甕		16.0			5%	明赤褐色
25	61	C、D－2	ＳＢ04東	土師器	Ｓ字甕		13.7			6×2.5	にぶい橙色
25	62	C－1、2	ＳＢ04	土師器	Ｓ字甕		16.8			口縁部のみ60%	にぶい橙色
25	63	C－1、2	ＳＢ04東	土師器	Ｓ字甕	25.0	17.7			40%	灰黄褐色
26	64	C－1、2	ＳＢ04東	土師器	Ｓ字甕					5%	橙色
26	65	C－1、2	ＳＢ04東	土師器	くの字甕					台部のみ80%	にぶい橙色
26	66	C－1	ＳＢ04北	土師器	くの字甕			9.4		台部のみ50%	にぶい黄橙色
26	67	C－1	ＳＢ04北	土師器	Ｓ字甕			9.6		台部のみ40%	にぶい黄褐色
26	68	C－2	ＳＢ04東	土師器	くの字甕			10.0		台部のみ95%	灰黄褐色
26	69	C、D－3	ＳＢ05　ＳＰ104	土師器	器台			10.0		45%	橙色
26	70	C－3	ＳＢ05西	弥生土器	折返口縁壺		19.6			7×5	橙色
26	71	C－3	ＳＢ05	土師器	小型鉢	11.2	11.7		8.2	90%	橙色

（単位：cm）

図版番号	番号	調査区	遺構	種別	細別	器　径	口径	底径	器高	残存	色調
26	72	D－3	SB06	土師器	壺		20.2			12×5.5	橙色
26	73	D－3	SB06	土師器	くの字甕	27.5		10.0		60%	明赤褐色
26	74	D－3	SB06	土師器	くの字甕		16.2			7×10	橙色
26	75	D－3	SB06	土師器	くの字甕		11.4			12×9	橙色
26	76	D－3	SB06	土師器	くの字甕		19.8			15%	橙色
27	77	D－3	SB06	土師器	壺	40.4				20%	明茶色
27	78	D－3	SB06	土師器	壺	15.8	12.2	5.0	16.1	45%	にぶい黄橙色
27	79	D－3	SB06	縄文土器	深鉢			11.6		2.5×4	にぶい赤褐色
27	80	D－3	SB06	土師器	小型鉢	7.0	6.5	2.6	3.4	95%	橙色
27	81	D－3	SB06	土師器	高坏		19.7			60%	橙色
27	82	D－3	SB06	土師器	高坏		18.4			80%	橙色
27	83	D－3	SB06	土師器	高坏		18.4	11.7	13.6	80%	明黄褐色
28	84	D－3	SB06	土師器	高坏		17.4	11.8	11.6	90%	にぶい橙色
28	85	D－3	SB06	土師器	高坏			13.0		70%	橙色
28	86	D－3	SB06	土師器	高坏			13.6		50%	橙色
28	87	D－3	SB06	土師器	高坏					15%	橙色
28	88	D－4	SB09	土師器	高坏					20%	橙色
28	89	D－3	SB06	土師器	高坏			6.8		5%	橙色
28	90	D－3	SB06	土師器	高坏			11.8		25%	にぶい黄橙色
28	91	D－3	SB06	土師器	高坏			(13.6)		45%	にぶい黄橙色
28	92	D－5	SB09	土師器	高坏			11.3		40%	橙色
28	93	A－4	SB15	土師器	くの字甕	21.1	18.6			20%	にぶい橙色
28	94	A－4	SB15	土師器	S字甕		11.2			10%	にぶい褐色
28	95	A－4	SB15	土師器	高坏		16.8			15%	にぶい橙色
28	96	B－6	SB17	土師器	くの字甕		17.1			13×7	にぶい黄橙色

（単位：cm）

図版番号	番号	調査区	遺構	種別	細別	器　径	口径	底径	器高	残存	色調
28	97	B－6	SB17	土師器	高坏					20%	橙色
28	98	B－6	SB17	土師器	小型鉢			4.7		45%	褐灰色
28	99	B－6	SB17	土師器	小型鉢		9.6	4.6	6.15	45%	橙色
28	100	B－6	SB17	土師器	小型鉢		6.6	3.45	4.90	98%	にぶい黄橙色
29	101	D－4	SD01	土師器	壺	17.5	11.0			40%	にぶい黄橙色
29	102	C－4	SD01	土師器	壺			5.6		7×5.5	にぶい橙色
29	103	C－4	SD01	土師器	壺			8.0		9×6	橙色
29	104	C－4	SD01	土師器	高坏			10.2		50%	橙色
29	105	A、B－2	SX07南	土師器	S字甕					5×2	にぶい橙色
29	106	A、B－2	SX07南	土師器	S字甕					3×2	浅黄橙色
29	107	A、B－2	SX07南	土師器	S字甕					7×2	橙色
29	108	A、B－1、2	SX07西	土師器	くの字甕			9.8		10%	にぶい黄橙色
29	109	A、B－2	SX07南	土師器	くの字甕		13.8			7×5	橙色
29	110	A、B－2	SX07ベルト内	土師器	複合口縁壺		15.2			5×5	にぶい黄橙色
29	111	B－2	SX07	弥生土器	壺		11.6			口縁部のみ80%	灰白色
29	112	B－2	SX07南	土師器	壺		21.0			9×4	にぶい赤褐色
29	113	B－2	SX07	土師器	壺			6.8		5%	浅黄橙色
29	114	A、B－1、2	SX07西	土師器	壺			7.6		5%	浅黄橙色
29	115	B－2	SX07	土師器	小型壺	7.8		2.8		80%	灰黄褐色
29	116	A－2	SX07	土師器	小型壺		9.8	4.2	8.5	50%	にぶい橙色
29	117	A、B－2	SX07南	弥生土器	壺					4×3	にぶい橙色
29	118	B－2	SX07	土師器	小型壺	8.1		3.0		70%	橙色
29	119	A、B－1、2	SX07西	土師器	小型壺			3.0		20%	浅黄橙色
29	120	A、B－2	SX07	土師器				4.8		5×3	にぶい黄橙色
29	121	B－2	SX07	土師器	小型鉢			4.4		70%	浅黄橙色

（単位：cm）

図版番号	番号	調査区	遺構	種別	細別	器　径	口径	底径	器高	残存	色調
29	122	A－1、2	SX07南	土師器	高坏		18.8			60%	橙色
29	123	A－2	SX07	土師器	高坏		15.0	11.4	9.7	70%	にぶい橙色
29	124	A、B－2	SX07南	土師器	甕					5×4	にぶい橙色
29	125	B－1、2	SX07北	土師器	高坏					10%	にぶい橙色
29	126	B－1、2	SX07北	土師器	高坏					10%	橙色
29	127	B－2	SX07	土師器	高坏					40%	橙色
30	128	B－2	SX07	土師器	高坏					40%	橙色
30	129	B－1、2	SX07北	土師器	高坏					40%	橙色
30	130	A、B－2	SX07南	土師器	器台					3×3	橙色
30	131	A、B－2	SX07西	土師器	小型器台		8.4			4×2	にぶい橙色
30	132	A、B－1、2	SX07	土師器	器台					5×5	にぶい橙色
30	133	B－2	ＳＸ08	土師器	小型壺	7.8		4.8		35%	にぶい黄褐色
30	134	B－2	ＳＸ08	土師器	小型壺			3.4		5×4	にぶい黄褐色
30	135	A－4	SX09	土師器	くの字甕		14.4			7×4	橙色
30	136	A－4	SX09	土師器	Ｓ字甕		15.8			13×7	灰褐色
30	137	A－4	SX09	土師器	Ｓ字甕		15.8			12×6	橙色
30	138	A－4	SX09	土師器	Ｓ字甕		14.6			10%	橙色
30	139	D－2		弥生土器	高坏					5×3	浅黄橙色
30	140	A－4	SX09	土師器	Ｓ字甕			8.0		台部は100%	橙色
30	141	A－4	SX09	土師器	高坏		17.6			30%	橙色
30	142	A－4	SX09	土師器	小型壺	10.1	9.3	4.2	11.3	95%	明黄褐色
30	143	B－9	SX11	土師器	壺					5×3	浅黄橙色
30	144	B－9	SX11北	土師器	碗			6.3		3×3	浅黄橙色
30	145	C－2	SP82	弥生土器	高坏					10%	褐灰色
30	146	B－2	SP316	土師器	くの字甕					5%	にぶい黄橙色

（単位：cm）

図版番号	番号	調査区	遺構	種別	細別	器　径	口径	底径	器高	残存	色調
30	147	C－2	SP82	弥生土器	壺					5×4	にぶい黄橙色
30	148	D－3	SP88	土師器	鉢	14.0	12.6	5.6	12.7	50%	橙色
30	149	C－8	SP290	土師器	小型鉢		9.0	4.2	6.9	100%	にぶい黄橙色
30	150	C－7	SP146	土師器	小型壺			4.2		2.5×3	にぶい橙色
30	151	B－4	SP175	弥生土器	折返口縁壺		17.2			6×3.5	にぶい褐色
30	152	A－5	SP22	弥生土器	折返口縁壺		20.6			20%	にぶい黄橙色
31	153	B－7	SP272	土師器	壺	15.2	11.6	4.0	17.4	90%	橙色
31	154	C－6	SP273	土師器	高坏		13.6			40%	にぶい黄橙色
31	155	B－9	SP313	土師器	小型高坏		9.0			25%	橙色
31	156	B－9	SP313	土師器	小型高坏					20%	明黄褐色
31	157	A－4、5	SP181	土師器	高坏					30%	橙色
31	158	A－9	SP328	土師器	高坏			8.8		40%	橙色
31	159	C－4	SP88		刀子	全長12.5	刃部長8.5	茎部長4.0	刃部幅1.8	茎部幅1.0	
31	160	D－6		土師器	くの字甕	20.8	13.4	10.8	(26.2)	40%	にぶい褐色
31	161	A－2		土師器	くの字甕	18.4	15.0			40%	橙色
31	162	D－1		土師器	くの字甕		12.4			5×4	にぶい橙色
31	163	B-10		弥生土器	甕					6×2.5	にぶい黄橙色
31	164	表採		土師器	くの字甕			7.0		台部90%	橙色
31	165	A－6、7		土師器	くの字甕	24.0	19.6			40%	浅黄橙色
31	166	A－2		土師器	甕					10%	灰褐色
32	167	A－2		土師器	壺	25.3	18.8	7.2	25.25	80%	にぶい赤褐色
32	168	C－4		弥生土器	壺					3.5×3.5	にぶい黄橙色
32	169	C－2								3×3	赤褐色
32	170	A－2		弥生土器	壺					6×2	浅黄橙色
32	171	C－4		弥生土器	壺					2.5×2	にぶい橙色

（単位：cm）

図版番号	番号	調査区	遺構	種別	細別	器　径	口径	底径	器高	残存	色調
32	172	D－3		土師器	二重口縁壺		17.4			14×5	橙色
32	173	D－2		土師器	二重口縁壺		18.8			12×8	橙色
32	174	A－3		土師器	壺		12.6			20%	にぶい橙色
32	175	D－1		弥生土器	壺					30%	にぶい橙色
32	176	D－7		弥生土器	折返口縁壺	13.8	10.2	5.4	19.8	40%	にぶい橙色
32	177	C、D－1	撹乱	弥生土器	壺			9.8		9×4	明赤褐色
32	178	D－2		弥生土器	壺			9.6		10×5	にぶい褐色
33	179	D－7		弥生土器	高坏		25.7			15%	橙色
33	180	A－2	北西隅一群	土師器	高坏		17.8			30%	橙色
33	181	D－4		土師器	高坏		13.6			40%	明赤褐色
33	182	A－2		土師器	高坏					40%	橙色
33	183	A－2	北西隅一群	土師器	高坏		16.4			30%	橙色
33	184	A－2	北西隅一群	土師器	高坏		20.1			50%	橙色
33	185	D－3		土師器	高坏		16.2			30%	橙色
33	186	表採		土師器	高坏		19.8			20%	明赤褐色
33	187	A－2	北西隅一群	土師器	高坏		17.3			50%	橙色
33	188	D－3		土師器	高坏		19.0			30%	にぶい黄橙色
33	189	A－2	北西隅一群	土師器	高坏		18.2			40%	橙色
33	190	D－5		土師器	高坏					30%	橙色
33	191	A－2	北西隅一群	土師器	高坏					15%	橙色
33	192	D－4	トレンチ3	土師器	高坏					4×3	橙色
33	193	C－2		弥生土器	高坏					6×5	にぶい橙色
34	194	C－4		土師器	高坏		16.0	11.6	13.6	50%	浅黄橙色
34	195	A－2	北西隅一群	土師器	高坏		19.4	14.2	14.8	80%	橙色
34	196	A－2	北西隅一群	土師器	高坏			14.4		45%	橙色

（単位：cm）

図版番号	番号	調査区	遺構	種別	細別	器　径	口径	底径	器高	残存	色調
34	197		覆土	土師器	高坏			7.0		25%	にぶい黄橙色
34	198	C－2		土師器	小型鉢		9.9	5.2	3.95	45%	にぶい橙色
34	199	B－6		土師器	小型鉢		9.4	3.0	6.2	40%	黄橙色
34	200	A－2	北西隅一群	土師器	小型壺	7.2	5.5	3.6	7.9	98%	橙色
34	201	表採		土師器	壺			6.0		6×5	赤褐色
34	202	確認調査	トレンチ南	土師器	小型壺			4.2		40%	橙色
34	203	重機掘削		土師器	器台		7.4	10.4	6.7	80%	明赤褐色
34	204	D－6		土師器	器台		8.6	10.7	8.9	40%	橙色
35	205		覆土	縄文土器	深鉢					6.5×5.5	明黄褐色
35	206	C、D－3		縄文土器	深鉢					4.5×3	にぶい赤褐色
35	207	A－9		縄文土器	深鉢					4×3	橙色
35	208	C－4		縄文土器	深鉢把手					4×2.5×5.5	にぶい褐色
35	209	C－7		縄文土器	深鉢把手						橙色
35	210	D－2	SB02東西ベルト	縄文土器	深鉢					4×4	赤褐色
35	211	B-10		縄文土器	深鉢					3×3.5	にぶい赤褐色
35	212	A－8		縄文土器	深鉢					4×4	にぶい赤褐色
35	213	C－4		縄文土器	深鉢					9×3.5	褐色
35	214	B－3		縄文土器	深鉢					3.5×2.5	灰褐色
35	215	C－3		縄文土器	深鉢					4×5	にぶい褐色
35	216	A－4	SX09	縄文土器	深鉢					5×6	にぶい橙色
35	217	C－1	SB04北	縄文土器	深鉢					3×6	橙色
35	218	B-10		縄文土器	深鉢					4×6	にぶい黄橙
35	219	D－5	SB10	縄文土器	深鉢					5×6	灰褐色
35	220	C－1	SB04	縄文土器	深鉢					6×6	にぶい褐色
35	221	A－2	SX07南	縄文土器	深鉢					10×12	にぶい赤褐色

（単位：cm）

図版番号	番号	調査区	遺構	種別	細別	器　径	口径	底径	器高	残存	色調
35	222	B－2	SP128東	縄文土器	深鉢					6.5×8	明赤褐色
35	223	C－2	SB03	縄文土器	深鉢					10×6	灰黄褐色
35	224	B－2	SP128東	縄文土器	深鉢					6.5×6.5	明褐色
35	225	B－2		縄文土器	深鉢					4×3	にぶい赤褐色
36	226	B－2		縄文土器						3.5×4	にぶい赤褐色
36	227	A－3		縄文土器						4×3.5	にぶい黄褐色
36	228	A－6	SD02	縄文土器						4×5	にぶい赤褐色
36	229	D－3	SB06	縄文土器						3×2.5	にぶい黄橙色
36	230	A－6、7	SD02	縄文土器						4×2	にぶい赤褐色
36	231	A－6	SD02	縄文土器						2×4	にぶい赤褐色
36	232	A－6、7	SD02	縄文土器						2×3	にぶい赤褐色
36	233	A－6、7	SD02	縄文土器						3.5×2	にぶい橙色
36	234	B－6		縄文土器						2×2.5	にぶい橙色
36	235	A－6、7	SD02	縄文土器						2×3	灰褐色
36	236	B－2	SX07	縄文土器						4×4	にぶい褐色
36	237	A、B－2	SX07	縄文土器						4×3.5	灰褐色
36	238	B－3		縄文土器						3.5×2.5	灰褐色
36	239	D－1		縄文土器	深鉢			10.2		10%	にぶい赤褐色

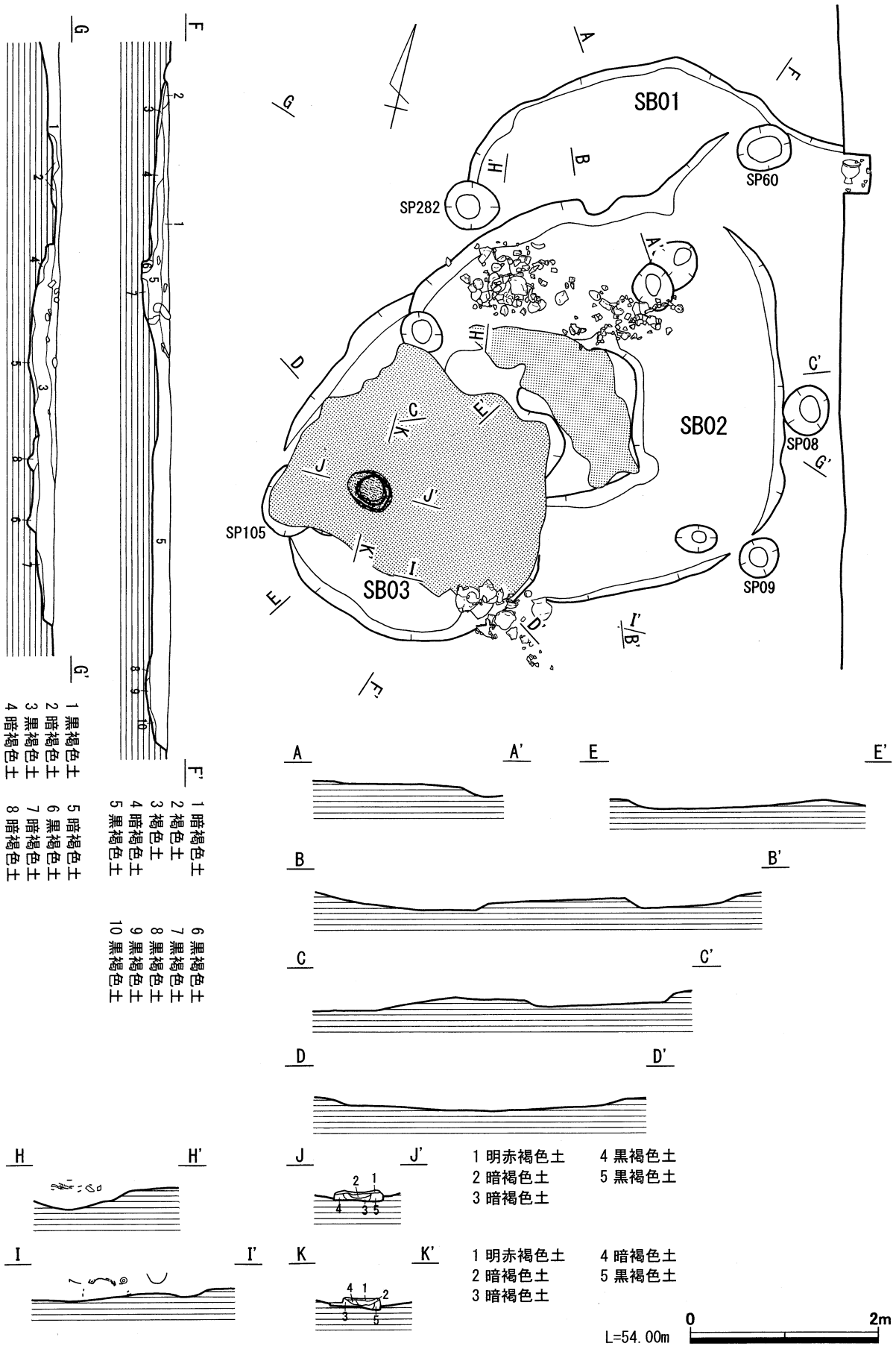
吉岡下ノ段遺跡第11次調査　出土石器観察表

（単位：cm）

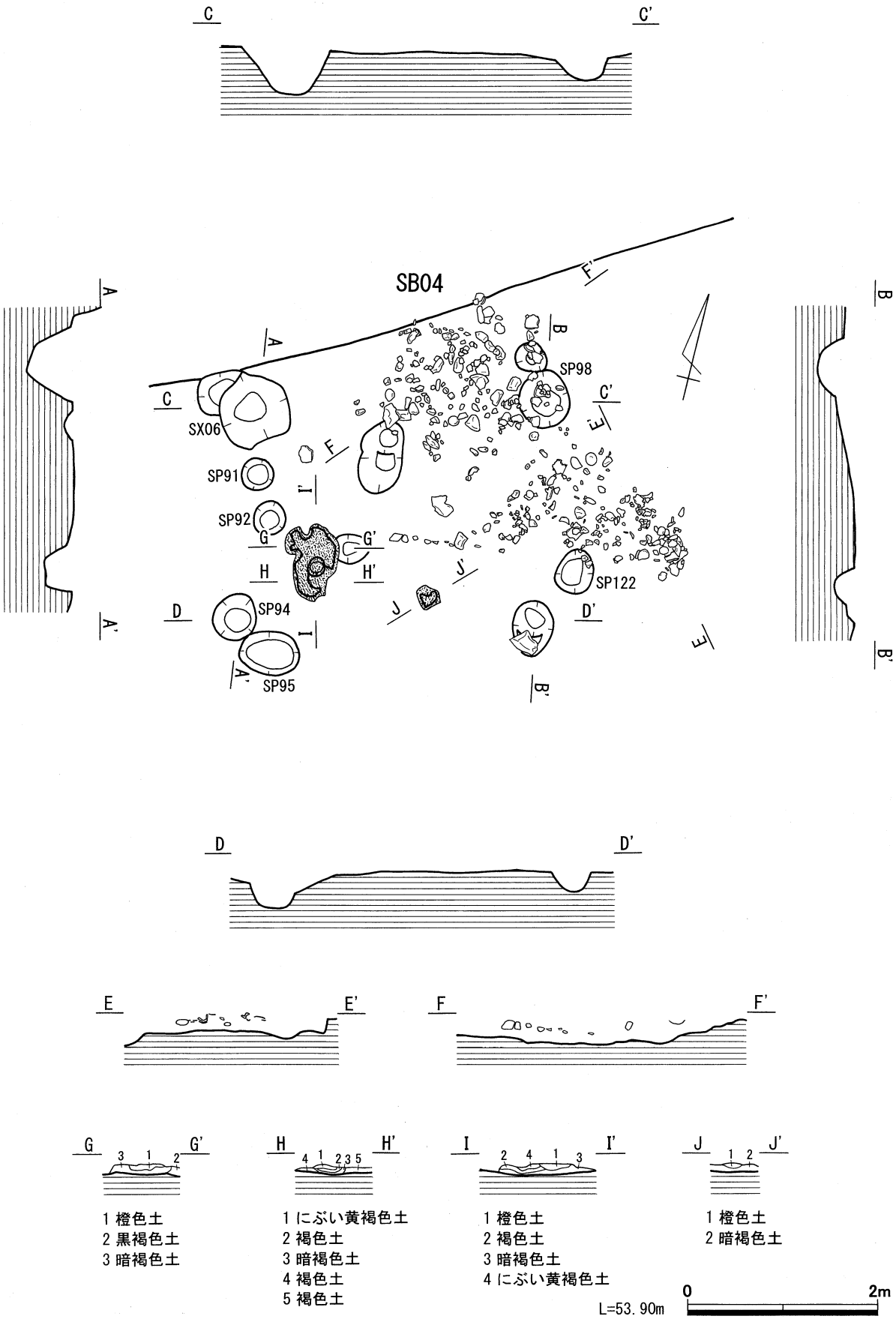
図版番号	番号	調査区	遺構（参考）	材質	細別	縦	横	厚さ			
36	240	C－1	SX06	珪質泥岩	剥片	4.3	6.3	1.0			
36	241	D－3	SB06	珪質泥岩	剥片	5.3	4.4	1.2			
36	242	表採		チャート	石鏃	1.6	1.4	0.2	重量400mg		
36	243	C－5		黒曜石	石鏃	1.1	1.1	0.2	重量250mg		
36	244	A－2	SP143	チャート	剥片	4.8	1.8	0.7			
36	245	A－5	SP22	ノジュール	石核	13.8	12.5	9.7			
37	246	B－1、2	SX07	砂岩	打製石斧	20.1	6.7	4.3			
37	247	A－2		泥岩（ストレート粘板岩）	打製石斧	8.1	4.4	2.1			
37	248	B－2	SX07	砂岩	叩き石	9.4	5.9	5.95			
37	249	A－2		砂岩	磨り石	8.5	6.6	6.6			
37	250	B－2		砂岩	磨り石	11.2	4.8	5.4			
37	251	B－2		砂岩	磨り石	6.2	5.7	4.9			
37	252	C－3	SB03	滑石	勾玉	1.5	0.6	0.3			
38	253	C－1		砂岩	石皿	24.7	16.6	16.3			

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
A
B
C
D
SB01
SB02
SB03
SB04
SB05
SB06
SB07
SB08
SB09
SB11
SB13
SB14
SB15
SB16
SB17
SB19
SB20
SX07
SX08
SX09
SX11
SP127
SP88
SP193
SP22
SP23
SP311
SP313
SP319
SD01
SD02
SD03
SH01
53.80m
53.70m
53.60m
53.50m
53.40m
53.30m
53.20m
0
10m

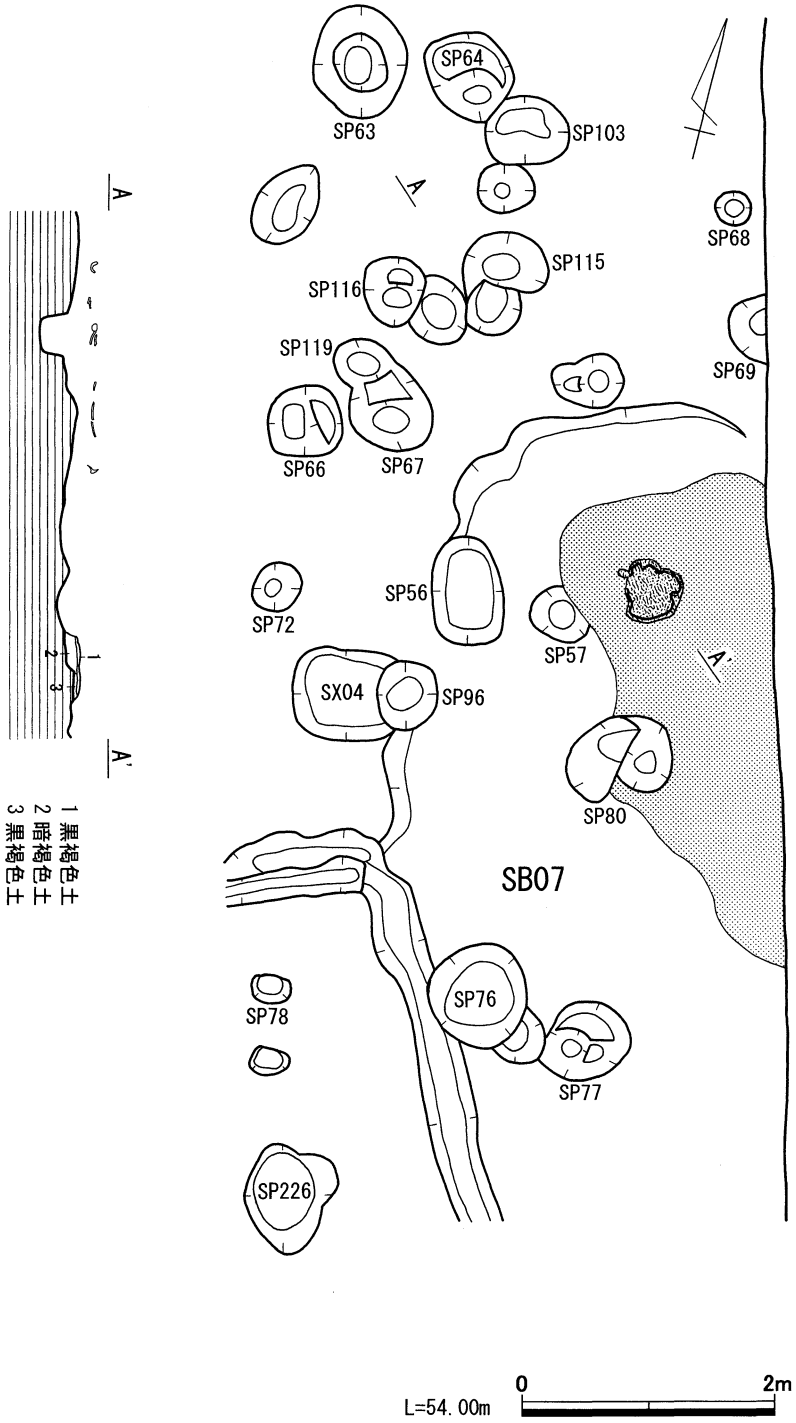
第３図　遺構全体図



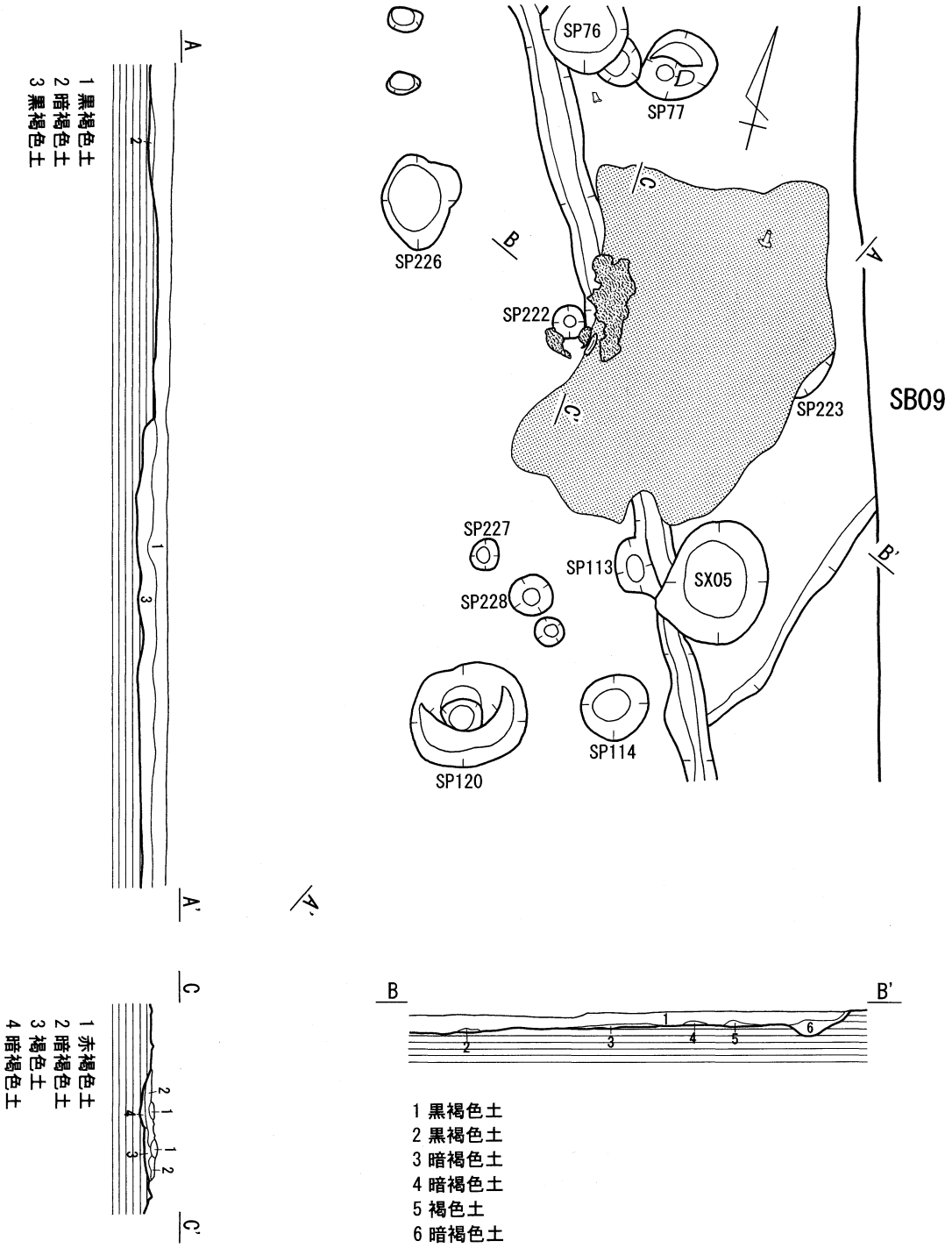
第４図　SB01、02、03実測図


SB04
SX06
SP91
SP92
SP94
SP95
SP98
SP122
1 橙色土
2 黒褐色土
3 暗褐色土
1 にぶい黄褐色土
2 褐色土
3 暗褐色土
4 褐色土
5 褐色土
1 橙色土
2 褐色土
3 暗褐色土
4 にぶい黄褐色土
1 橙色土
2 暗褐色土
L=53.90m
0
2m

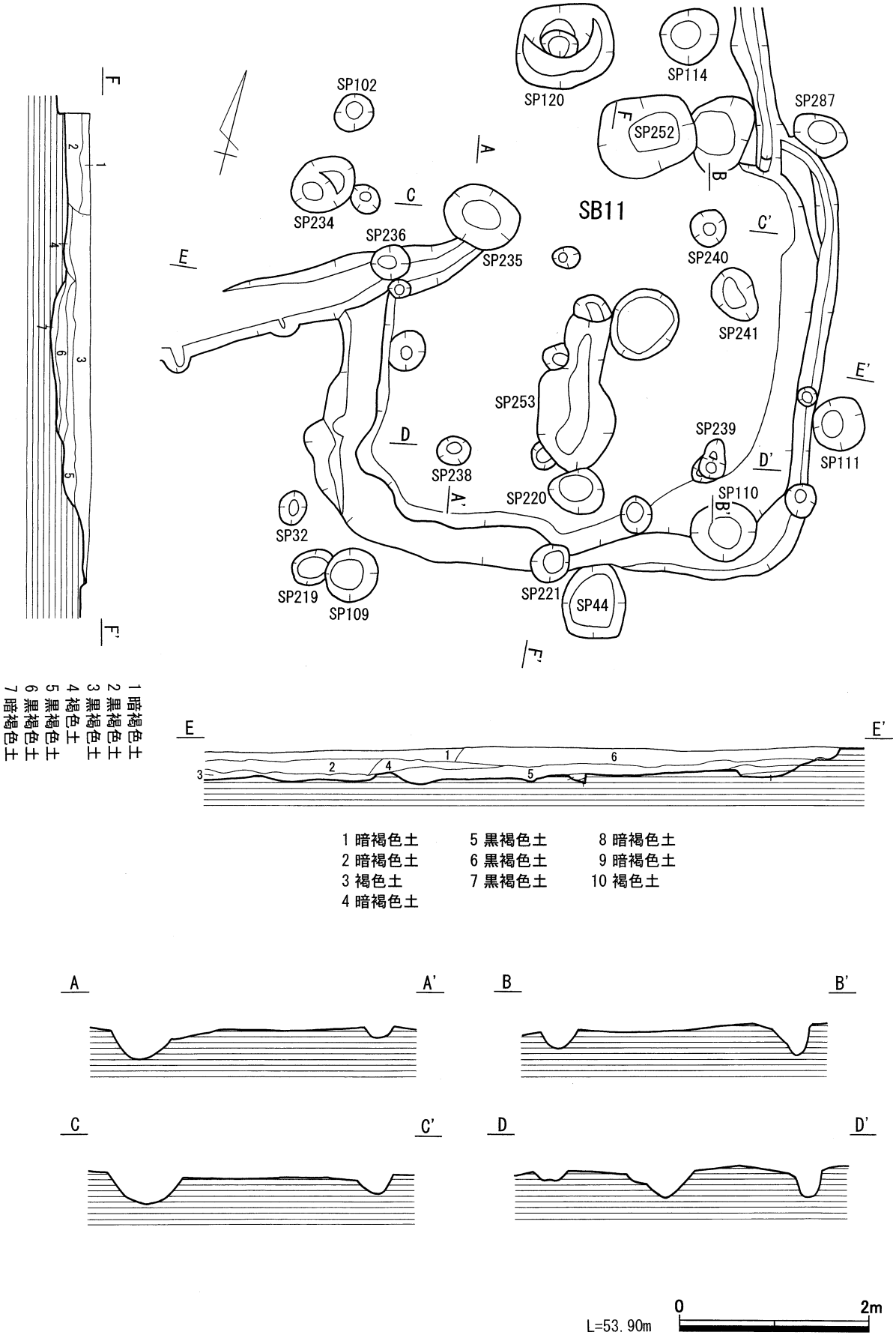
第５図　SB04実測図


SP63
SP64
SP103
SP68
SP115
SP116
SP119
SP69
SP66
SP67
SP56
SP72
SP57
SX04
SP96
SP80
SB07
SP76
SP78
SP77
SP226
A
A'
1 黒褐色土
2 暗褐色土
3 黒褐色土
L=54.00m
0
2m

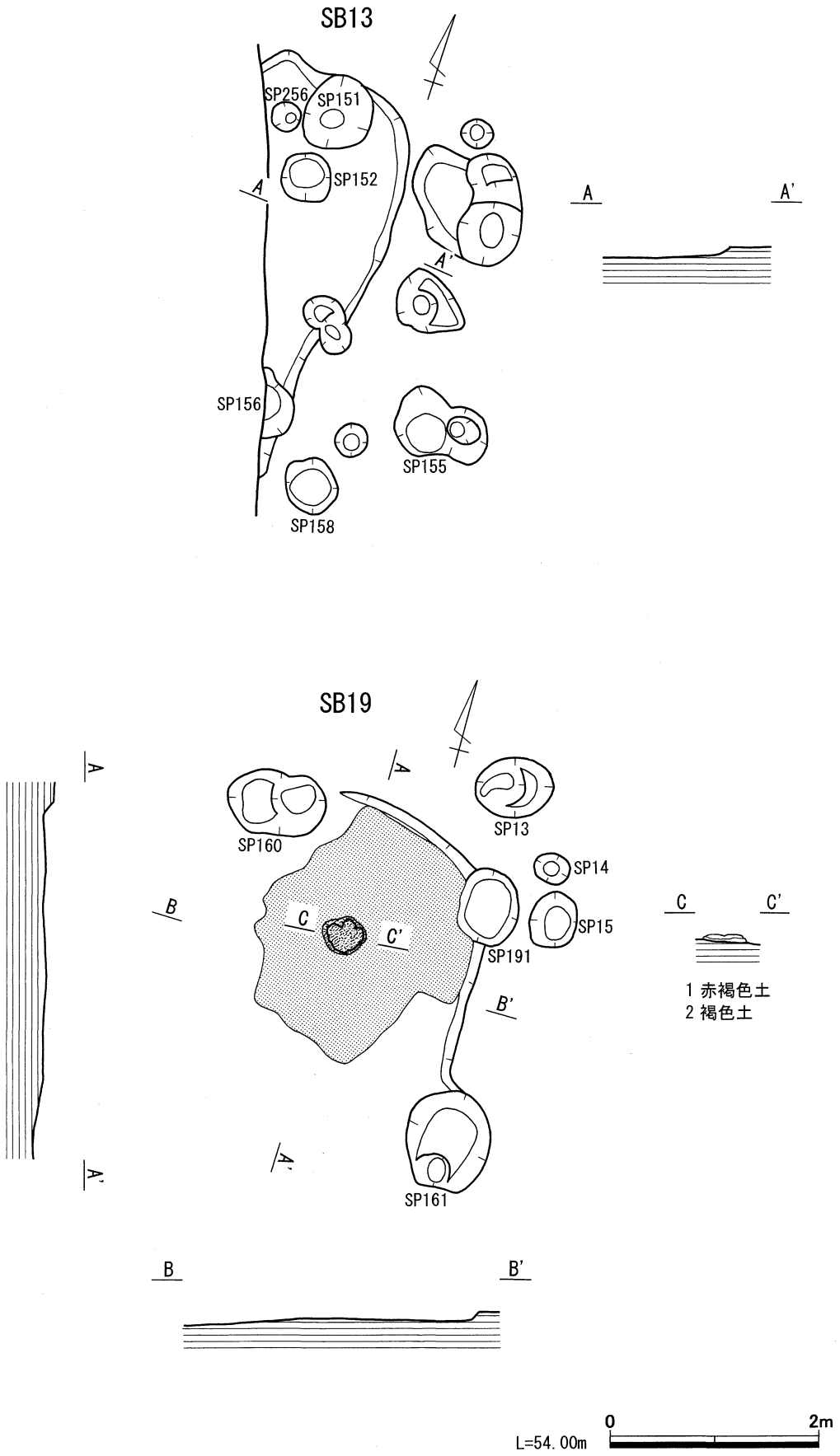
第６図　SB07実測図


SB09
SP76
SP77
SP226
SP222
SP223
SP227
SP228
SP113
SX05
SP114
SP120
A
A'
B
B'
C
C'
1 黒褐色土
2 暗褐色土
3 黒褐色土
1 赤褐色土
2 暗褐色土
3 褐色土
4 暗褐色土
1 黒褐色土
2 黒褐色土
3 暗褐色土
4 暗褐色土
5 褐色土
6 暗褐色土
L=53.90m
0
2m

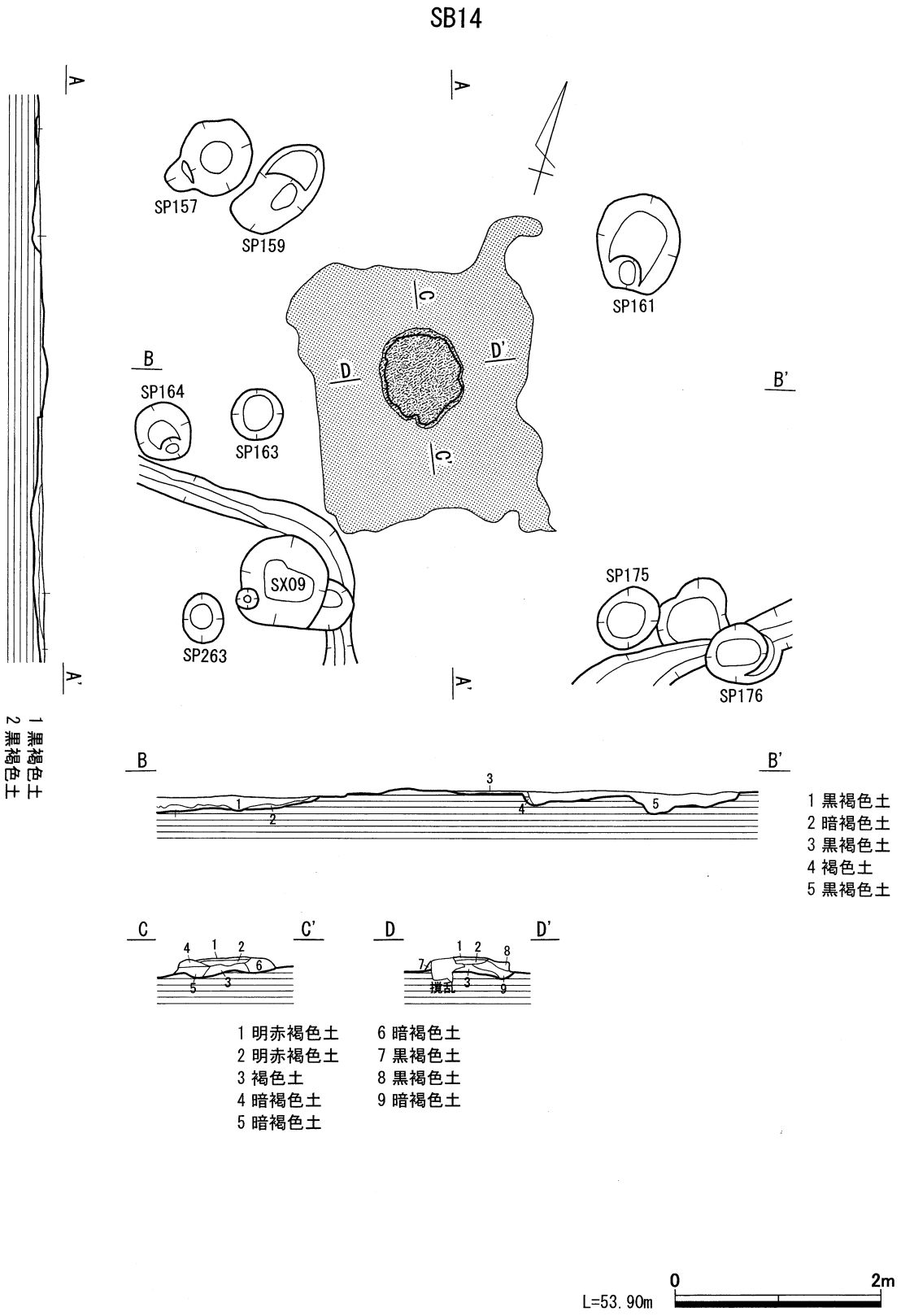
第７図　SB09実測図


SP102
SP120
SP114
SP287
SP252
SP234
SP236
SP235
SB11
SP240
SP241
SP253
SP239
SP238
SP220
SP110
SP111
SP32
SP219
SP109
SP221
SP44
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
1 暗褐色土
2 黒褐色土
3 黒褐色土
4 褐色土
5 黒褐色土
6 黒褐色土
7 暗褐色土
1 暗褐色土
2 暗褐色土
3 褐色土
4 暗褐色土
5 黒褐色土
6 黒褐色土
7 黒褐色土
8 暗褐色土
9 暗褐色土
10 褐色土
L=53.90m
0
2m

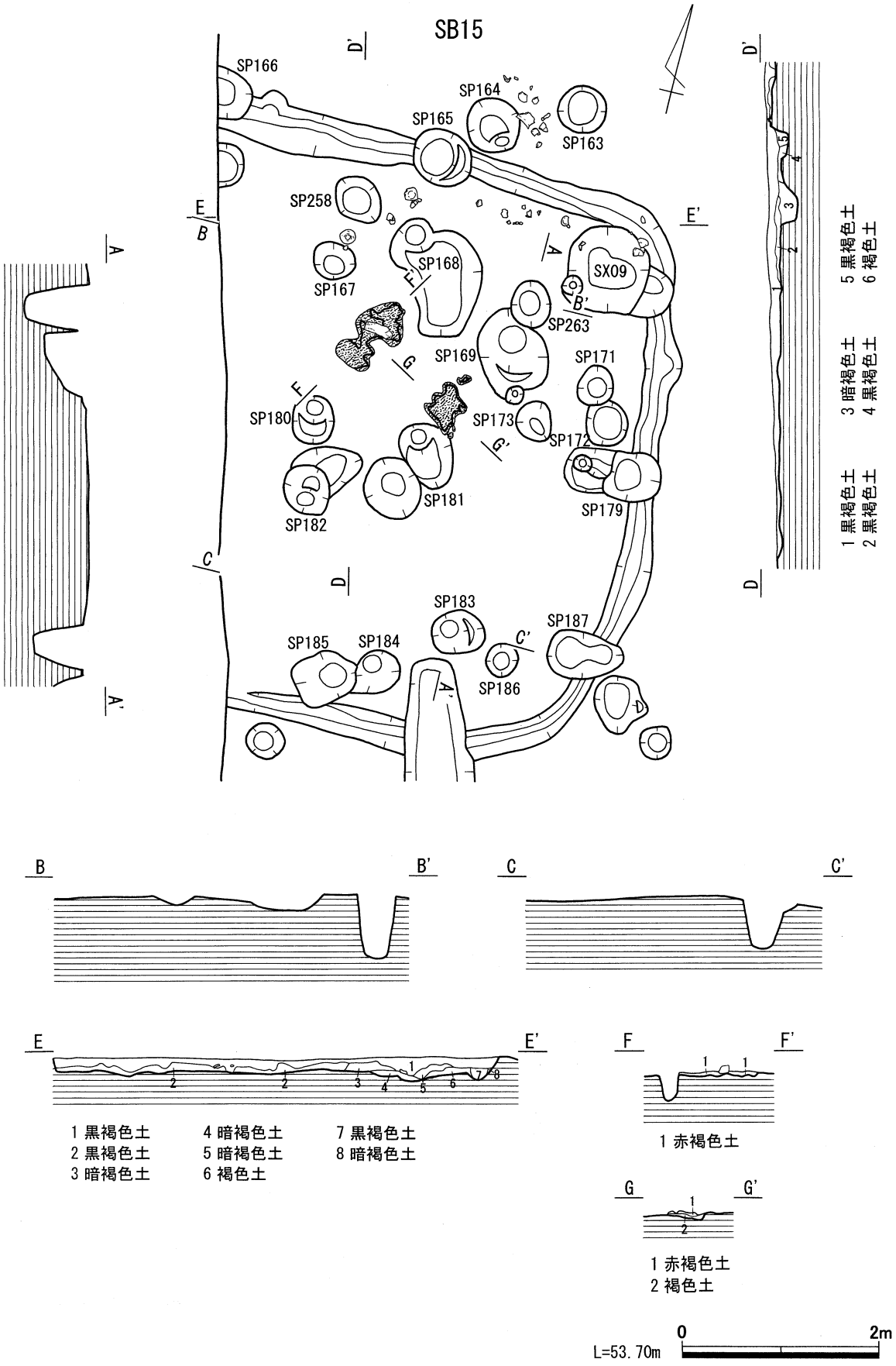
第８図　SB11実測図



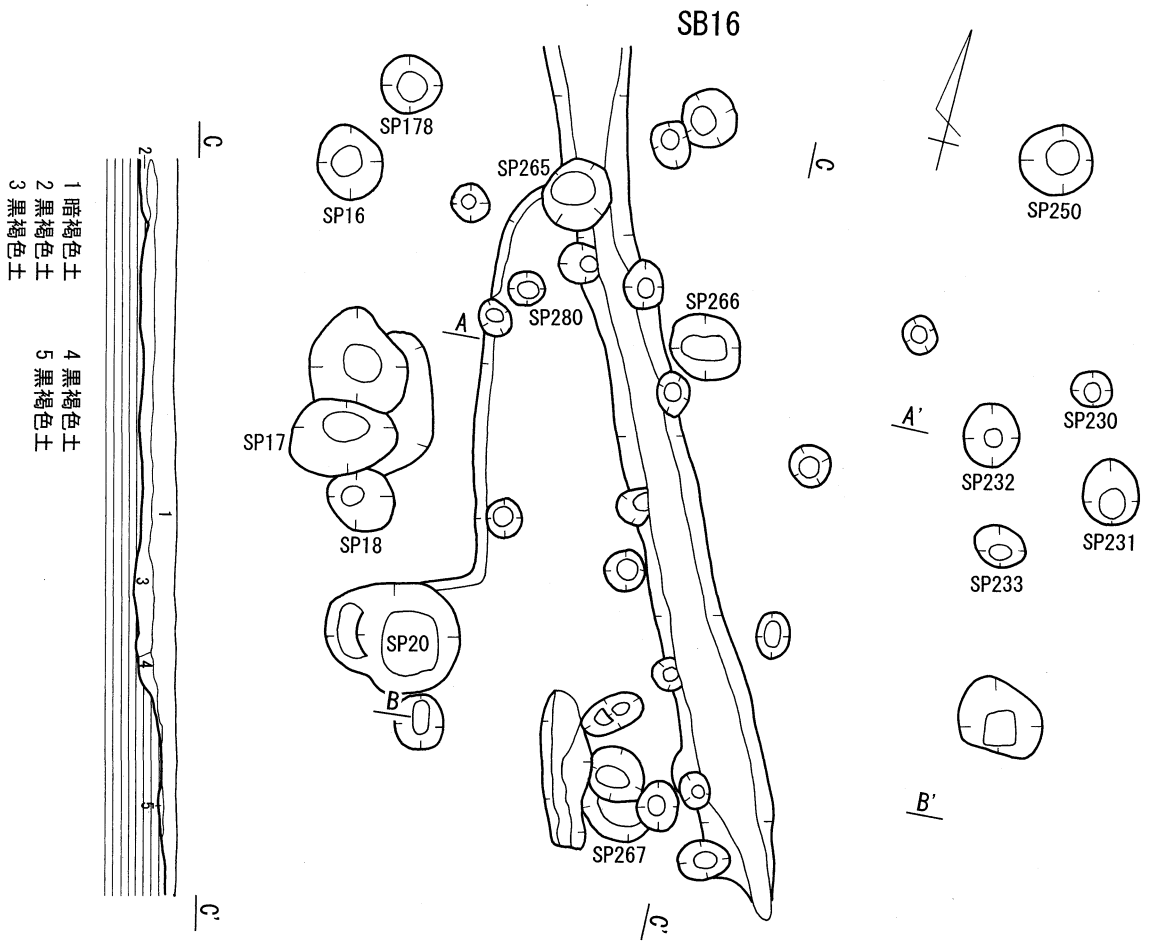
第９図　SB13、19実測図

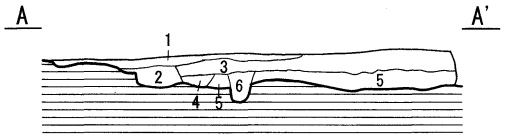


第10図　SB14実測図

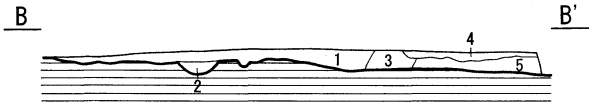


第11図　SB15実測図





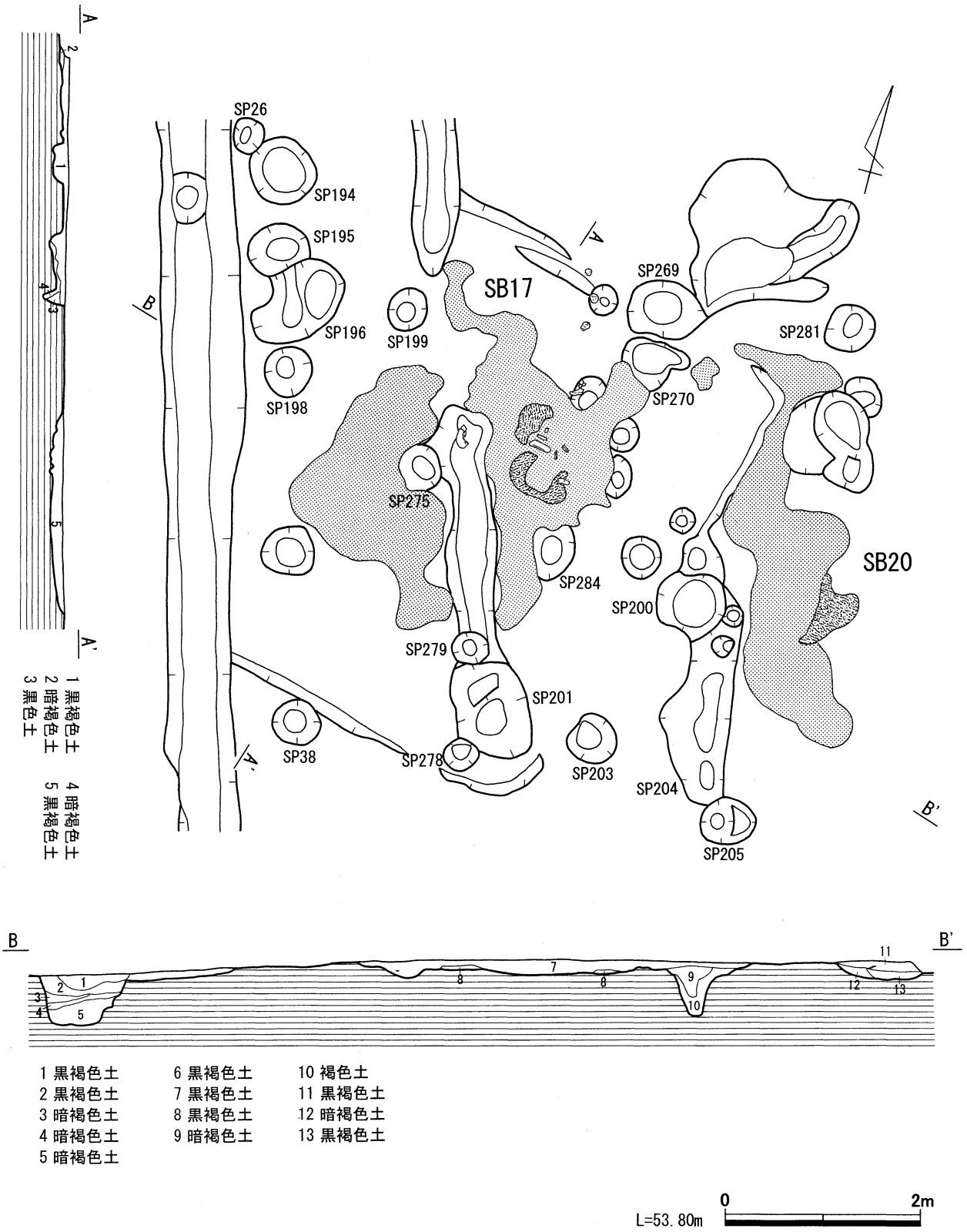
1 黒褐色土　4 黒褐色土
2 黒褐色土　5 黒褐色土
3 黒褐色土　6 黒褐色土



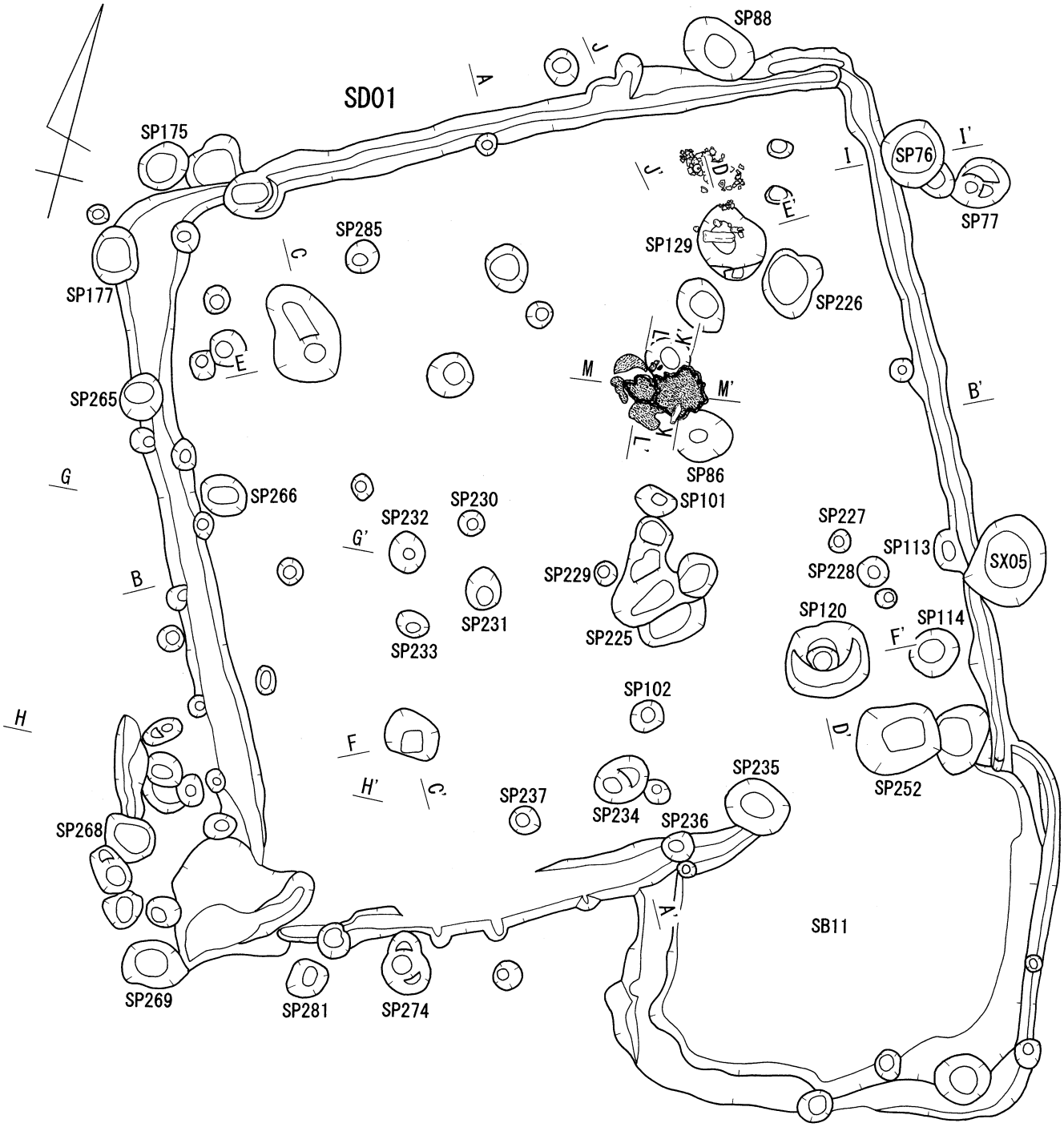
1 黒褐色土　4 黒褐色土
2 黒褐色土　5 黒褐色土
3 黒褐色土

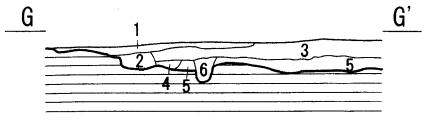
L=53.90m　0　2m

第12図　SB16実測図

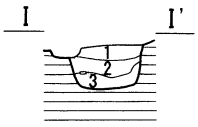


第13図　SB17、20実測図

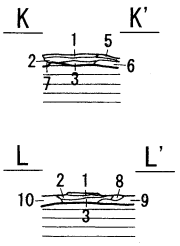




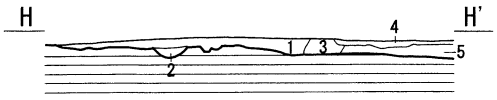
1 黒褐色土　4 黒褐色土
2 黒褐色土　5 黒褐色土
3 黒褐色土　6 黒褐色土



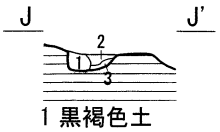
1 黒褐色土
2 暗褐色土
3 黒褐色土



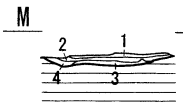
1 明赤褐色土
2 赤褐色土
3 赤褐色土
4 褐色土
5 暗褐色土
6 褐色土
7 褐色土
8 暗褐色土
9 褐色土
10 黒褐色土



1 黒褐色土　4 黒褐色土
2 黒褐色土　5 黒褐色土
3 黒褐色土

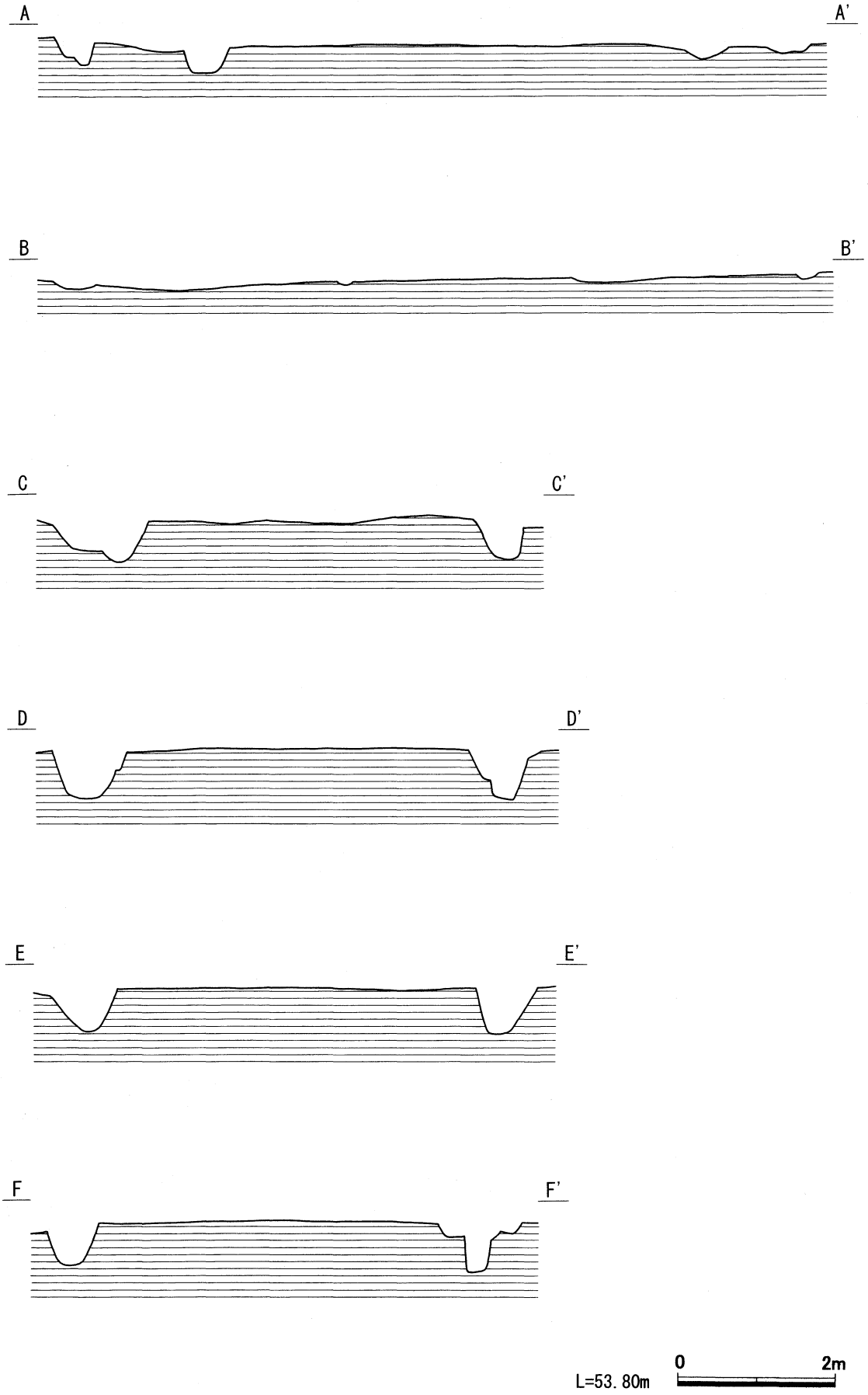


1 黒褐色土
2 黒褐色土
3 にぶい黄褐色土

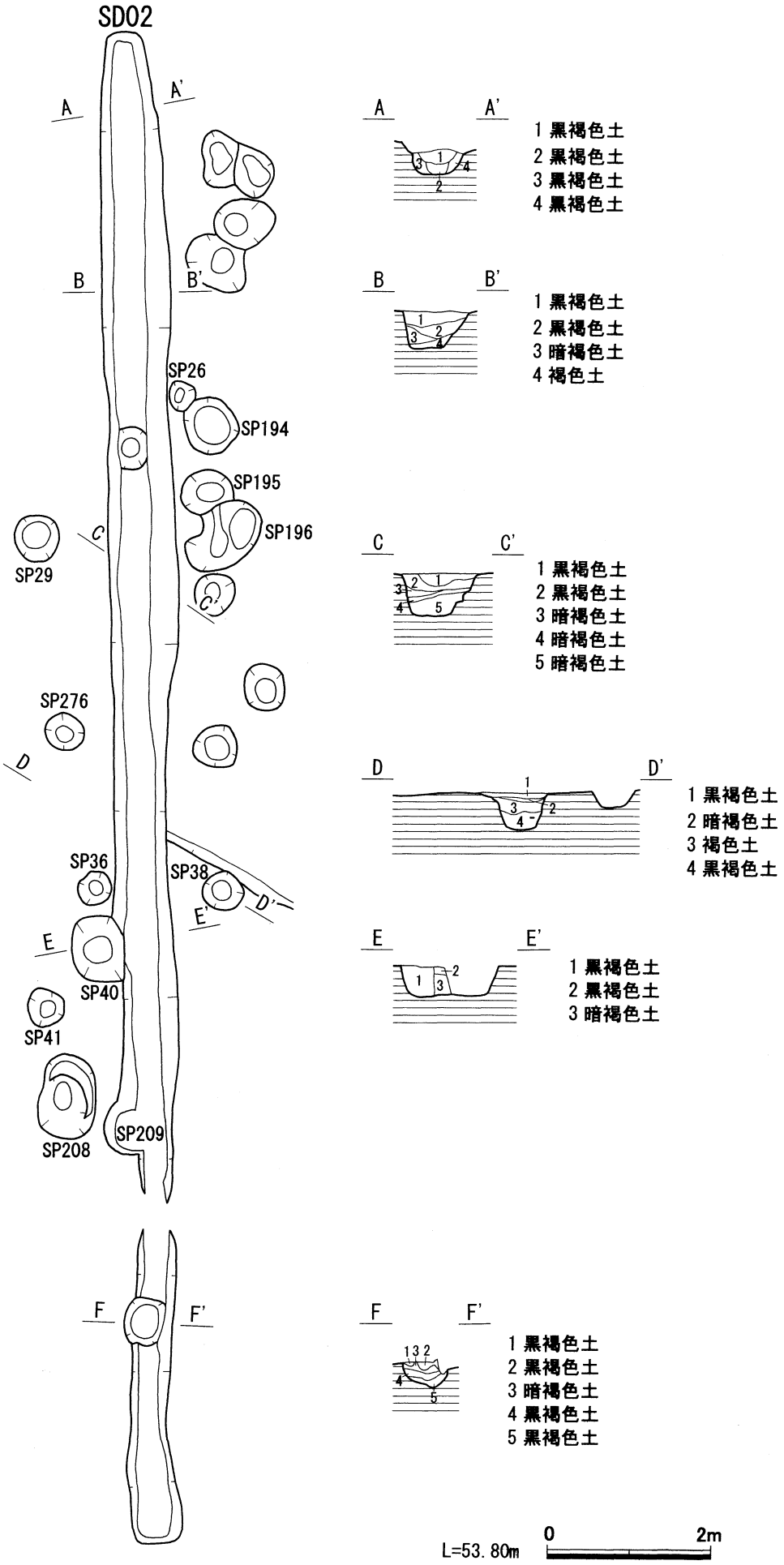


L=53.80m　0　2m

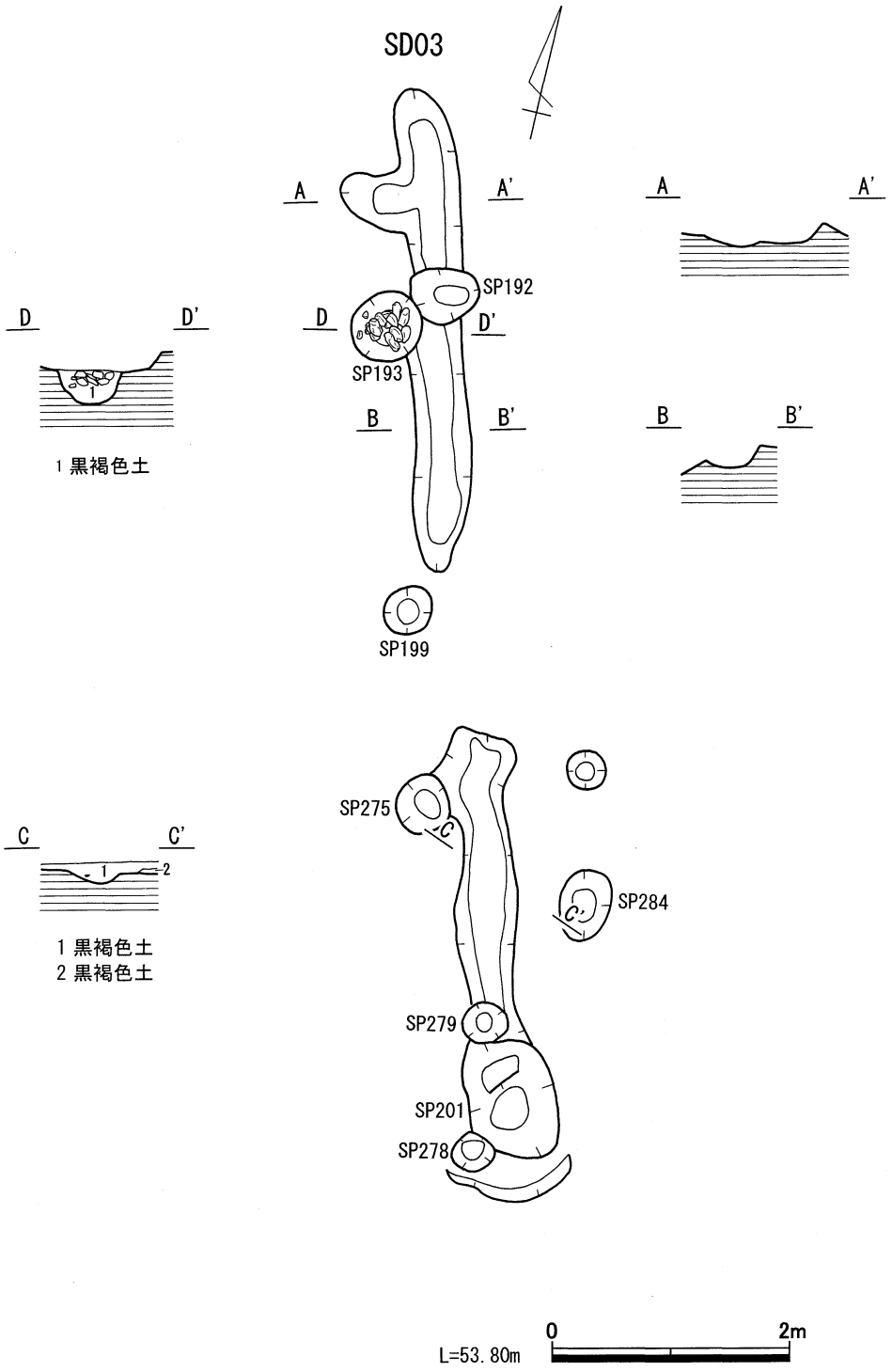
第14図　SD01実測図



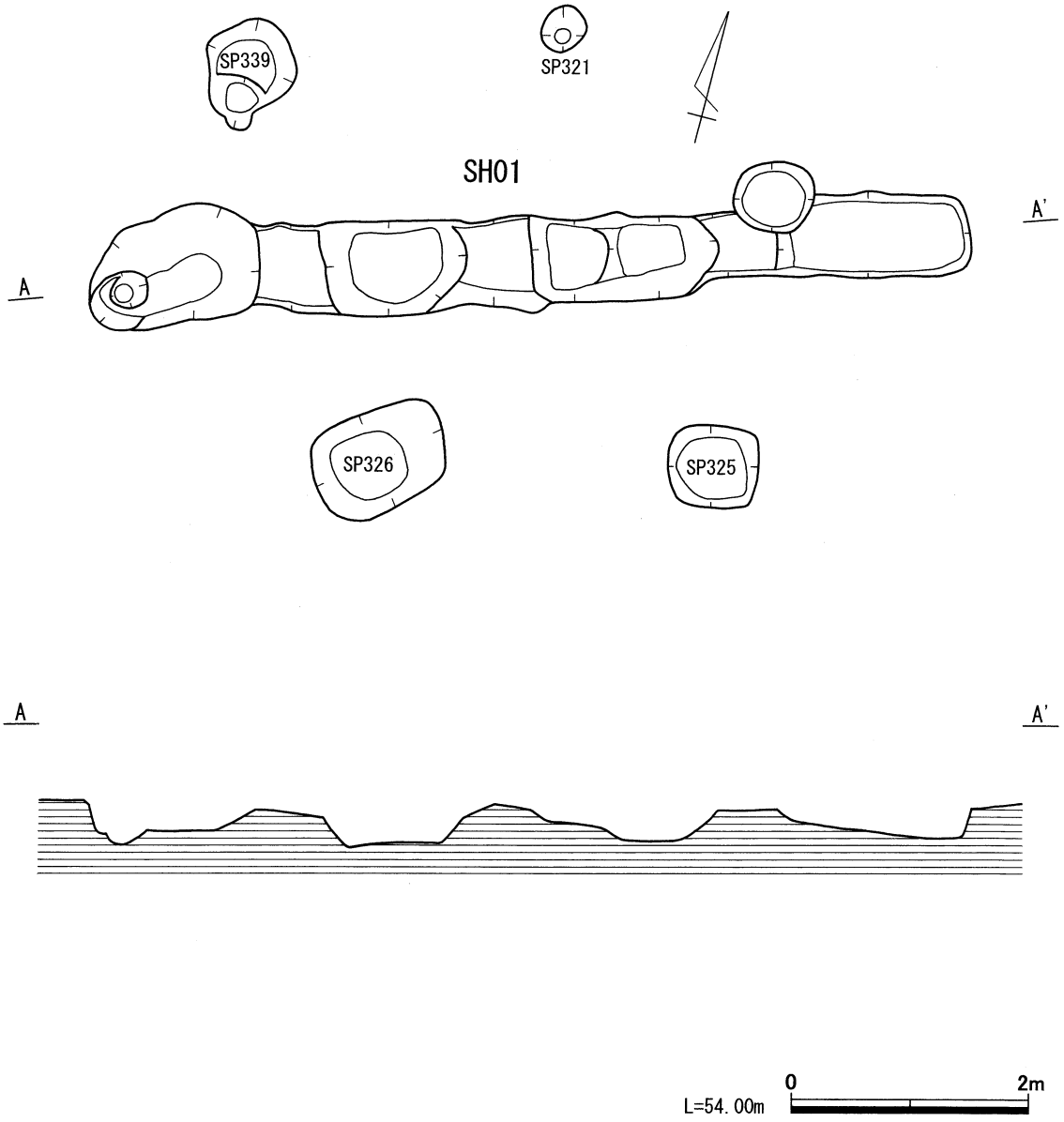
第15図　SD01エレベーション図



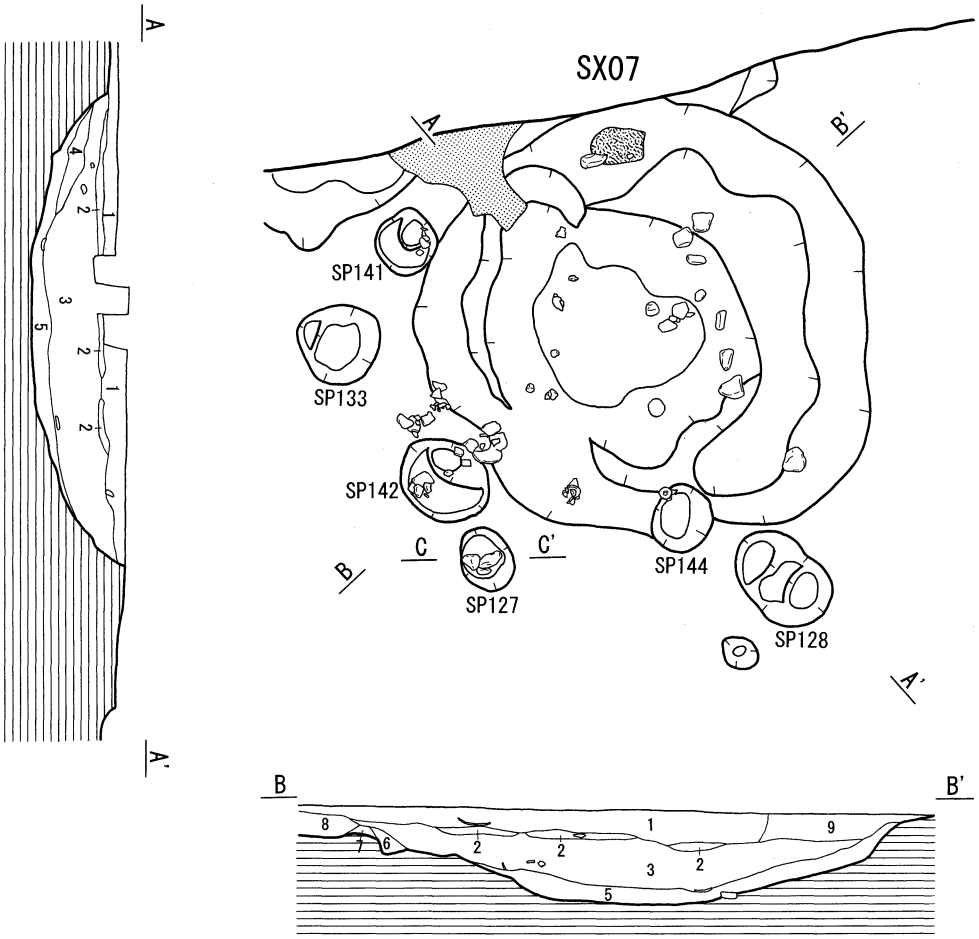
第16図　SD02実測図



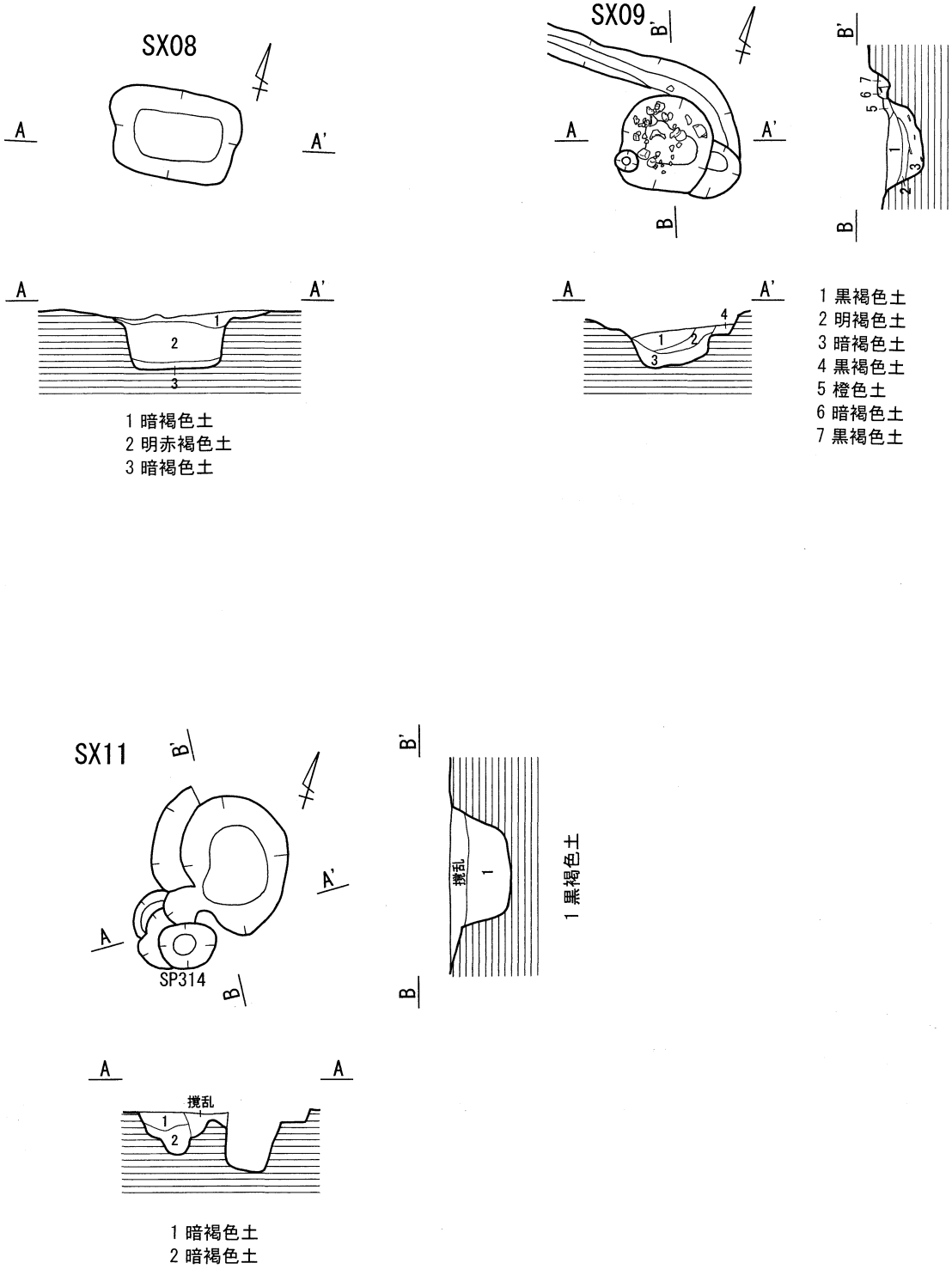
第17図　SD03実測図



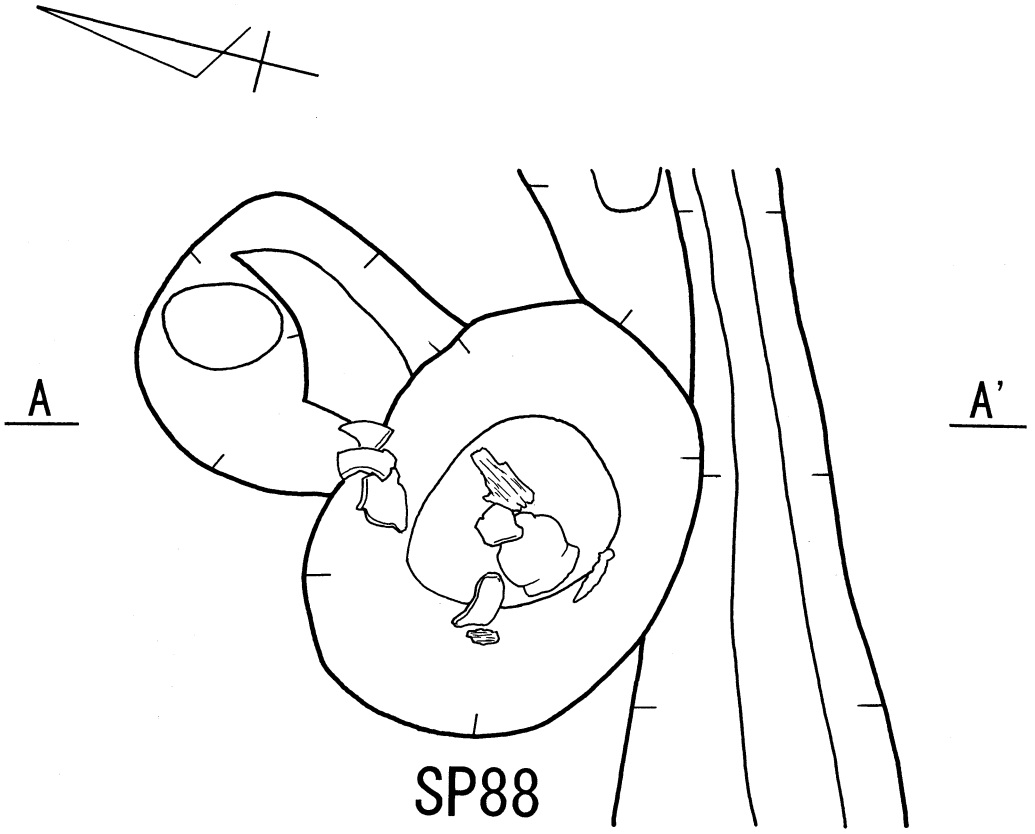
第18図　SH01実測図

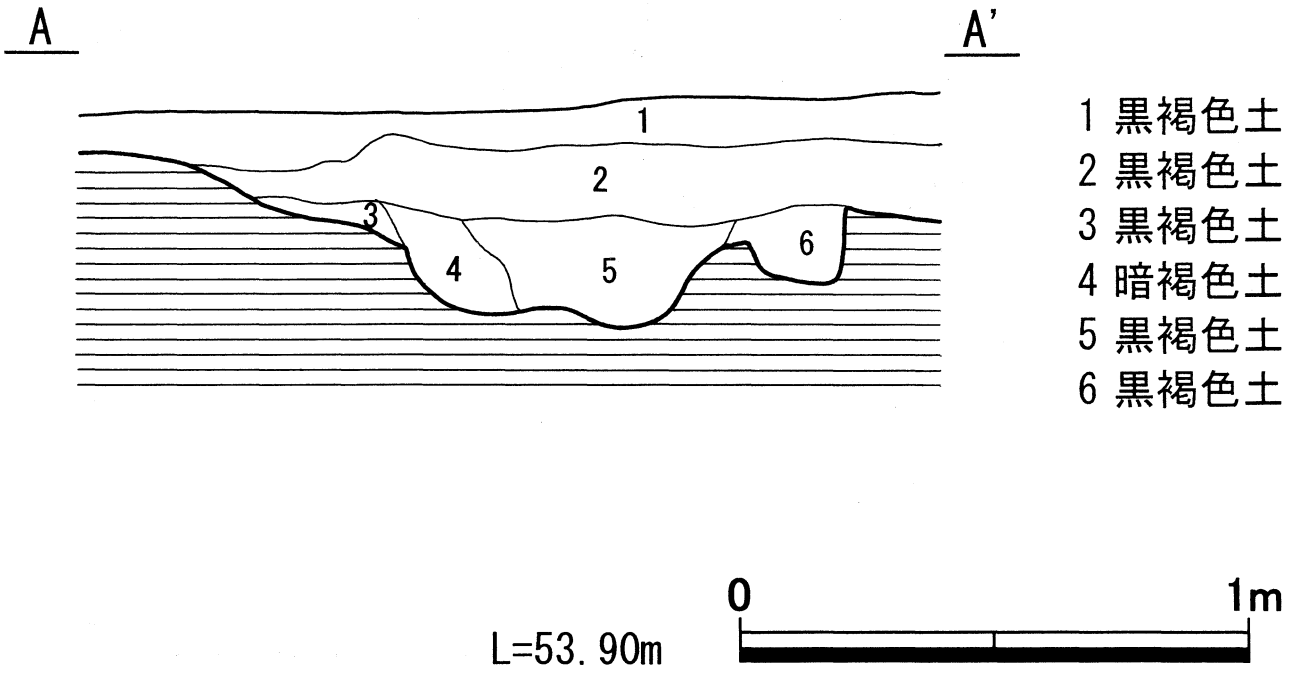


第19図　SX07実測図

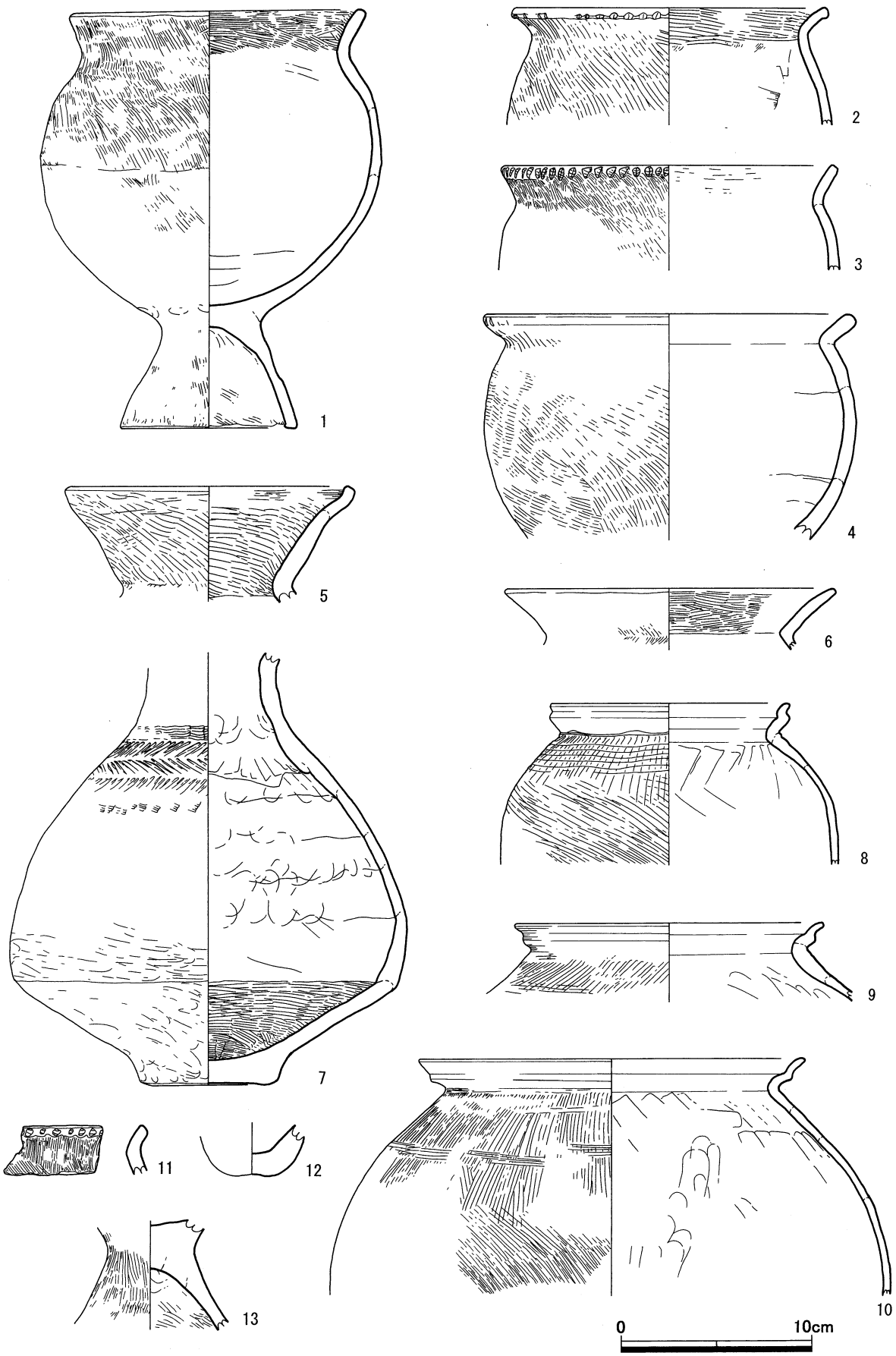


第20図　SX08、09、11実測図

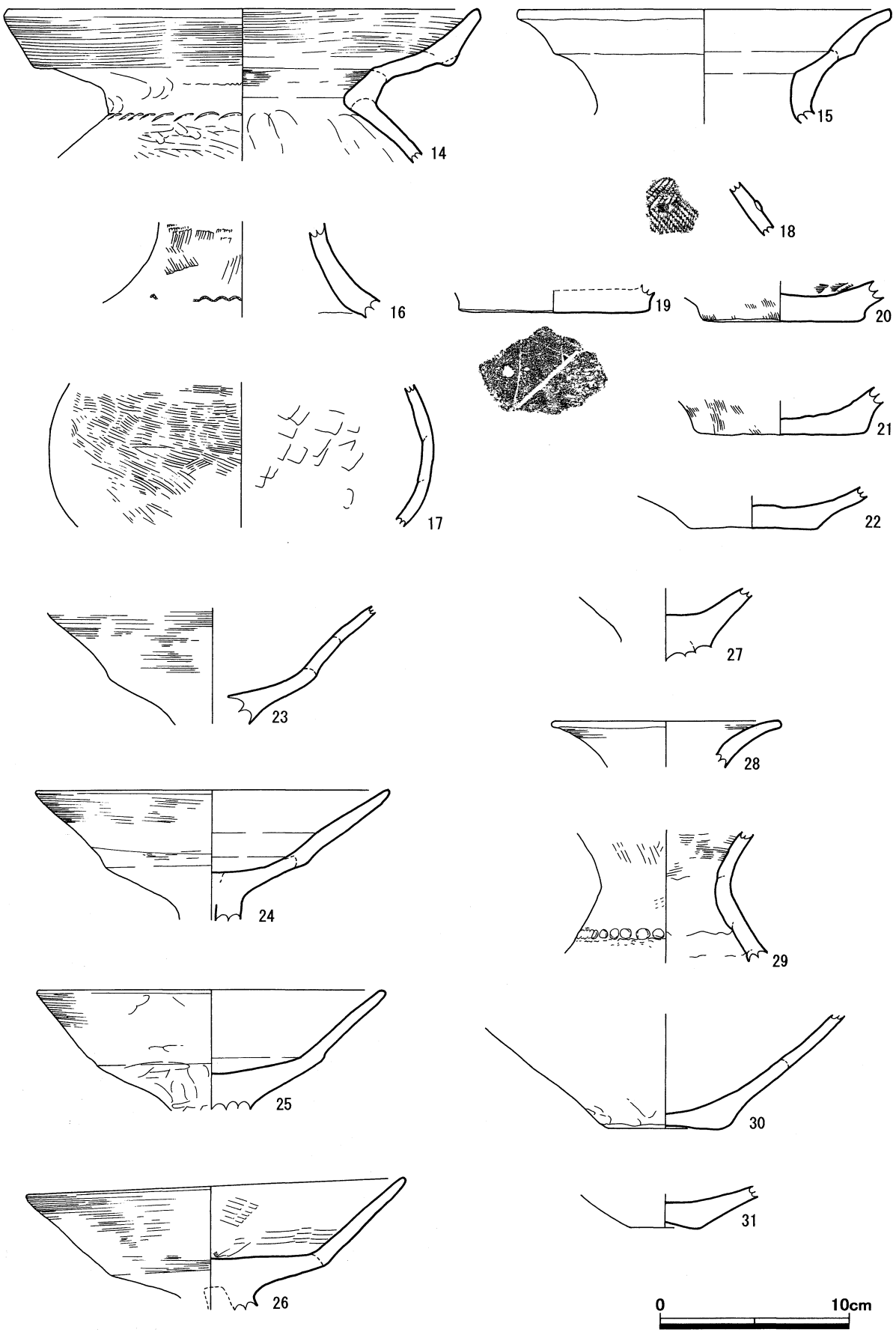




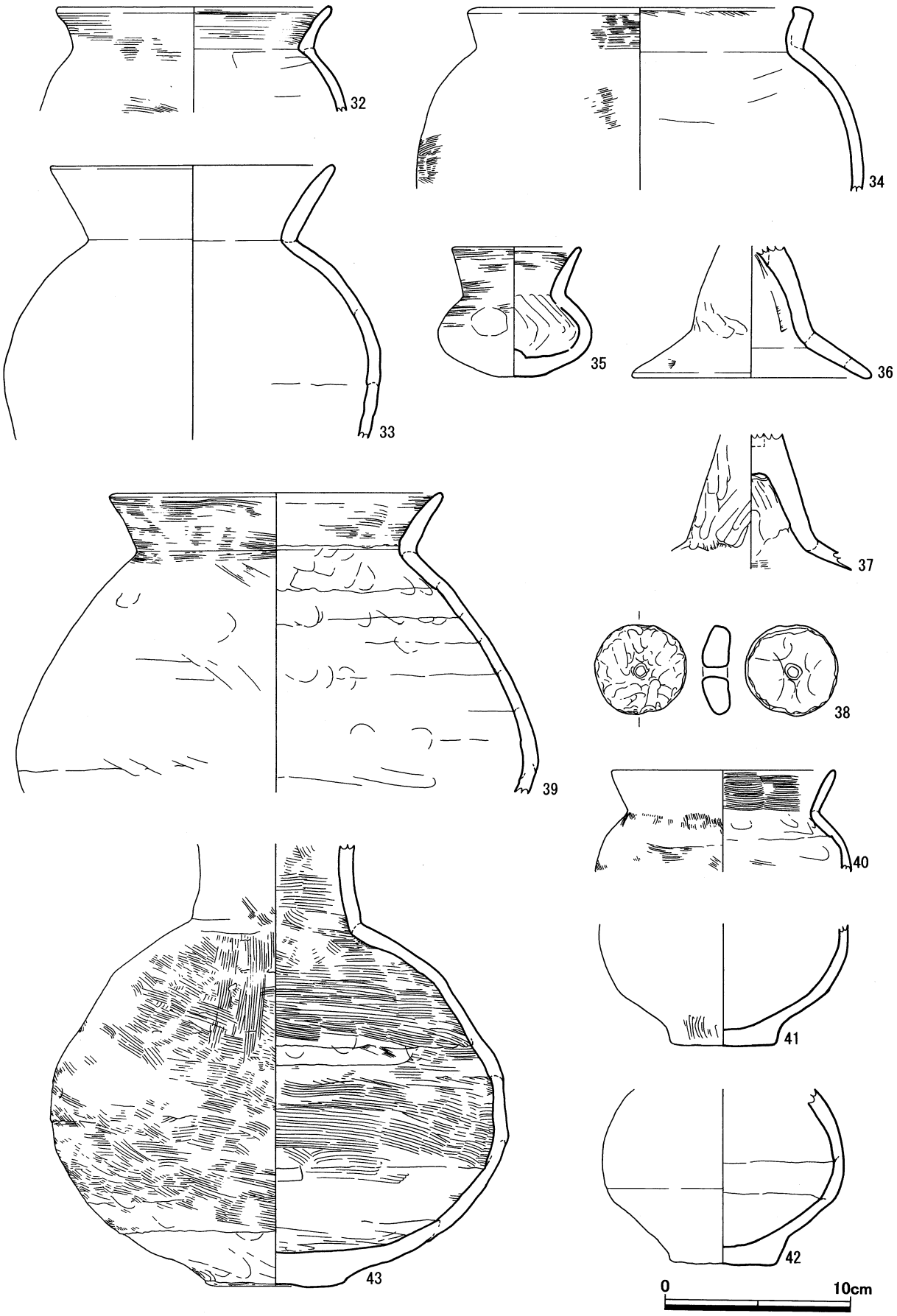
第21図　SP88実測図



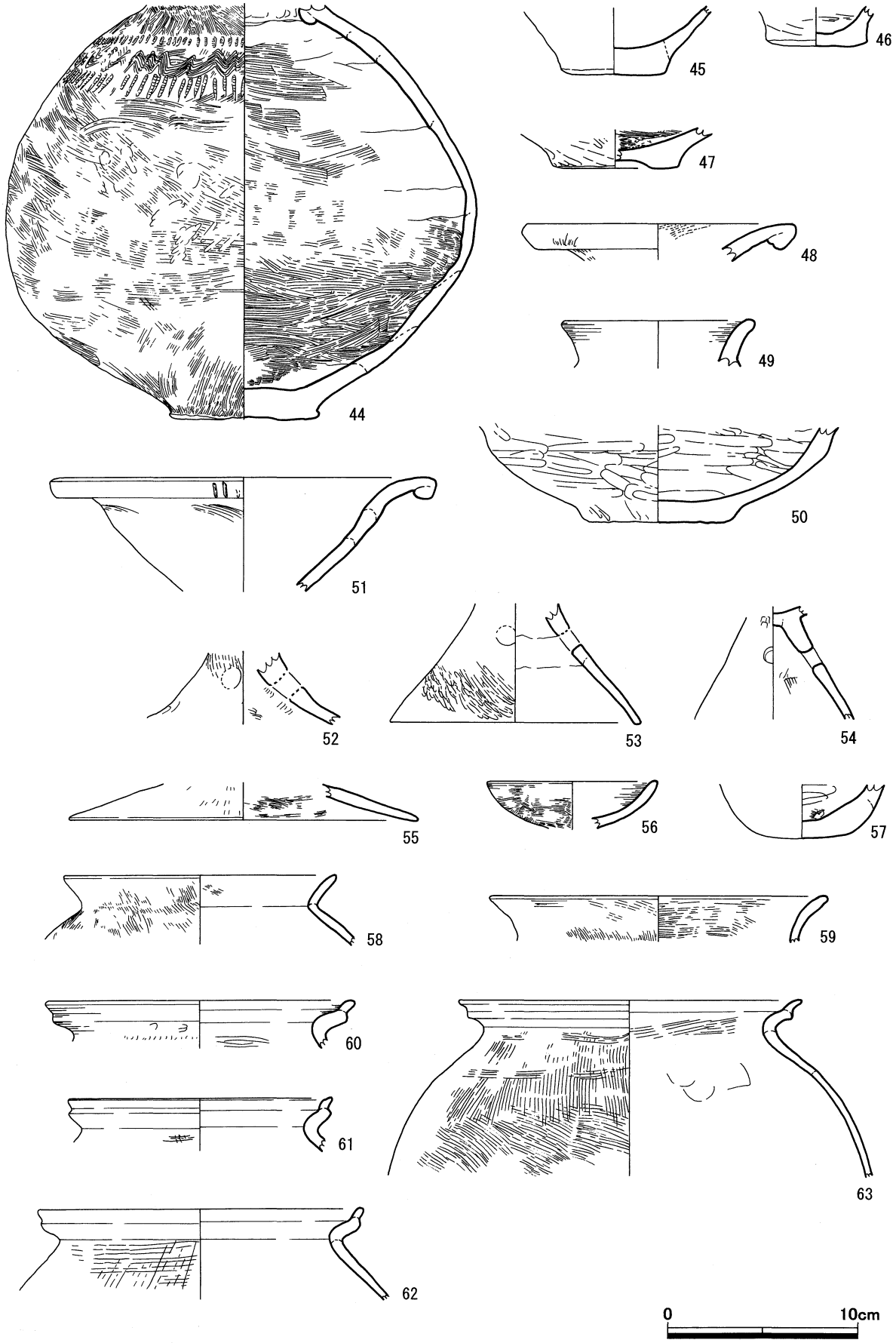
第22図　出土遺物実測図（1）



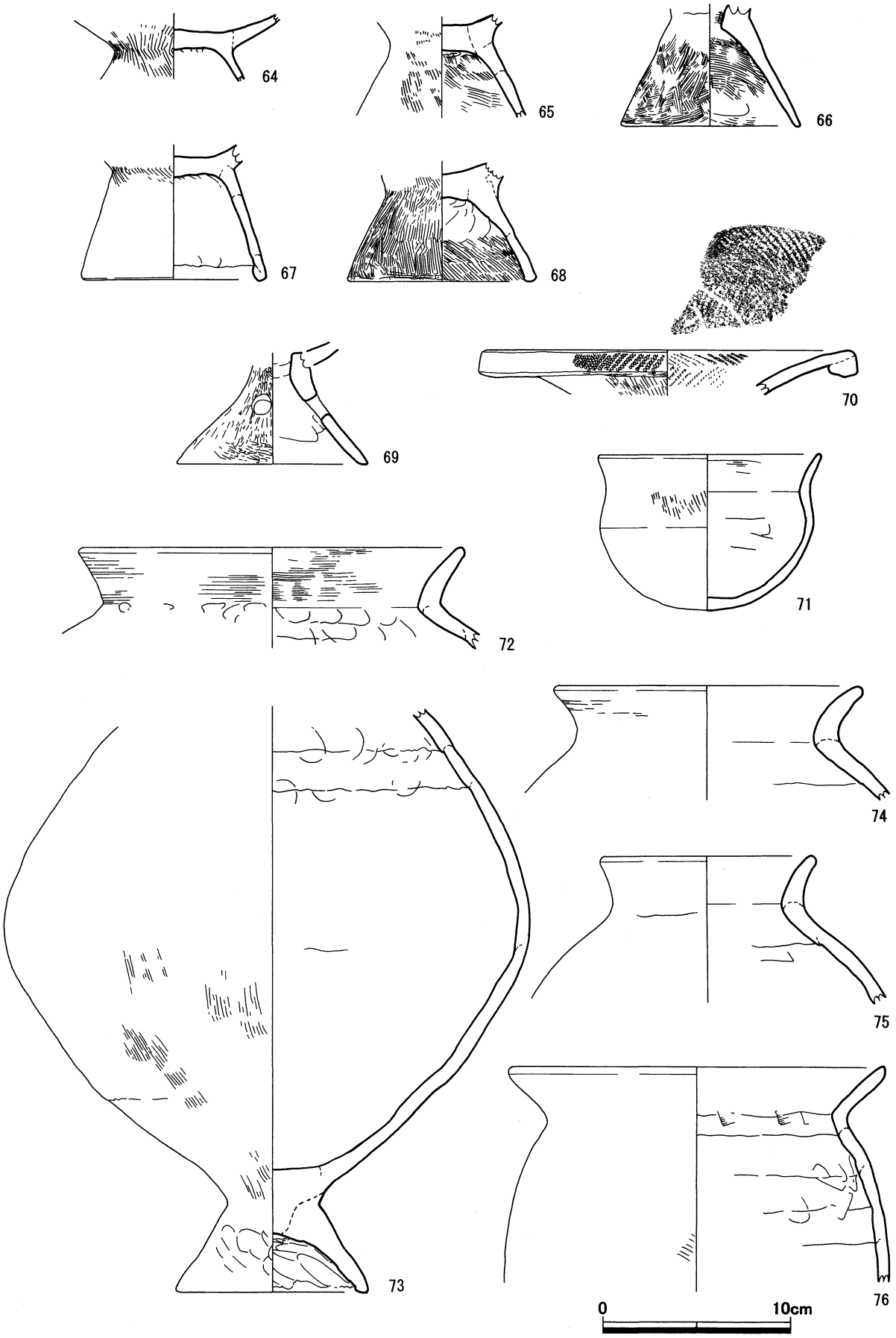
第23図　出土遺物実測図（2）



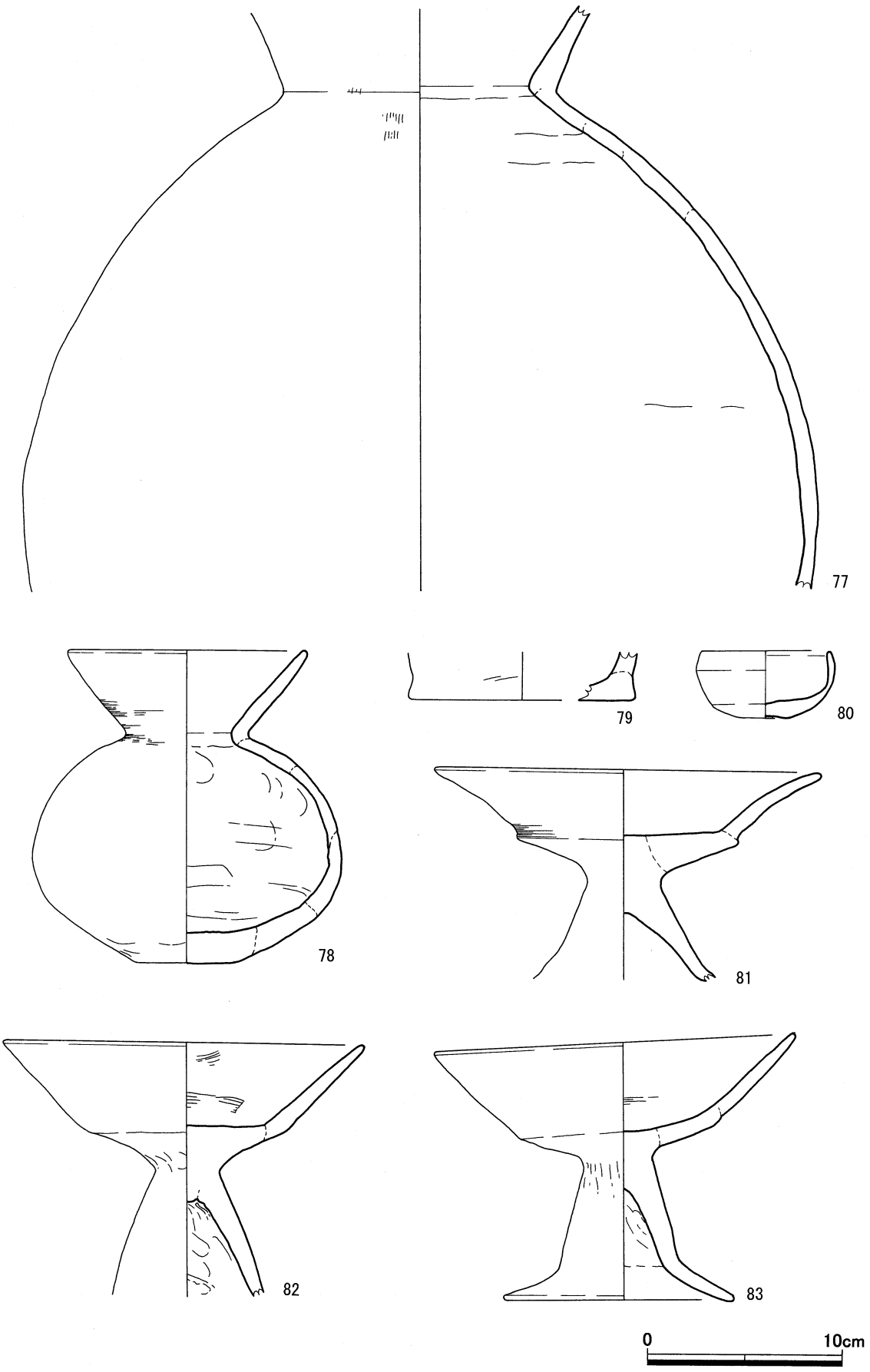
第24図　出土遺物実測図（3）



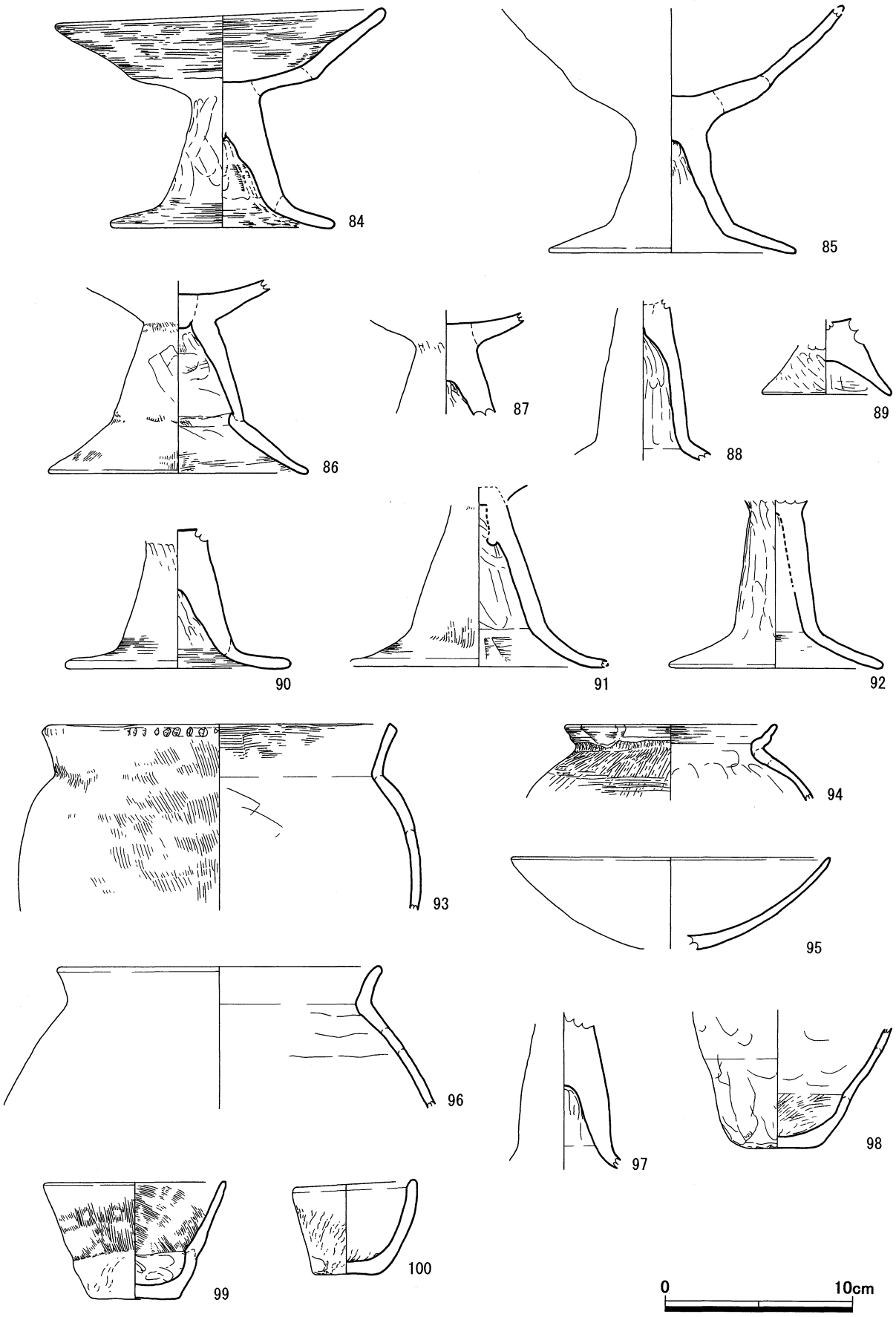
第25図　出土遺物実測図（4）



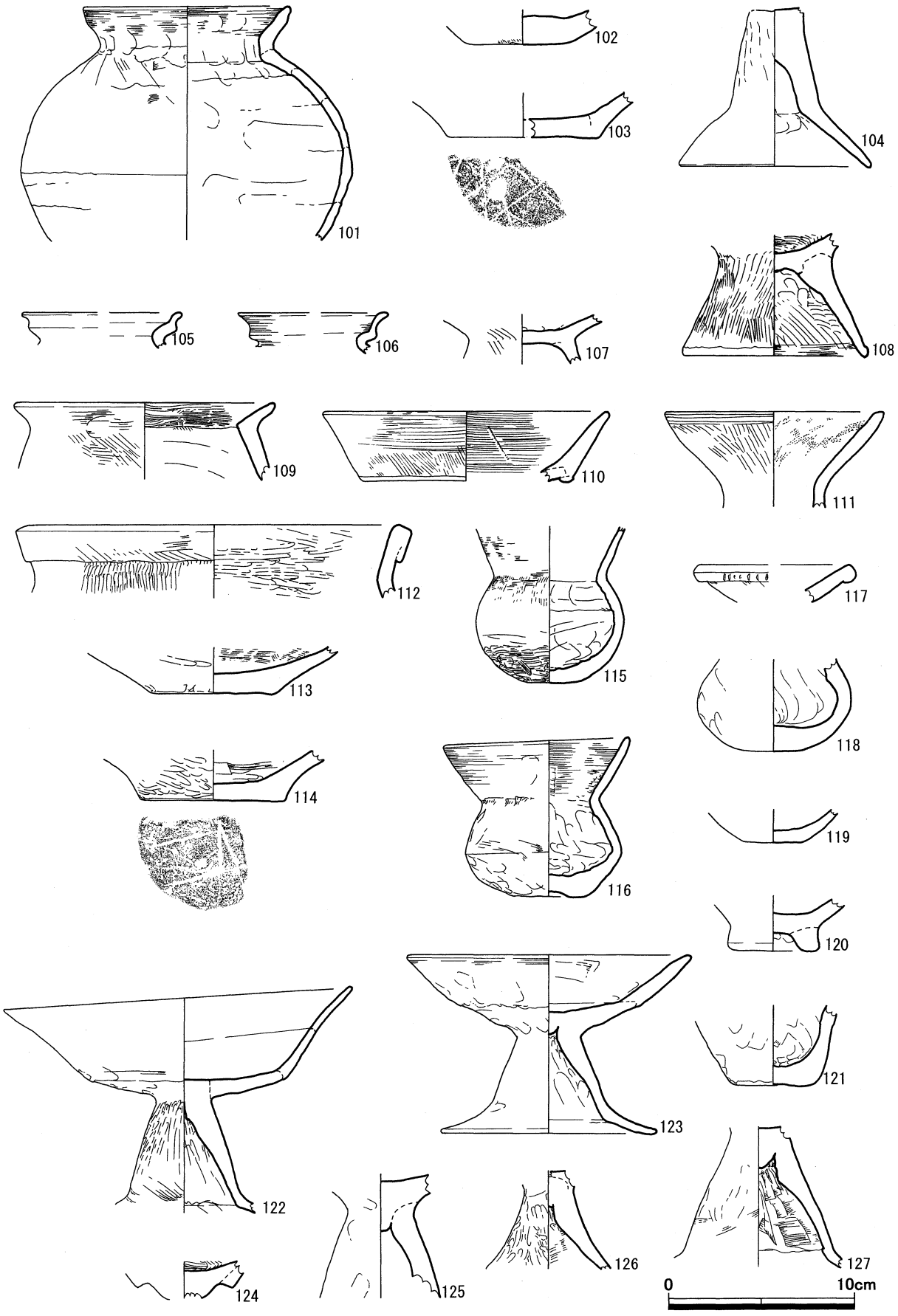
第26図　出土遺物実測図（5）



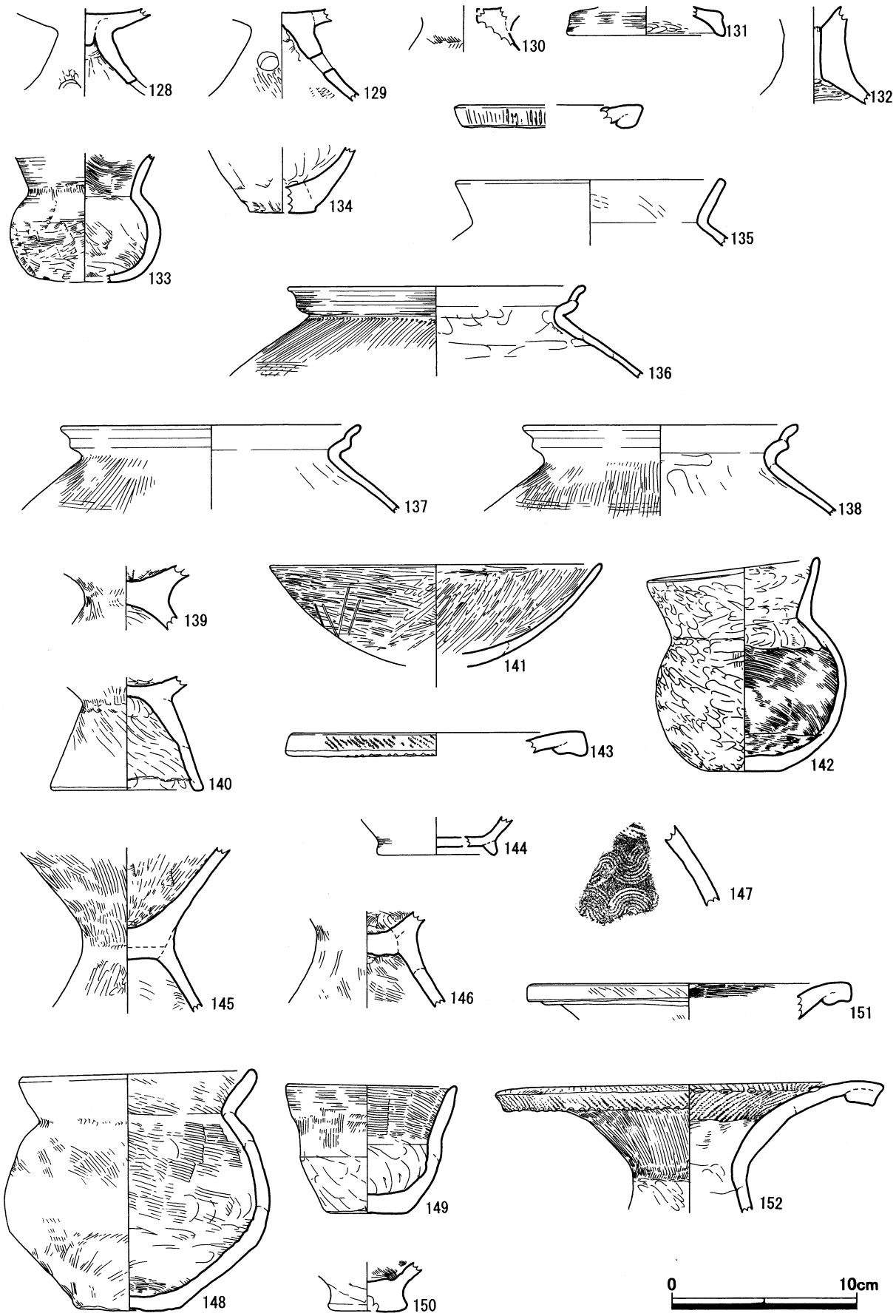
第27図　出土遺物実測図（6）



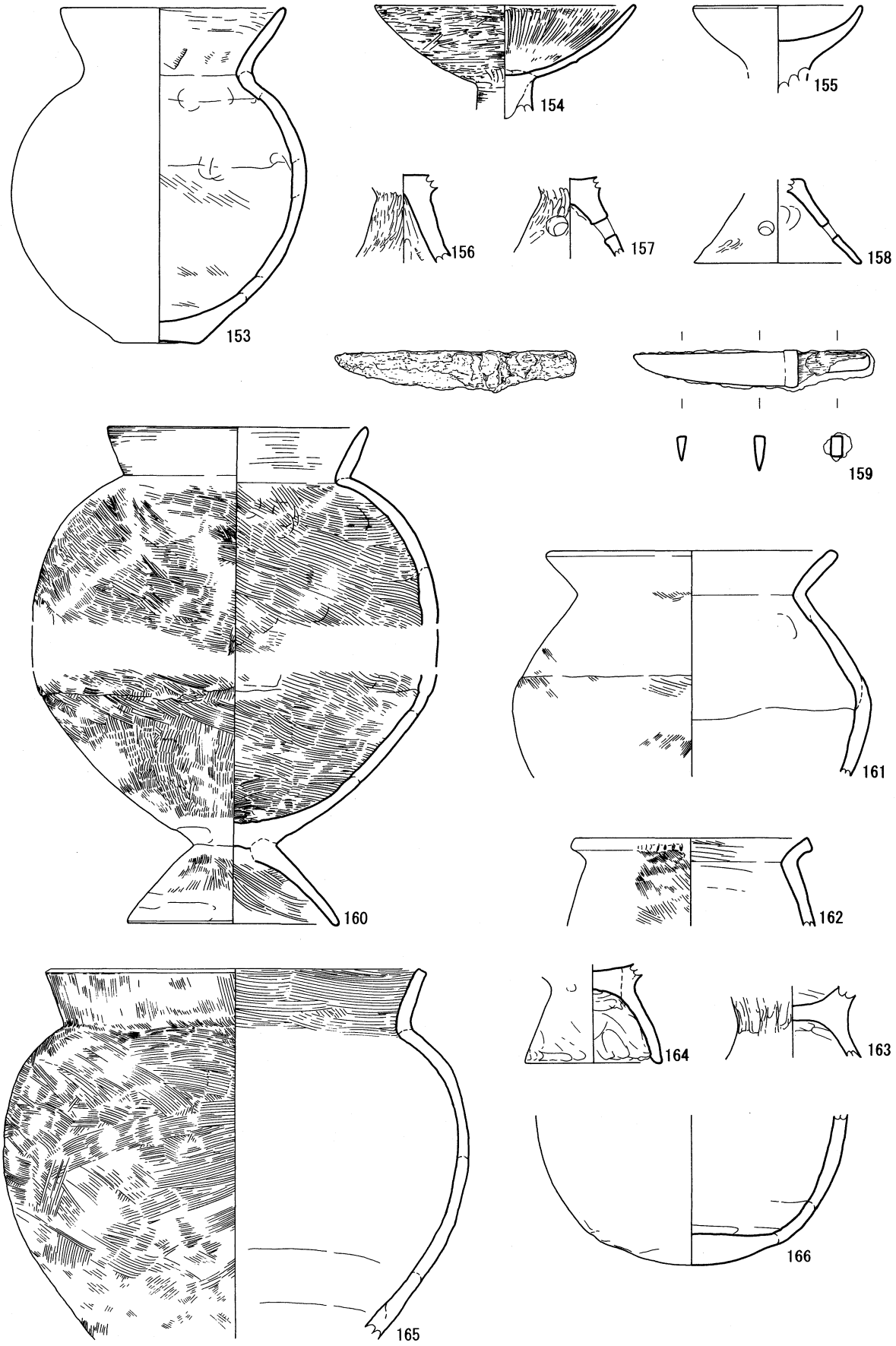
第28図　出土遺物実測図（7）



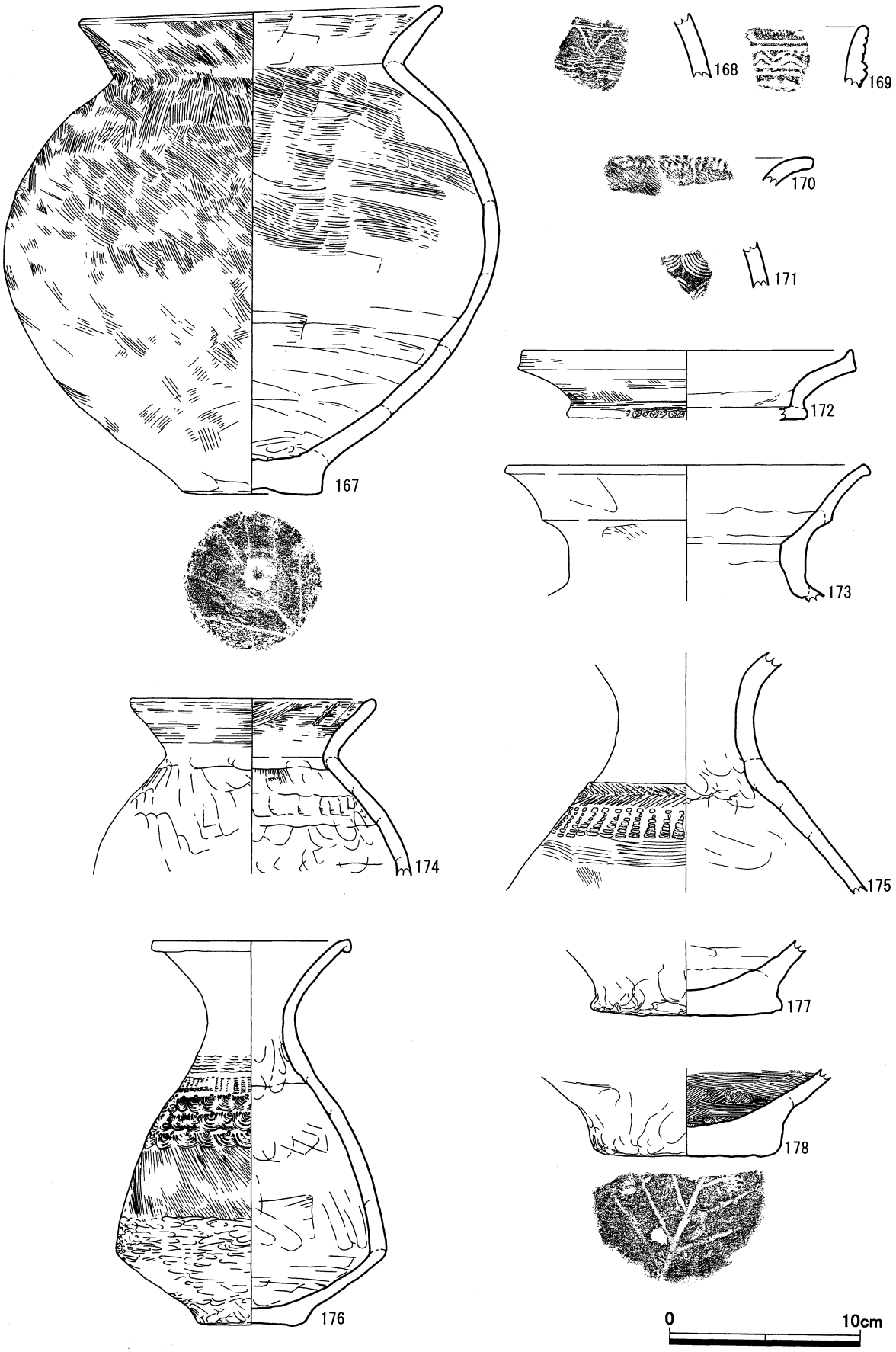
第29図　出土遺物実測図（8）



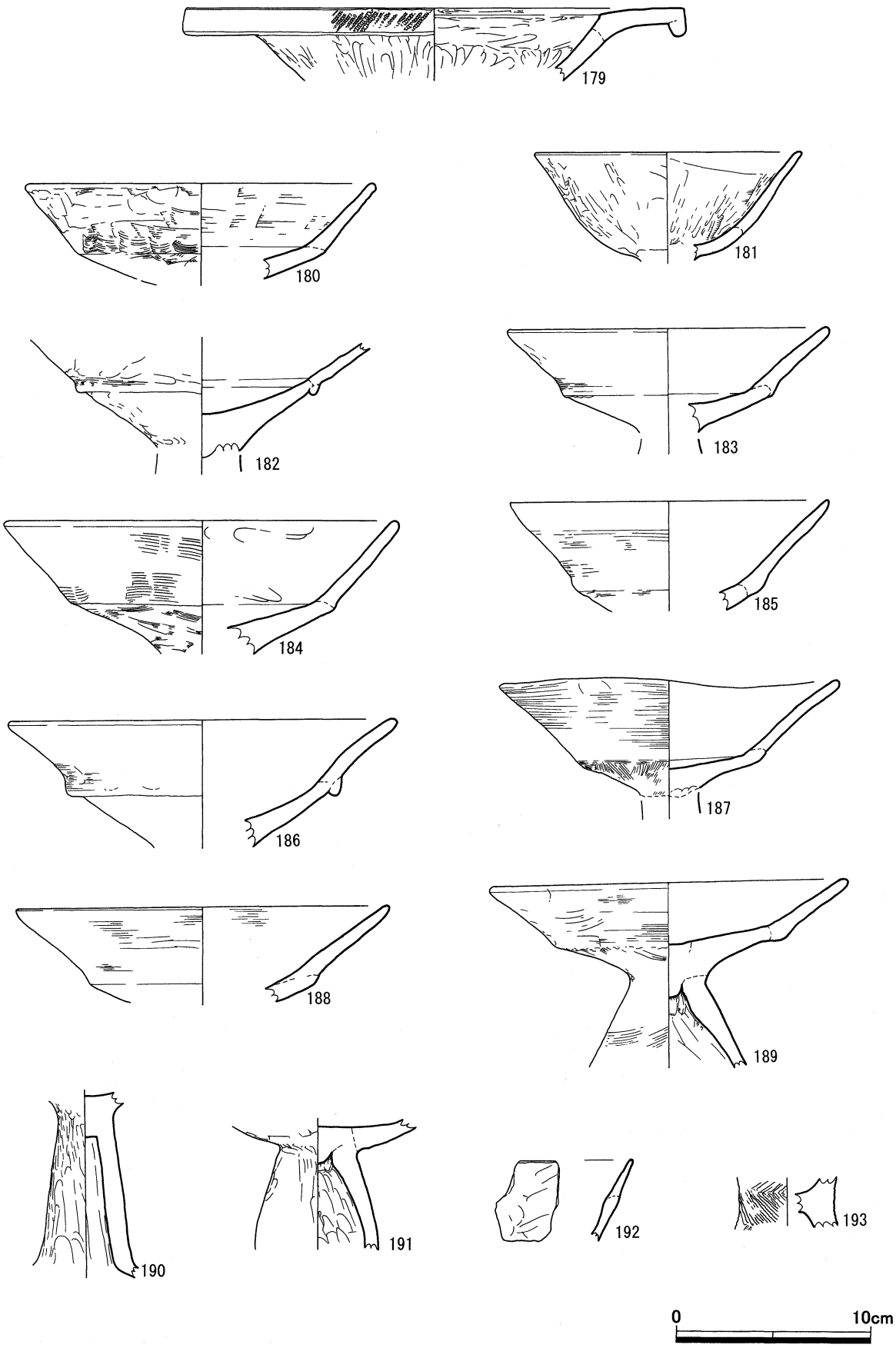
第30図　出土遺物実測図（9）



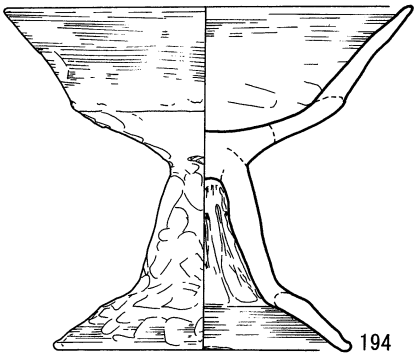
第31図　出土遺物実測図（10）

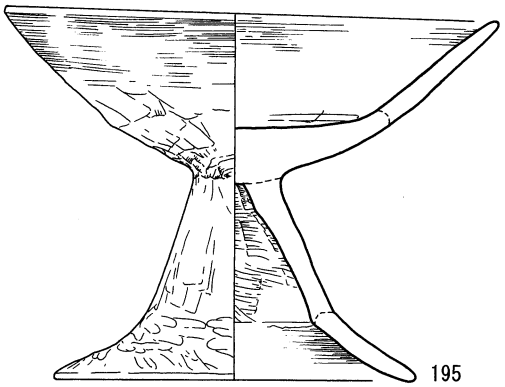


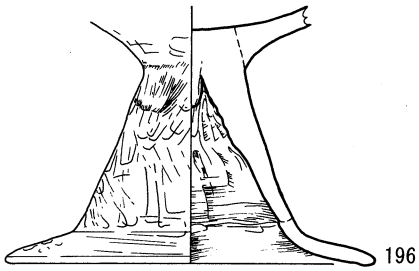
第32図　出土遺物実測図（11）

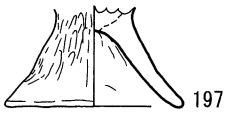


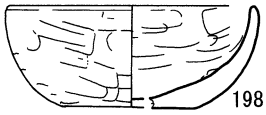
第33図　出土遺物実測図（12）

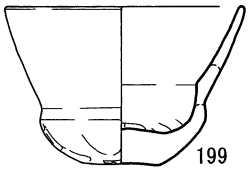


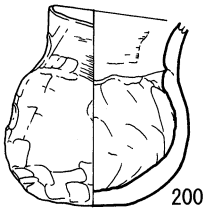


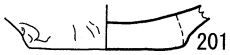


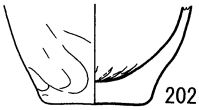


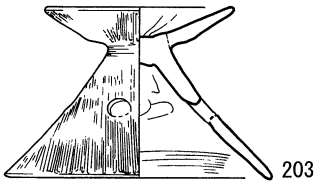


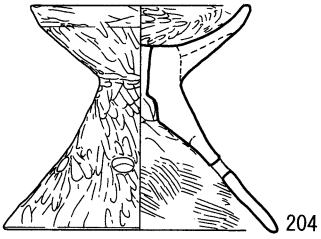


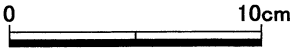




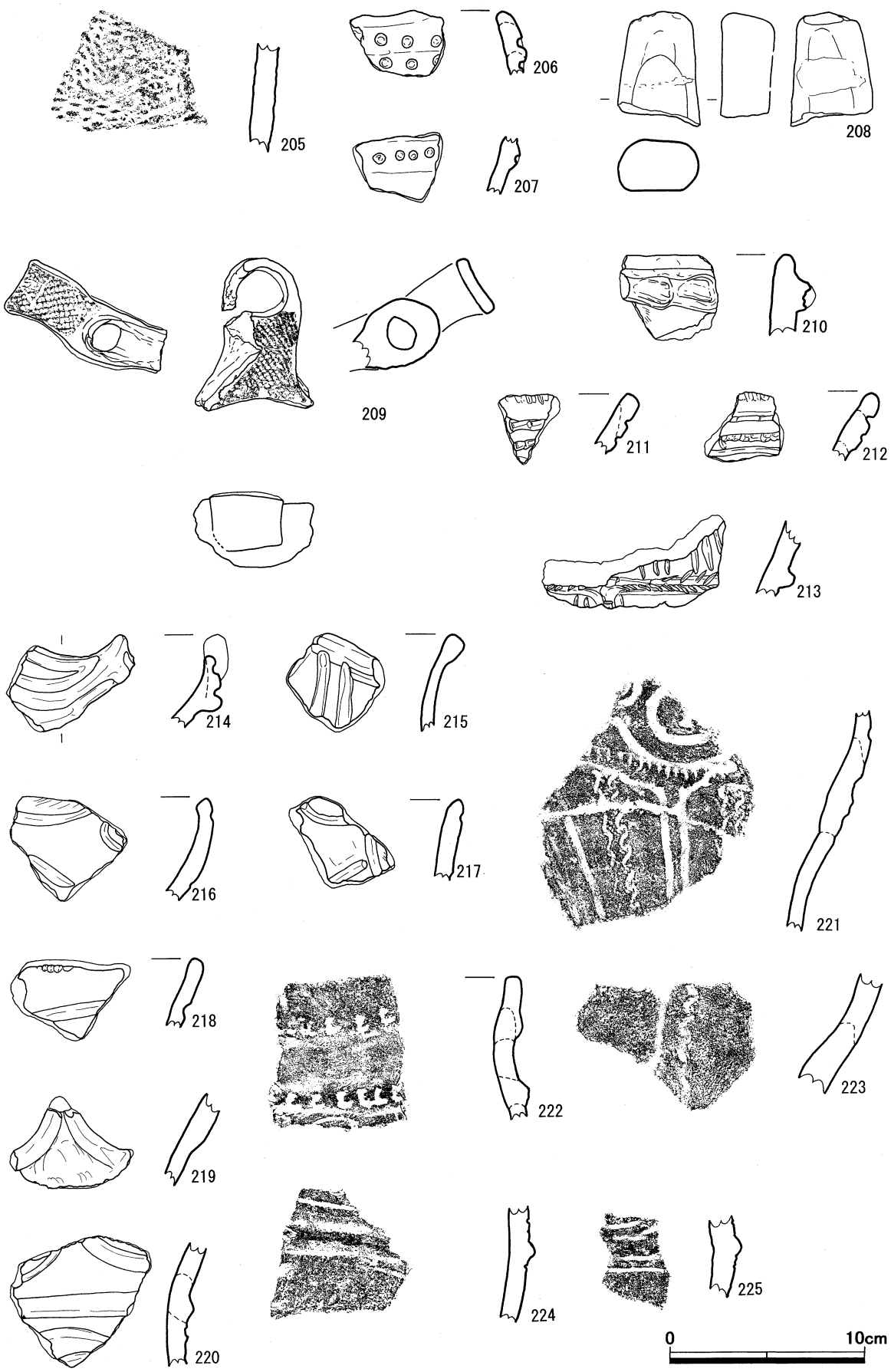




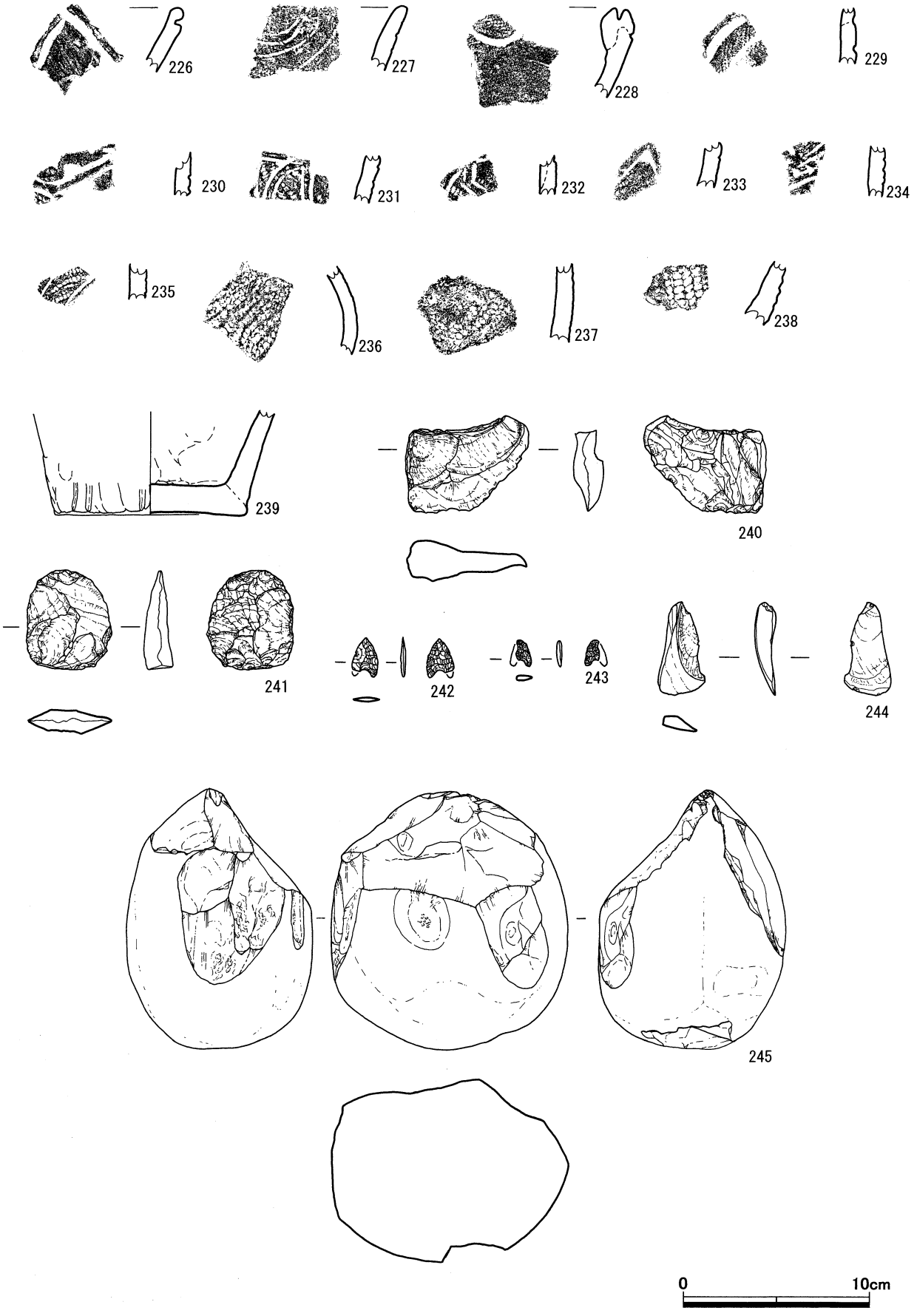




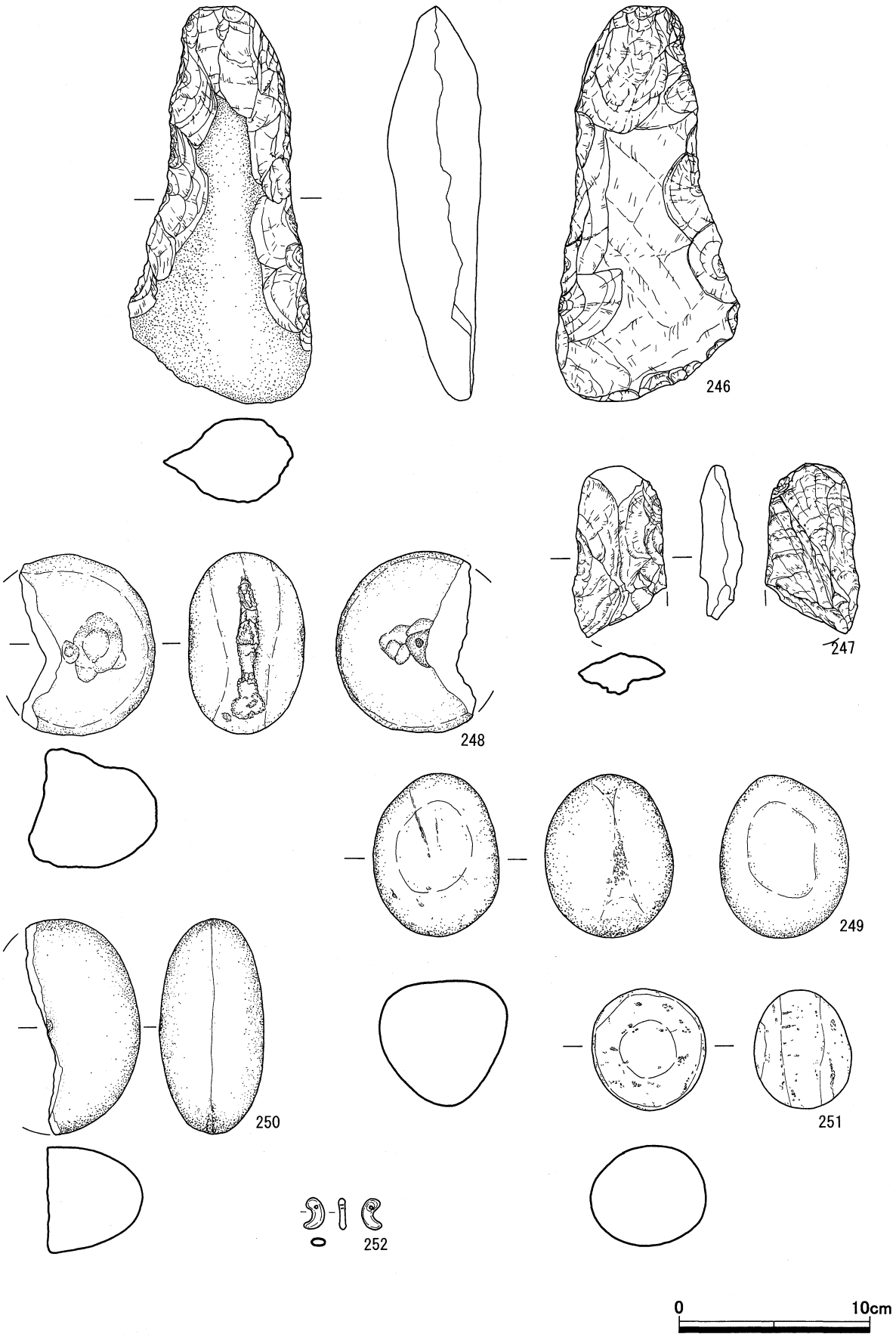
第34図　出土遺物実測図（13）



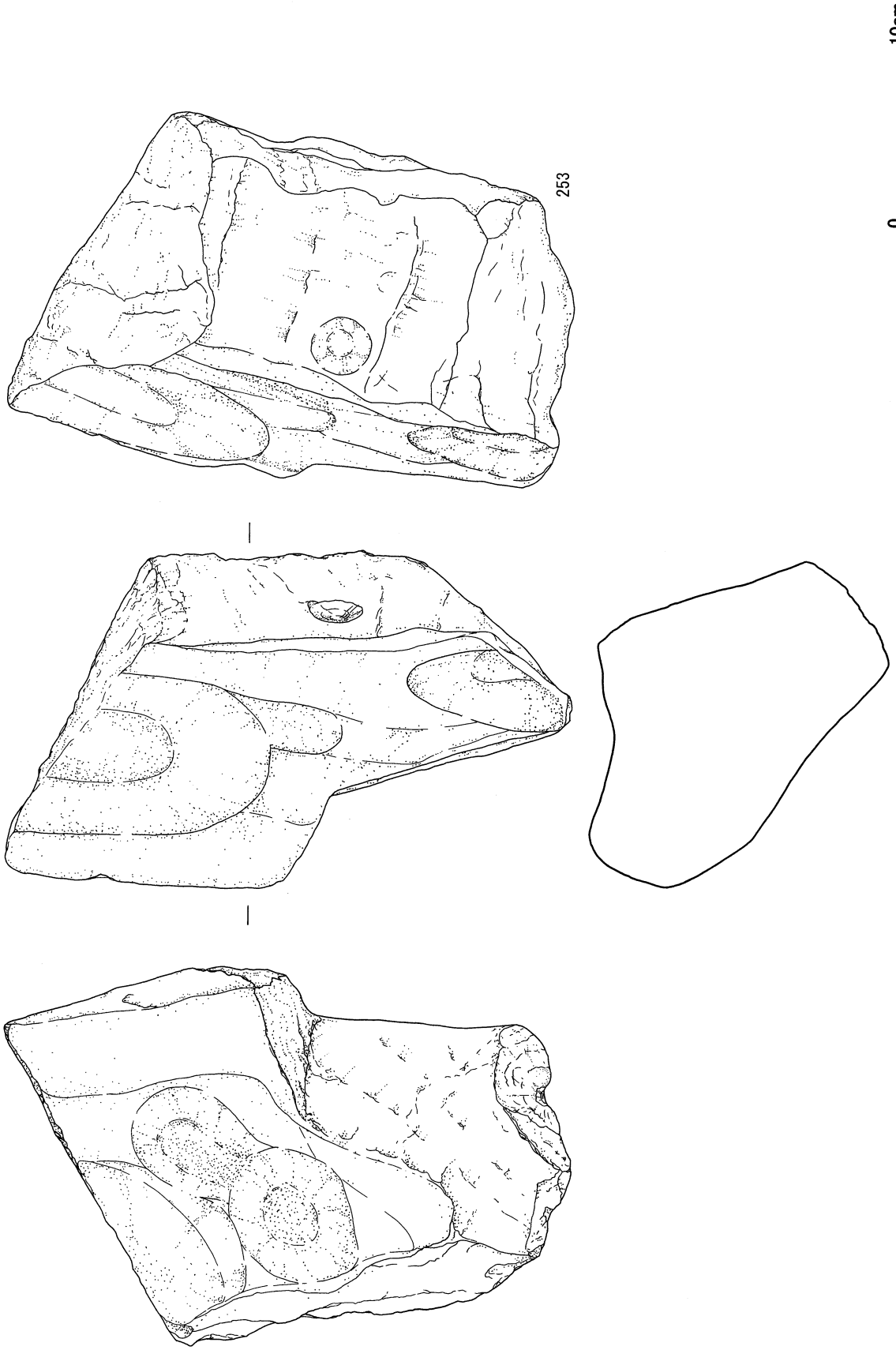
第35図　出土遺物実測図（14）



第36図　出土遺物実測図（15）



第37図　出土遺物実測図（16）



第38図　出土遺物実測図（17）

吉岡下ノ段遺跡第12次調査

Ⅲ　吉岡下ノ段遺跡第12次発掘調査

1　調査に至る経緯

平成26年、当地点において茶園改植の計画があることがわかり、耕作者と協議の上、同年７月15、16日に確認調査を実施した。計画予定地内に幅１ｍで長さ33.3ｍと26.5ｍの２本のトレンチを東西方向に設定した。その結果、地表下0.8～１ｍの深さにおいて遺構の存在が両トレンチで確認され、しかも遺物が多量に出土した。これを受け耕作者と協議した結果、改植による遺跡の破壊は、免れないことが明らかとなったため、記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

平成26年９月17日付けで、掛川市教育委員会は静岡県教育委員会に「埋蔵文化財発掘の届出書」を進達した。これに対し、同年９月25日付けで、県教育委員会から耕作者あてに、本発掘調査実施を内容とする「土木工事等のための発掘に係る指示について」が通知された。

今回の調査地点は、吉岡下ノ段遺跡の西端にあり隣接する高田上ノ段遺跡から東に向かって緩やかに傾斜し始める位置にあたる。

2　調査の方法と経過

今回の調査区は、遺跡の消滅が免れない830㎡である。

調査区の設定　対象地の地形に合わせて５ｍ四方のグリッドを設定し、遺物の取り上げ、実測図面作成のための基準とした。東西の列を東からＡ、Ｂ、Ｃ･･･のアルファベットで、南北の列を北から１、２、３････の数字で表すことにした。それぞれの交点をその杭の名称とし、グリッド名は南西角の杭の名称と一致させた。

また、調査地点を国家座標で記録するために、基準点測量を業者に委託し実施した。

実際の発掘調査にあたっては、排土置き場を確保する必要から調査区を南北の二つに分割し、北側の調査区を10月20日～12月19日まで、南側の調査区12月22日～２月20日まで実施した。

重機掘削風景

重機掘削　耕作土の除去を、重機（バックホー）、クローラーダンプを１台ずつ用いて行った。

遺構検出　最初は、遺構確認面において人力により、粗掘を行った。鍬と鋤簾を使用し、５～10cmほど地表を掘り下げた後、鋤簾を用いて新たな地表面を丁寧に削り遺構を検出した。

遺構掘削風景

遺構掘削　検出した遺構は、移植ゴテを使用して掘り下げた。遺構の切り合い関係や堆積状況を確認するために、サブトレンチを設定し、あるいは土層帯を残し、土層の観察をしながら進めた。

遺構実測　遺物が集中して出土した場合は、遺物出土状態図を1/10の縮尺で、その他の所では平面図と土

層断面図を1/20の縮尺で作成した。

写真撮影　現地記録写真の撮影は、６×７判（モノクロ）1台と35㎜判（カラーネガ、リバーサル）２台、デジタルカメラ１台を使用した。

現地説明会　調査の成果を公開するため、地元市民を対象に、それぞれの調査区で現地説明会を開催した。北側調査区は第11次調査と合わせて11月22日に実施し、54人の参加者があり、南側調査区は２月７日に実施し、40人の参加者があった。

整理作業　出土した土器は、表面がもろくなっているため水洗いした後、バインダー液にひたし、強化した。土器本体に出土位置を注記し、また接合復元した後、実測等の作業を行った。現地で作成した図面類は、報告書用に編集し清書した。そして、遺物の写真撮影、調査所見等を原稿にまとめ、印刷に付した。

実測風景

現地説明会風景

3　調査の成果

（1）遺構・遺物

調査区は、茶樹を抜根した時点で土器片が数多く出土しており、耕作土の下層の黒褐色土の包含層からは重機による表土掘削時から壺の大型破片等が確認された。調査区の東側５ｍは、撹乱を受けており、開墾当時の重機による掘削跡が認められた。

調査では、竪穴住居跡４軒分、掘立柱建物跡１棟分の他、約340の小穴を確認した。遺構の年代は、古墳時代前期を中心としている。

竪穴住居跡：SB01、SK01（第２、３、４、８、９、12図）

調査区の北区、南区にまたがるＣ、Ｄ－３、４区に位置する。規模は東西６ｍ、南北６ｍで、形状は隅丸正方形である。明確な貼床をもち、中央やや東寄りにＡＢの二つの炉跡を確認した。Ａの炉跡は、その南側に石を伴い、Ｂの炉跡は南側に褐灰色粘土を伴っていた。主柱穴は、Ｐ３、８、18、22と10、28、23、21の４本２組が認められることから、建て替えが存在した可能性が高い。床面で検出されたSP09の底には５～10cm大の礫が入れられていた。先に調査した北区では確認できなかったが、南区調査では壁溝を確認した。

住居跡西辺の中央付近にあるSK01との新旧関係は土層の堆積状況からは明確にできなかったが、遺構を検出した際には、切合関係からSB01が新しいと判断された。SK01は、いびつな形状を呈し、覆土中からは多量の土器、礫、炭化材が出土した。

遺物は覆土、床面からまとまって出土したが、完形品はほとんどなかった。第８、９図１～43がSB01の出土遺物である。1～12が壺である。１～５は広口壺の口縁部であるが、１、２は口唇部を丸く仕上げ、３～５は口唇部に面を持つ。５は端面をもつだけでなく、上に拡張されている。６は二重口縁壺、７は複合口縁壺の口縁部である。７は大廓型と呼ばれる駿河の壺で、単位は不明であるが、棒状貼付文の痕跡が確認された。８～12は壺体部または底部片である。13と14はくの字口縁甕の口縁部、15～21はＳ字甕の口縁部である。14は、Ｃ－２区SP17から出土した土器破片と接合した。16は、頸部に沈線が施され、頸部直下の調整は、タテハケの後にヨコハケを施すものである。17は、SB01内のSP22、SB04の覆土、Ｄ－２区遺構検出面から破片が出土した。SB04から出土した破片は火を受けたことにより、変色している。17、21の口唇部内側には、沈線が施されている。22～29はくの字口縁甕の台部である。30～32はＳ字甕の台部である。33～36は高坏の破片である。34は三方に円形透かしを、35は四方に円形透かしを持つ。37～39は小型丸底鉢である。40は小型鉢の底部である。41は用途不明品であるが、土製支脚の可能性も考えられる。42、43は弥生時代後期菊川様式の壺の破片である。42は体部に、43は口唇部と内面に無節の縄文が施されている。住居跡内の覆土から桃の種が２つ出土した。SB01の年代は、混入品の菊川様式を除く出土遺物から古墳時代前期、元屋敷様式の新段階に位置づけられる。（中嶋1997の三沢西原様式新段階）

SK01の出土遺物は、第12図の76～86である。76～81は壺である。79と80は壺の頸部から肩部にかけての破片であり、菊川様式の壺の形態を留める。79は頸部の下に突帯をもち、80は櫛描き波状文が施されている。81は口唇部に刻み目が施されている。82は甕、83～85は高坏破片で、84は開脚高坏の脚部である。86は小型鉢である。弥生時代後期菊川様式の混入も見られるが、SK01の年代はSB01に先行する古墳時代前期前葉、元屋敷様式の古段階に位置付けられる。

竪穴住居跡：SB02（第４、９図）

調査区の北区Ｆ－３、４区で検出された竪穴住居跡であるが、掘り方ははっきりせず、貼床と焼土が確認されただけであって規模や形状は全く不明である。貼床と焼土は、土器とともにベースから35cm上面で検出された。貼床の範囲は東西２ｍ、南北1.5mである。Ｅ－３杭周辺では５層の黄灰色土が広い範囲で堆積しており、この層に小穴が掘り込まれていることが確認できた。

出土遺物は、第９図44、45である。45は壺体部片で、櫛描き波状文の下に縄文が施された弥生時代後期の菊川様式の壺である。44は、貼床除去後に出土したＳ字甕の台部片である。

竪穴住居跡：SB03（第４、９図）

調査区南辺のＢ、Ｃ－６区に位置する。住居跡北辺の一部を確認しただけで、ほとんどは、調査区外へ及ぶ。規模は不明であるが、形状は隅丸方形と推測される。掘り方の周囲には壁溝があり、焼土も２か所で検出された。

出土遺物は、第９図46～51である。46は広口壺の頸部、47は壺底部である。調整は、マメツにより不明である。48は高坏坏部、49～51は小型鉢である。51はSP361の最下層から出土した。これらの出土遺物からSB03の年代は古墳時代前期、元屋敷様式の新段階に位置づけられる。

竪穴住居跡：SB04（第５、10図）

調査区のＤ、Ｅ－５区に位置する。規模は東西3.6m、南北3.8mと小さく、形状は隅丸正方形である。南辺の中央寄りに２つの炉跡、住居跡内の中央付近を中心に焼土が広がっていた。主柱穴は検出されなかったが、南東隅からは直径60cmの貯蔵穴と推定される穴が、北西隅からは直径20～30cmの小穴３つが検出された。覆土中からは、大量の炭化材と土器片、石が出土しており、焼失家屋と推定される。

出土遺物は、第10図52～75図である。52、53は壺である。52の体部外面にはススが付着していた。54～57はくの字口縁甕である。54の内面上部には、ススが付着していた。58、59はＳ字甕の口縁部、60はくの字口縁甕の台部、61はＳ字甕の台部である。62、63は小型高坏、64は器台である。65は小型丸底鉢、66、67、69は小型壺や鉢の底部、68は小型鉢である。70～75は、弥生時代後期菊川様式の壺小片で、70は口唇部に縄文が施され、71は口縁部の内外面に縄文が施されている。72、73は肩部に櫛刺突有段による羽状文が施された肩部である。70は、内外面に赤彩が施されている。これらの出土遺物から混入品がみられるもののSB04の年代は、古墳時代前期、元屋敷様式の新段階に位置づけられる。

掘立柱建物跡：SH01（第６、10図）

Ｂ、Ｃ－５、６区に位置する。柱間は、梁間１間×桁行２間で、規模は３ｍ×3.4mを測る。長軸の方位は、N91° 30′ Wである。SP249では、柱痕が確認された。

出土遺物は、第10図87でSP228から出土したＳ字甕の台部である。その他の小穴からも遺物が出土しているが、小片で図示することはできなかった。

性格不明遺構：SX01（第６、10図）

Ｅ－２区に位置する。規模は長軸1.85m、短軸1.65m平面形はいびつな円形を呈する。
出土遺物は、第10図99に示した縄文時代中期の深鉢片である。

小穴

SP17（第７、８図）

Ｃ－２区に位置する。規模は直径0.38mで、平面形は円形を呈する。

出土遺物は、第８図14に示したくの字口縁甕の口縁部破片で、SB01から出土した破片と接合した。

SP74（第７、11図）

Ｅ－２区に位置する。規模は長軸0.6m、短軸0.5m、平面形は楕円形を呈する。

出土遺物には第11図88の壺の体部片がある。

SP85（第７、11図）

Ｄ、Ｅ－２区に位置する。規模は長軸1.0m、短軸0.65mで、平面形は不整形である。

出土遺物は、第11図89の壺底である。

SP88（第７、11図）

Ｄ－２区に位置する。規模は長軸0.5m、短軸0.38mで、平面形は楕円形を呈する。

出土遺物は、第11図90のくの字口縁甕で、検出面から出土した。台部は欠損していた。胴部の内外面ともにその下半には、多量のススが付着していた。

SP89（第７、11図）

Ｄ－３区に位置する。規模は長軸0.48m、短軸0.4mで、平面形は楕円形を呈する。

出土遺物は、第11図91に示した口縁部を欠損する壺である。欠損状況から二重口縁の壺と思われる。検出面から出土した。

SP93（第７、12図）

Ｄ－２区に位置する。規模は長軸0.65m、短軸0.6mで、平面形はいびつな円形を呈する。

出土遺物は、第12図92、93で92は高坏の坏部、93は小型壺の口縁部である。

SP265（第７、12図）

Ｄ－６区に位置する。規模は長軸１.0m、短軸0.75mで、平面形は楕円形を呈する。

出土遺物は、第12図94、95で94は口唇部に櫛刺突文を施した折返口縁の壺、95は小型高坏の坏部である。

SP288（第７図）

Ｅ－６区に位置する。規模は長軸0.65m、短軸0.52mで、平面形は隅丸長方形を呈する。底には大きさが20㎝大の集石が確認され、石の間から小片の土器が出土した。SP289を切って掘られていることが確認できた。出土土器は小片で、図示できなかった。

SP307（第７、12図）

Ｅ－６区に位置する。規模は東西1.1mで、遺構の南側は調査区外へ及んでいる。

出土遺物は、第12図96と97で、96は直口壺、97はくの字口縁甕の台部である。96の口縁部は内湾して開くか、先端部を欠いている。底部は小さく窪んでいるだけである。97の外面にはススが付着していた。

SP333（第７、12図）

Ｄ－６区に位置する。規模は長軸0.55m、短軸0.4mで、平面形は楕円形を呈する。

出土遺物は、第12図98のＳ字甕の台部片である。内面にはススが付着していた。

SP355（第６図）

Ｄ－６区に位置する。検出された規模は長軸0.7mで、遺構の南側は調査区外へ及んでいる。SP355の上面には部分的に焼土が検出された。また、土層の堆積状況からは、柱が存在した可能性が高い。

掘立柱建物を構成する柱穴の可能性が考えられる。遺物は出土したが、小片で図示できなかった。

その他

遺構に伴わなかった遺物は、以下の通りである。

第12図100～104、106は壺である。100、102は重機掘削時に、101は確認調査時に出土した広口壺である。103は表採、104はＤ－４区の遺構検出時に出土した弥生時代後期菊川様式の壺で、103は口唇部に縄文を施している。107はＤ－３区南東において遺構検出時に出土した小型甕の上半部、108は表採の台付甕の台部、109はＤ－６区の黒褐色土から出土したＳ字甕の台部である。110は確認調査時に、111～112は表採の高坏の脚部、105は確認調査時に出土した器台の坏部である。113は表採の小型鉢である。114は表採の須恵器の甕片である。

（2）掛川市吉岡下ノ段遺跡における自然科学分析報告

株式会社 古環境研究所

1．はじめに

吉岡下ノ段遺跡は、掛川市吉岡に所在し、原野谷川によって形成された河岸段丘上に立地する。平成26年度に実施された発掘調査において、古墳時代前期の竪穴住居跡が検出された。竪穴住居跡からは、建築材などが燃焼したとみられる炭化材が多数出土している。

本報告では、これら炭化物を対象として、遺構の構築年代を明らかにする目的で加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行い、さらに当時の木材利用を検討するために炭化材の樹種同定を行う。

2．試料

試料は、SK01から出土した炭化材２点（通し番号①、③）、SB04④から出土した炭化材２点（通し番号②、④）、SB04から出土した炭化材６点（通し番号⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩）の計10点とSB01から出土したモモ種実１点である。なお、多数の炭化材片が含まれる試料については、状態の良い炭化材片をそれぞれ１点選択した。試料の詳細を表１に示す。いずれの遺構も古墳時代前期のものである。

表１　試料一覧

通し番号	試料	遺構	遺物台帳番号	分析項目	
①	炭1	SK01	K231(12)202	年代測定	樹種同定
②	炭1	SB04④	K231(12)367		樹種同定
③	炭3	SK01	K231(12)204		樹種同定
④	炭4	SB04④	K231(12)370		樹種同定
⑤	炭6	SB04	K231(12)372		樹種同定
⑥	炭7	SB04	K231(12)373		樹種同定
⑦	炭11	SB04	K231(12)377	年代測定	樹種同定
⑧	炭12	SB04	K231(12)378		樹種同定
⑨	炭13	SB04	K231(12)379		樹種同定
⑩	炭14	SB04	K231(12)380		樹種同定
⑪	モモ種実	SB01		年代測定	

3．放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約５万年前までの年代測定が可能である（中村,2003）。

（1）方法

表２に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

表２　測定試料及び処理

試料番号	出土地点	種類	前処理・調整	測定法
①	ＳK01	炭化材	超音波洗浄, 酸ーアルカリー酸洗浄	ＡＭＳ
⑦	ＳB04	炭化材	超音波洗浄, 酸ーアルカリー酸洗浄	ＡＭＳ
⑪	ＳB01	モモ種実	超音波洗浄, 酸ーアルカリー酸洗浄	ＡＭＳ

※AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

（2）結果

加速器質量分析法（AMS：Accelerator Mass Spectrometry）によって得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（^{14}C）年代および暦年代（較正年代）を算出した。表3にこれらの結果を示し、図1に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

表3　測定結果

試料番号	測定No.（PED－）	δ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（年BP）	^{14}C年代（年BP）	暦年代（西暦） 1σ（68.2%確率）	測定法 2σ（95.4%確率）
①	32489	−24.01±0.19	1807±19	1805±20	cal AD 143-155(8.5%) cal AD 168-195(22.1%) cal AD 209-243(37.6%)	cal AD 133-252(94.0%) cal AD 305-311(1.4%)
⑦	32490	−25.41±0.21	1755±19	1755±20	cal AD 248-260(14.0%) cal AD 280-325(54.2%)	cal AD 235-340(95.4%)
⑪	32491	−22.72±0.18	1747±18	1745±20	cal AD 252-264(11.9%) cal AD 274-330(56.3%)	cal AD 238-345(95.4%)

BP：Before Physics（Present），AD：紀元

1）δ^{13}C（デルタ）測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ^{13}C値を－25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

2）放射性炭素（^{14}C）年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、現在（AD1950年基点）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。統計誤差（±）は1σ（シグマ）（68.2%確率）である。^{14}C年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

3）暦年代（Calendar Years）

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中^{14}C濃度の変動および^{14}Cの半減期の違いを較正することで、放射性炭素（^{14}C）年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な^{14}C測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 13、較正プログラムはOxCal 4.2である。

暦年代（較正年代）は、^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により1σ（68.2%確率）と2σ（95.4%確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。()内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

（3）所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、SK01出土の炭化材（試料①）は1805±20年BP（2σの暦年代でAD 133～252年、AD 305～311年）、SB04出土の炭化材（試料⑦）は1755±20年BP（同AD 235～340年）、SB01出土のモモ種実（試料⑪）は1745±20年BP（同AD 238～345年）の年代値であった。

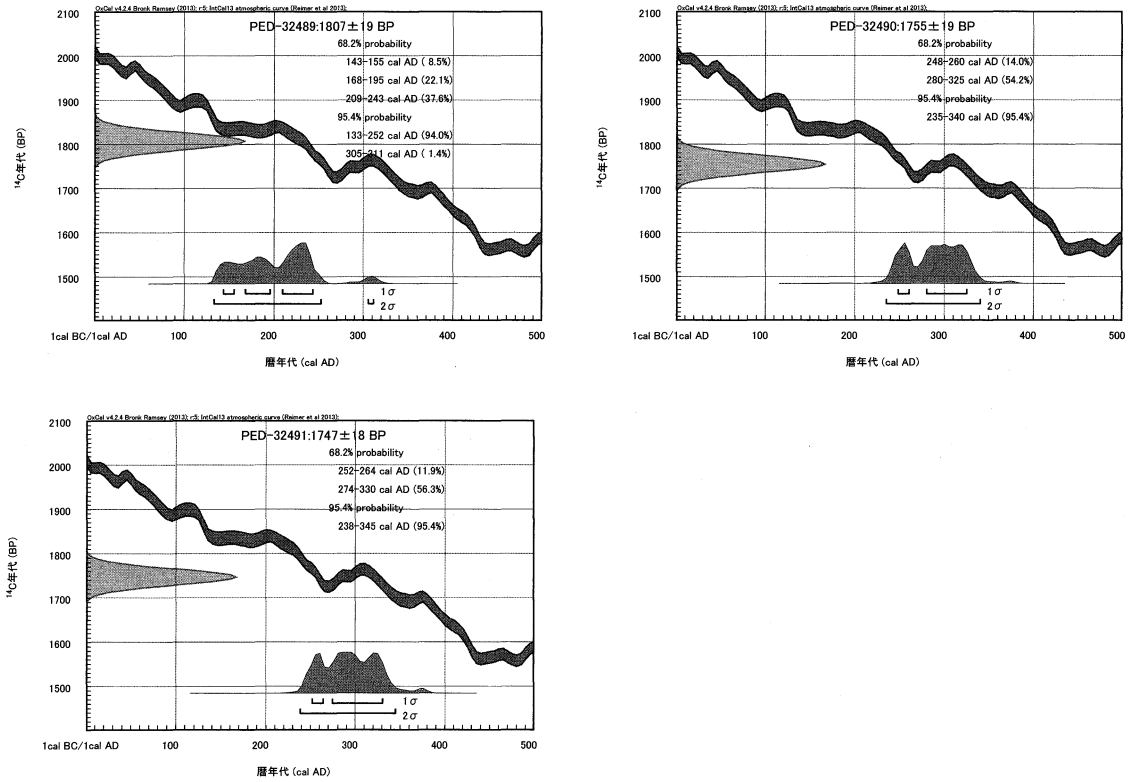


図１　暦年較正結果

４．炭化材樹種同定

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

（１）方法

樹種同定は以下の方法で行った。試料を割り折りして新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

（２）結果

表４に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示し、以下に木材構造の特徴を記す。なお、いずれの炭化材も焼き膨れの著しい軟質な消し炭（からけし）状である。

１）マキ属　Podocarpus　マキ科　　写真番号１　　通し番号⑤、⑥

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材で、早材から晩材への移行は緩やかである。木口面ではやや不明瞭であるが、早材から晩材にかけて散在する樹脂細胞が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は炭化により保存状態が悪くやや不明瞭であるが、ヒノキ型で１分野に１～２個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、１～20細胞高である。

以上の特徴からマキ属に同定される。マキ属にはイヌマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、

九州、沖縄に分布し、暖地に分布する針葉樹である。常緑の高木で、通常高さ20m、径0.5～0.8mである。材は耐朽性・耐水性が高く、建築材、器具材、桶、箱などに用いられる。

表２　測定試料及び処理

通し番号	結果（学名／和名）		試料番号	遺構	遺物台帳番号	状態	復元径
①	*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*	クリ	炭1	SK01	K231(12)202	軟質な消し炭	5cm以上
②	*Castanopsis sieboldii Hatusima*	スダジイ	炭1	SB04④	K231(12)367	軟質な消し炭	約3cm
③	*Prunus*	サクラ属	炭3	SK01	K231(12)204	軟質な消し炭	約5cm
④	*Cleyera japonica Thunb.*	サカキ	炭4	SB04④	K231(12)370	軟質な消し炭	2cm以上
⑤	*Podocarpus*	マキ属	炭6	SB04	K231(12)372	軟質な消し炭	約3cm
⑥	*Podocarpus*	マキ属	炭7	SB04	K231(12)373	軟質な消し炭	約3cm
⑦	*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*	クリ	炭11	SB04	K231(12)377	軟質な消し炭	5cm以上
⑧	*Castanopsis sieboldii Hatusima*	スダジイ	炭12	SB04	K231(12)378	軟質な消し炭	約3cm
⑨	*Quercus sect. Prinus*	コナラ属コナラ節	炭13	SB04	K231(12)379	軟質な消し炭	5cm以下
⑩	*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*	クリ	炭14	SB04	K231(12)380	軟質な消し炭	2cm以上

２）クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　　写真番号２　　通し番号①、⑦、⑩

年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列し、早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する落葉の高木で、通常高さ20m、径0.4mぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径２mに達する。水湿によく耐え、耐朽性・保存性が極めて高い材で、現在では建築材、器具材、土木材、薪炭材など広く用いられる。

３）スダジイ　Castanopsis sieboldii Hatusima　ブナ科　　写真番号３　　通し番号②、⑧

年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からスダジイに同定される。スダジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性・保存性がやや低いが、建築材、器具材などに用いられる。

４）コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科　　写真番号４　　通し番号⑨

年輪のはじめに大型の道管が１～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列し、早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉の高木で、高さ15m、径0.6mぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材、薪炭材などに用いられる。

５）サクラ属　Prunus　バラ科　　写真番号５　　通し番号③

丸い道管が単独あるいは２～３個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけて緩やかに減少する。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性放射組織型である。

以上の特徴からサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉の高木または低木である。材はやや重硬で粘りがあり、狂いが少なく、器具材、建築材、薪炭材などに用いられる。

6）サカキ　Cleyera japonica Thunb.　ツバキ科　　写真番号６　　通し番号④

小型の道管が、単独ないし２個複合して密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越えるものも観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる単列の異性放射組織型である。

以上の特徴からサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する常緑の高木で、通常高さ８～10m、径0.2～0.3mである。材は強靭かつ重硬であり、建築材、器具材などに用いられる。

（3）考察

吉岡下ノ段遺跡で出土した炭化材は、マキ属２点、クリ３点、スダジイ２点、コナラ属コナラ節１点、サクラ属１点、サカキ１点であった。遺構別にみると、SK01から出土した炭化材はクリ１点、サクラ属１点で、SB04、SB04④から出土した炭化材はマキ属２点、クリ２点、スダジイ２点、コナラ属コナラ節１点、サカキ１点であった。なお、炭化材は復元径２～５㎝程度の小径のものが多い。いずれの試料も焼き膨れが著しい軟質な消し炭（からけし）状で、燃焼した炭化材であり、火災を受けた建築材片や燃料として燃やされ利用された木材であると考えられる。

同定されたマキ属、スダジイ、サカキは、温帯下部の暖温帯に分布する常緑針葉樹または常緑広葉樹であり、クリ、コナラ属コナラ節、サクラ属も温帯に広く分布する落葉広葉樹で、温暖な東海地方に普通に分布する樹木である。マキ属は針葉樹材の中ではやや重硬かつ強靱で、耐朽性・保存性の高い水湿に強い木材である。静岡県では瀬名遺跡（弥生時代後期から古墳時代後期）や天の川遺跡（古墳時代中期から後期）などからマキ属の建築材が出土しており、弥生時代や古墳時代において建築材としてよく利用される。クリ、スダジイ、コナラ属コナラ節、サクラ属、サカキの広葉樹は概して堅硬かつ弾力性に富んだ材で建築材に適し、燃料材としては火持ちが良く火力が高い材である。

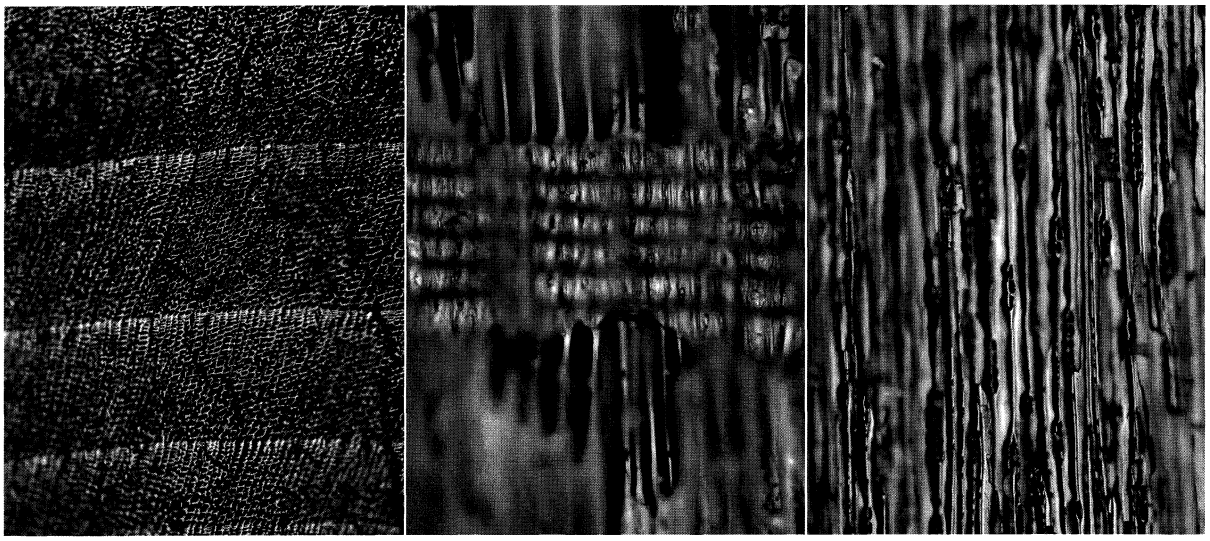
以上から、SK01、SB04④、SB04から出土した炭化材は、概して堅硬で弾力性に富んだ樹種や、燃料材としては火持ちが良く火力が高い樹種であり、遺跡周辺にも分布する樹種ばかりである。また、いずれの試料も径が比較的小さく、小型の建築材や燃料材などとして利用されたと推察される。

参考文献

伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学．出土木製品用材データベース，海青社，449p.
佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.
パリノ・サーヴェイ（2008）天の川遺跡理化学分析について．天の川遺跡平成15～17年度（国）150・473号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書，牧之原市文化財調査報告第１集，静岡県牧之原市教育委員会，p.270-294.
山内文・鈴木三男・西尾多加二（1996）遺構別出土遺物一覧．瀬名遺跡Ⅴ（遺物編Ⅱ），静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財調査報告書５　本文編，静岡県埋蔵文化財調査研究所，p. 1-64.
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史．植生史研究特別第１号，植生史研究会，242p.
中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」．日本第四紀学会，p.3-20.

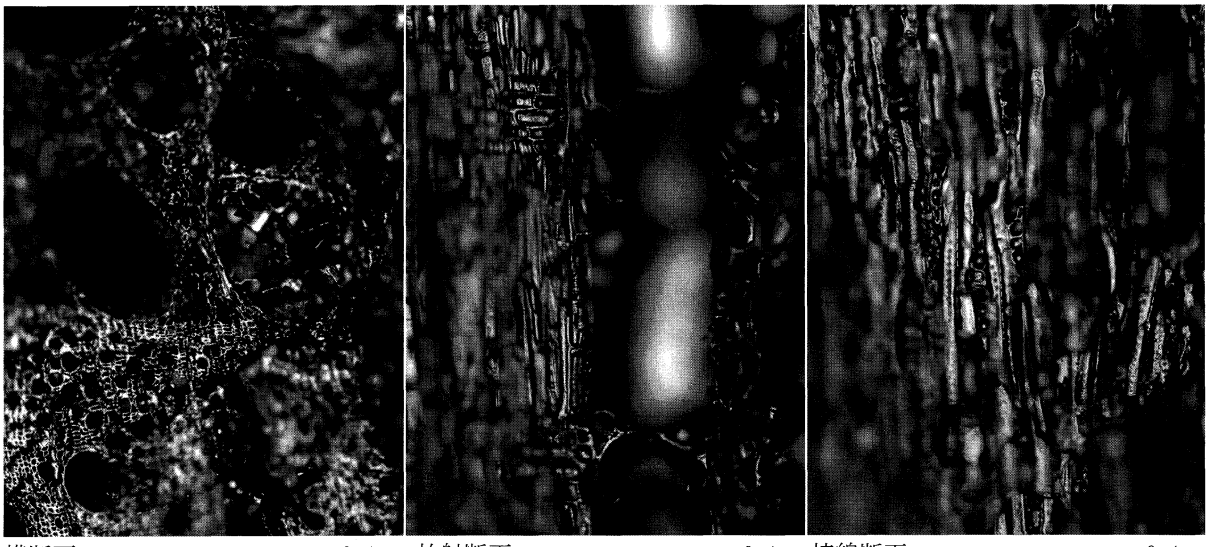
中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と暦年代較正．環境考古学マニュアル．同成社，p.301-322.
Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
Paula J Reimer et al., (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, p.1869-1887.
工藤雄一郎（2012）旧石器・縄文時代の環境文化史，新泉社，373p.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．文永堂出版，290p.

吉岡下ノ段遺跡の炭化材 I



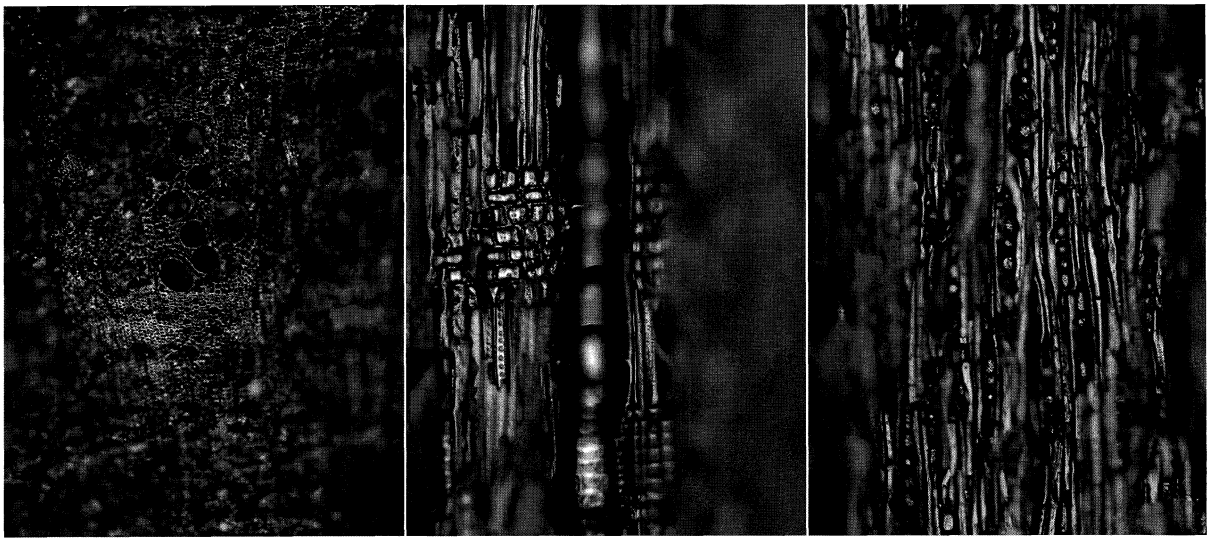
横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

1．マキ属　通し番号⑤ 炭6 SB04 K231(12)372



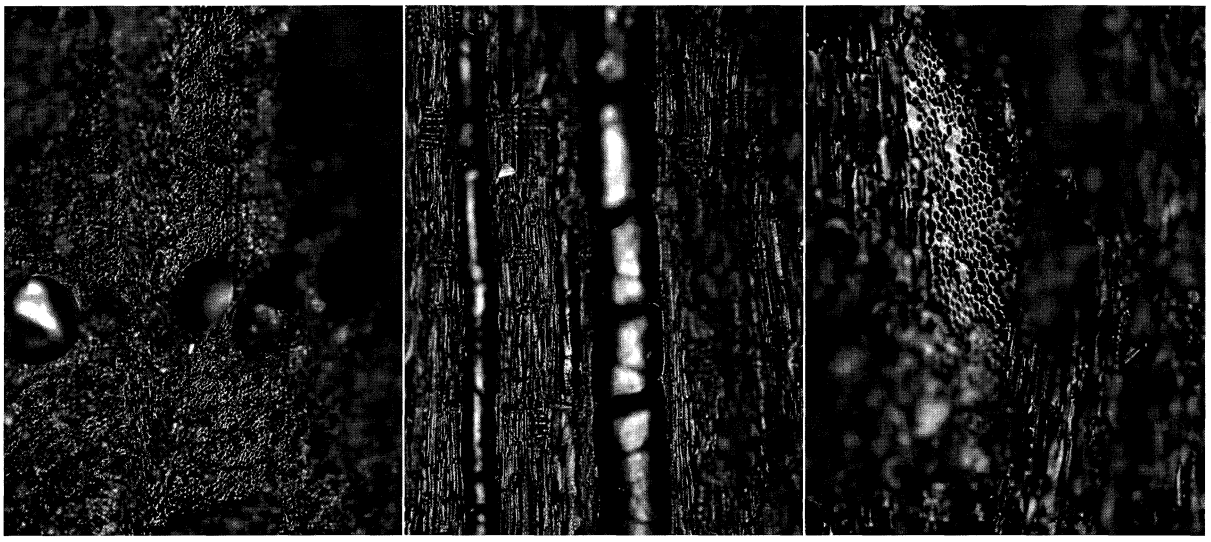
横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

2．クリ　通し番号⑩ 炭14 SB04 K231(12)380



横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

3．スダジイ　通し番号⑧ 炭12 SB04 K231(12)378



横断面 ━ 0.1mm 放射断面 ━ 0.1mm 接線断面 ━ 0.1mm

4．コナラ属コナラ節　通し番号⑨ 炭13 SB04 K231(12)379

横断面 ━ 0.1mm 放射断面 ━ 0.1mm 接線断面 ━ 0.1mm

5．サクラ属　通し番号③ 炭3 SK01 K231(12)204

横断面 ━ 0.1mm 放射断面 ━ 0.1mm 接線断面 ━ 0.1mm

6．サカキ　通し番号④ 炭4 SB04④ K231(12)370

4　まとめにかえて

今回の調査で検出した遺構の大半は、弥生時代後期の土器片は混じるものの、出土遺物から古墳時代前期に位置づけられる。SB01とSB04の竪穴住居跡２軒と掘立柱建物は、出土遺物と位置関係からみて同時期であったと推測される。SB01とSB04の年代は、放射性炭素年代測定から紀元300年前後の結果を得ている。集落の中心は南東方向に広がっていくと思われるが、今回の調査で発見された大小の住居跡（SB01、04）と小型の倉庫（SH01）は１家族が所有するいわゆる単位建物群と考えることが可能であろう。

また今回、SB04とSK01の樹種同定を行った。その結果は前章で述べられているが、クリ、スダジイ、サクラ属、サカキ、マキ属、コナラ属が確認された。これまでの周辺地域の建築部材の樹種同定の結果は、次の通りである。

弥生時代後期

堀越ジョウヤマ遺跡（袋井市）：マキ属、ヒノキ属

中平遺跡（浜松市）：スギ、コナラ、クリ、カシ属、クヌギ

六ノ坪Ⅳ遺跡（掛川市）：コナラ属、サカキ、エゴノキ属

東ノ谷遺跡（掛川市）：コナラ属、クリ

高田上ノ段遺跡（掛川市）：サカキ、ツブライジ、クリ、マキ属、スダジイ

古墳時代前期：クリ、コナラ属

吉岡原第７次（掛川市）：カエデ属、サカキ、クリ

女高Ⅰ遺跡第11次（掛川市）：ヒノキ、シイノキ属、サカキ、タブノキ、コナラ属

こういった周辺の樹種同定の結果から見て、今回の吉岡下ノ段遺跡の結果は、弥生時代後期から使用されていた部材と大きな変化は見られず、集落周辺に植生する樹木を建築部材に使用していたといえる。

吉岡下ノ段遺跡第12次調査　出土遺物観察表

（単位：cm）

図版番号	番号	調査区	遺構	種別	細別	器径	口径	底径	器高	残存	色調
8	1	C、D－4	SB01	土師器	広口壺		12.2			50%（口縁部のみ）	にぶい黄褐色
8	2	C－4	SB01南北土層ベルト南	土師器	広口壺		10.4			20%（口縁部のみ）	橙色
8	3	C－4	SB01	土師器	広口壺		15.1			20%（口縁部のみ）	褐色
8	4	D－4	SB01	土師器	広口壺		11.6			25%（口縁部のみ）	橙色
8	5	D－3	SB01	土師器	広口壺		16.4			35%（口縁部のみ）	にぶい黄褐色
8	6	C－4	SB01	土師器	二重口縁壺		17.0			5.5×3	にぶい黄橙色
8	7	C－3	SB01	土師器	複合口縁壺		27.0			20%（口縁部のみ）	明黄褐色
8	8	C、D－3、4	SB01	土師器	壺	22.6		6.4		75%	明赤褐色
8	9	D－3、4	SB01	土師器	壺	22.3		6.4		40%	明赤褐色
8	10	C、D－4	SB01	土師器	壺			6.8		25%（底部のみ）	黒
8	11	D－4	SB01	土師器	壺			3.0		75%（底部のみ）	黄褐色
8	12	C、D－4	SB01	土師器	壺			6.3		50%（底部のみ）	浅黄橙色
8	13	D－4	SB01	土師器	くの字甕		15.6			4×3	褐灰色
8	14	C－2、C－4	SB01	土師器	くの字甕		15.2			30%（口縁部のみ）	明赤褐色
8	15	C－4	SB01	土師器	S字甕		20.0			6×3	にぶい橙色
8	16	C、D－4	SB01	土師器	S字甕		13.2			10%（口縁部のみ）	橙色
8	17	C－4	SB01内SP22	土師器	S字甕		15.4			5×3.5	にぶい橙色
8	18	C－4	SB01	土師器	S字甕		16.2			3×3	黒褐色
8	19	C－4	SB01	土師器	S字甕					3×2.5	橙色
8	20	C－4	SB01	土師器	S字甕		15.1			3×2.5	灰褐色
8	21	C、D－3	SB01	土師器	S字甕		15.0			4×2.5	灰褐色
9	22	C－4	SB01	土師器	くの字甕			10.4		70%（台部のみ）	橙色
9	23	C－4	SB01	土師器	くの字甕			9.2			赤褐色
9	24	C－4	SB01	土師器	くの字甕			10.4		20%（台部のみ）	橙色
9	25	D－4	SB01	土師器	くの字甕			9.8		20%（台部のみ）	明黄褐色
9	26	C－3、4	SB01	土師器	くの字甕			8.0		6×5.5	橙色
9	27	C－4	SB01	土師器	くの字甕			8.0		40%（台部のみ）	橙色
9	28	C－4	SB01	土師器	くの字甕					40%（台部のみ）	明黄褐色
9	29	D－3	SB01	土師器	くの字甕					20%（台部のみ）	にぶい橙色
9	30	C－4	SB01	土師器	S字甕			10.1		75%（台部のみ）	橙色
9	31	C－4	SB01	土師器	S字甕			9.4		100%（台部のみ）	橙色
9	32	C、D－4	SB01	土師器	S字甕			7.5		20%（台部のみ）	
9	33	C－3	SB01	土師器	高坏		13.6			20%（口縁部のみ）	明黄褐色
9	34	D－4	SB01	土師器	高坏			10.8		60%（脚部のみ）	橙色
9	35	D－3	SB01	土師器	高坏					20%（脚部のみ）	明赤褐色
9	36	C、D－4	SB01	土師器	高坏					20%（脚部のみ）	にぶい褐色
9	37	C－4	SB01	土師器	小型丸底鉢		13.2		6.1	100%	明赤褐色

（単位：cm）

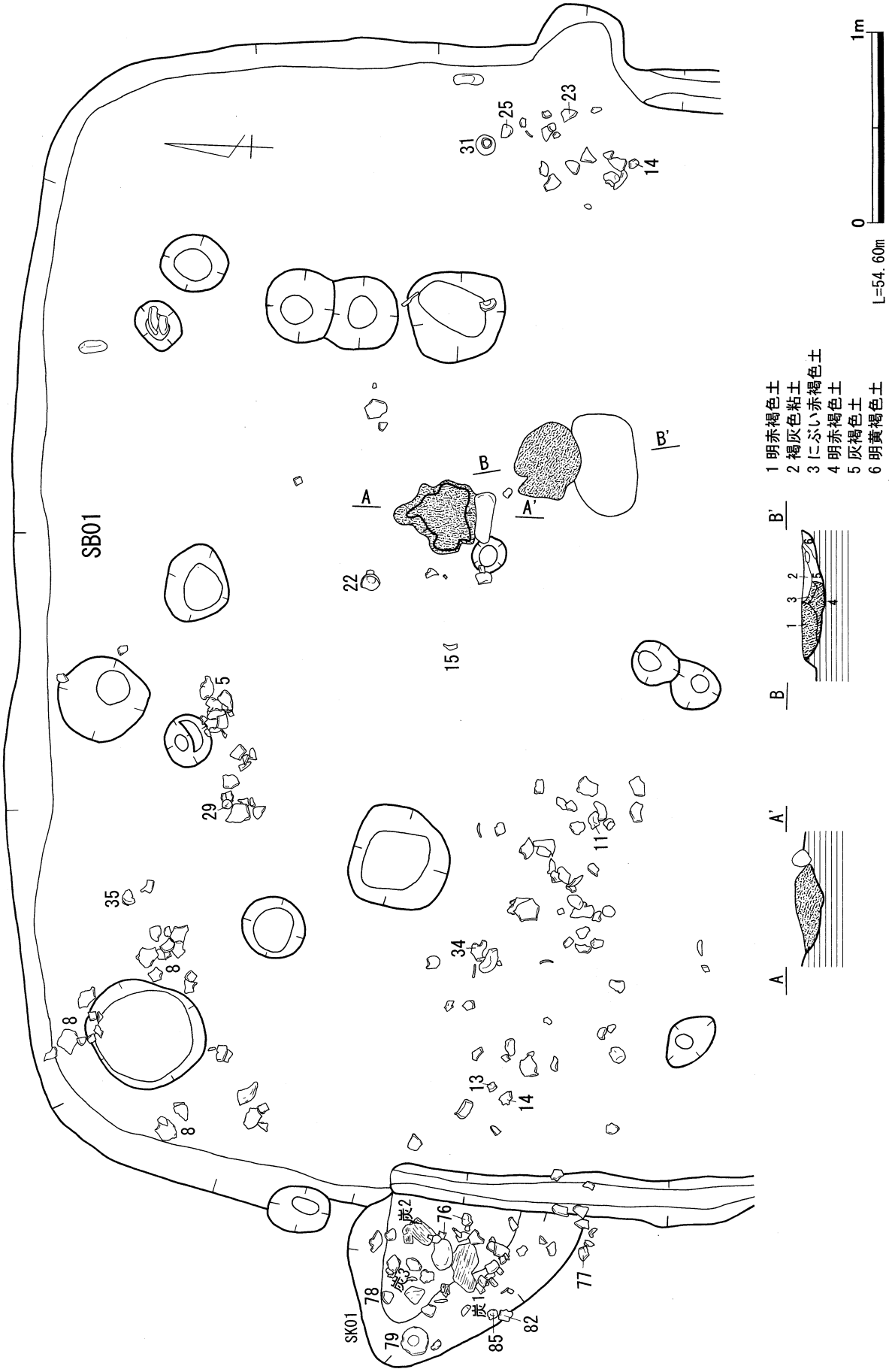
図版番号	番号	調査区	遺構	種別	細別	器径	口径	底径	器高	残存	色調
9	38	C－4	SB01	土師器	小型丸底鉢					30%	明黄褐色
9	39	C－4	SB01	土師器	小型丸底鉢		15.5			7×4	灰黄褐色
9	40	C－4	SB01	土師器	小型鉢			2.8		50%	赤褐色
9	41	C－4	SB01	土師器	不明						橙色
9	42	C－3	SB01	弥生土器	壺					5×3	黄灰色
9	43	D－3、4	SB01	弥生土器	壺					5×5	黄橙色
9	44	F－4	SB02	土師器	S字甕					5.5×2	にぶい黄褐色
9	45	F－4	SB02	弥生土器	壺					4×2.5	にぶい橙色
9	46	B－6	SB03	土師器	壺					10%	橙色
9	47	B－6	SB03	土師器	壺			6.8		10%	橙色
9	48	B－6	SB03	土師器	高坏					40%	赤褐色
9	49	B－6	SB03	土師器	小型丸底鉢		10.6	4.2	6.0	60%	橙色
9	50	B－6	SB03	土師器	小型丸底鉢		10.1	3.4	6.5	80%	黄褐色
9	51	B－6	SB03内SP361	土師器	小型丸底鉢		(10.4)	3.4	(6.2)	30%	橙色
10	52	D－5	SB04	土師器	壺	17.0		4.6		90%	橙色
10	53	D－5	SB04	土師器	壺			8.6		6×4	明褐色
10	54	D－5	SB04	土師器	くの字甕		13.6			11×11	黄褐色
10	55	D－5	SB04	土師器	くの字甕		15.6			6×3	浅黄褐色
10	56	D－5	SB04	土師器	くの字甕		12.6			40%	明赤褐色
10	57	D－5	SB04	土師器	くの字甕		13.0			7×6	橙色
10	58	D－5	SB04	土師器	S字甕		15.1			4×2	にぶい黄褐色
10	59	D－5	SB04	土師器	S字甕		14.2			4.5×2.5	にぶい橙色
10	60	D－5	SB04	土師器	くの字甕			8.8		30%（台部のみ）	橙色
10	61	D－5	SB04	土師器	S字甕			9.2		70%（台部のみ）	橙色
10	62	D－5	SB04	土師器	高坏		11.0	9.6	9.8	98%	橙色
10	63	D－5	SB04	土師器	高坏		9.4			40%	橙色
10	64	D－5	SB04	土師器	器台					30%	赤褐色
10	65	D－5	SB04	土師器	小型丸底鉢		9.5		6.0	60%	橙色
10	66	D－5	SB04	土師器	小型壺または鉢			3.2		7.5×4.4	橙色
10	67	D－5	SB04	土師器	小型壺または鉢			4.1		20%	橙色
10	68	D－5	SB04	土師器	小型鉢		9.3	3.6	3.4	90%	橙色
10	69	D－5	SB04	土師器	小型壺または鉢			4.4		6.5×3.5	灰黄褐色
10	70	D－5	SB04	弥生土器	壺					6×5	橙色
10	71	D－5	SB04	弥生土器	折返口縁壺		13.6			8×6	明赤褐色
10	72	D－5	SB04	弥生土器	壺					6×6	浅黄橙色
10	73	D－5	SB04	弥生土器	壺					9×3.5	にぶい黄橙色
10	74	D－5	SB04	弥生土器	壺					5×4	にぶい黄橙色
10	75	D－5	SB04	弥生土器	壺					6×7	浅黄橙色

（単位：cm）

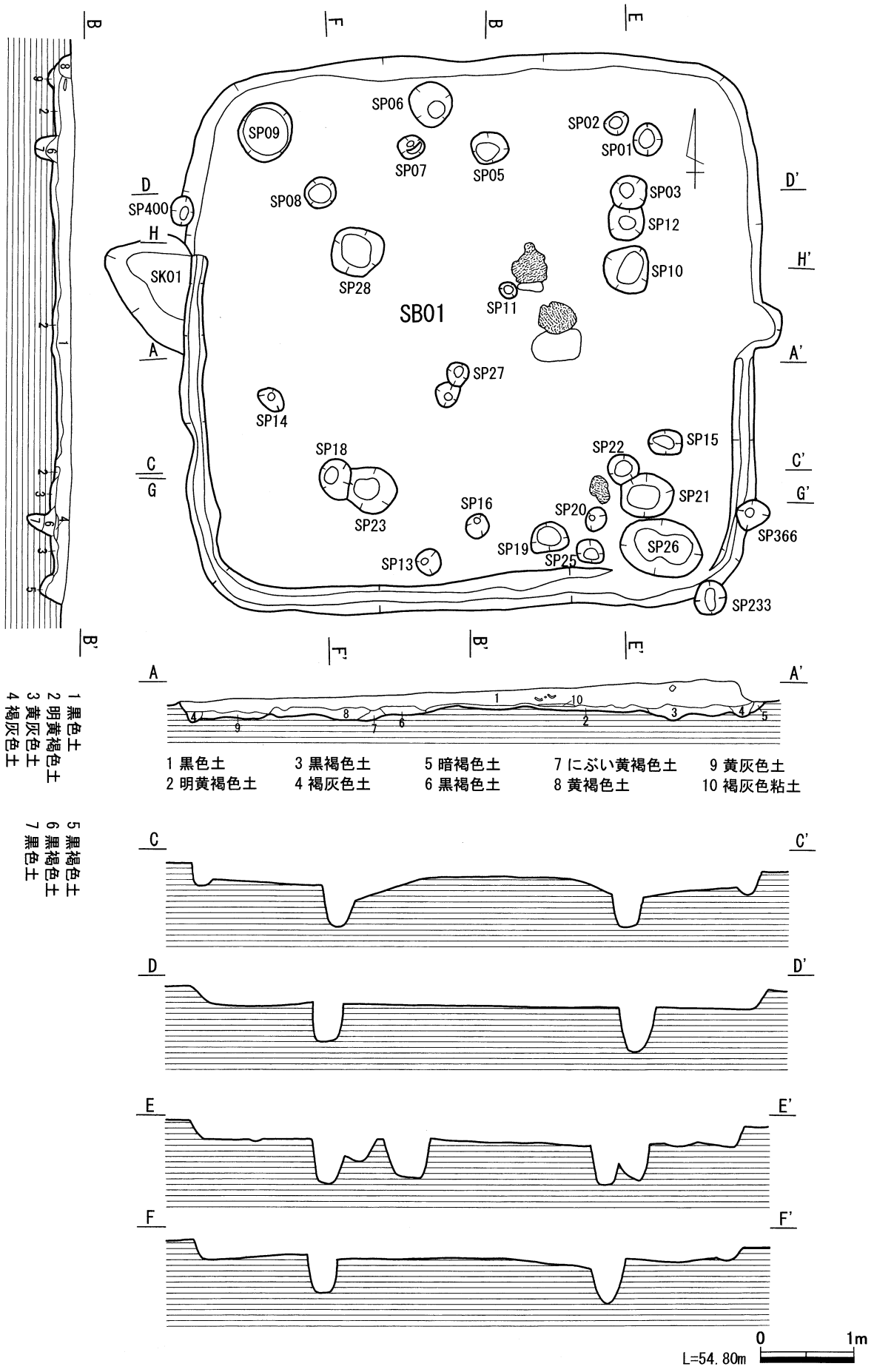
図版番号	番号	調査区	遺構	種別	細別	器径	口径	底径	器高	残存	色調
11	76	D－4	SK01	土師器	広口壺		14.7			10%	にぶい黄橙色
11	77	D－4	SK01	土師器	広口壺		11.6			20%	にぶい褐色
11	78	D－4	SK01	土師器	広口壺		(24.0)			6×4	浅黄橙色
11	79	D－4	SK01	土師器	壺					10%	橙色
11	80	D－4	SK01	弥生土器	壺					5×4	橙色
11	81	D－4	SK01	弥生土器	壺					3.5×2	橙色
11	82	D－4	SK01	土師器	甕		12.6			10%	褐灰色
11	83	D－4	SK01	土師器	高坏		12.9			5×4	橙色
11	84	D－4	SK01	土師器	高坏			16.8		5%	橙色
11	85	D－4	SK01	土師器	高坏					4×2	浅黄橙色
11	86	D－4	SK01	土師器	小型鉢		10.2			10%	にぶい橙色
11	87	B－5	SH01SP228	土師器	S字甕					6×2	にぶい褐色
11	88	E－2	SP74	土師器	壺			8.0		25%	にぶい橙色
11	89	D、E－2	SP85	土師器	壺			7.8		7.8×2.5	灰黄褐色
11	90	D－2	SP88	土師器	くの字甕	21.4	15.3			80%	にぶい黄褐色
11	91	D－3	SP89	土師器	二重口縁壺	23.4		7.0		75%	明黄褐色
12	92	D－2	SP93	土師器	高坏		20.0			4×4	にぶい黄橙色
12	93	D－2	SP93	土師器	小型壺		6.7			10%	橙色
12	94	D－6	SP265	弥生土器	折返口縁壺		18.0			5×5	橙色
12	95	D－6	SP265	土師器	小型高坏		8.4			10%	にぶい橙色
12	96	E－6	SP307	土師器	直口壺	12.4		1.7		95%	橙色
12	97	E－6	SP307	土師器	くの字甕			9.6		10%	橙色
12	98	D－6	SP333	土師器	S字甕					6×4	にぶい褐色
12	99	E－2	SX01	縄文土器	深鉢					4×5	灰黄褐色
12	100	重機掘削時	中央遺構付近	土師器	広口壺	22.9	17.6			40%	にぶい黄橙色
12	101	確認調査	トレンチ2	土師器	広口壺	24.0	12.7			50%	橙色
12	102	重機掘削時	中央付近	土師器	広口壺		16.8			10%	明赤褐色
12	103	表採		弥生土器	壺		21.0			5×4	明黄褐色
12	104	表採		弥生土器	折返口縁壺		20.4			7×5	にぶい橙色
12	105	確認調査	トレンチ2	土師器	器台		14.2			4×4	にぶい黄橙色
12	106	確認調査	トレンチ1	土師器	壺			7.0		20%	明赤褐色
12	107	D－3	南東遺構上面	土師器	小型甕		14.4			10%	橙色
12	108	表採		土師器	くの字甕					10%	にぶい黄橙色
12	109	D－6		土師器	S字甕					6×2	にぶい黄橙色
12	110	確認調査	トレンチ2	土師器	高坏					40%	橙色
12	111	表採		土師器	高坏					5×3	橙色
12	112	表採		土師器	器台					5×4	橙色
12	113	表採		土師器	小型鉢		7.6	3.6	3.8	100%	橙色
12	114	表採		須恵器	甕					7×4	灰黄褐色

2
3
4
5
6
B
C
D
E
F
G
H
54.50m
54.60m
54.70m
54.80m
54.90m
55.00m
55.10m
55.20m
55.30m
SP17
SP88
SP93
SP89
SP85
SP84
SP74
SX01
SB01
SB02
SB03
SB04
SH01
SP265
SP333
SP307
SP355
SP288
0
10m

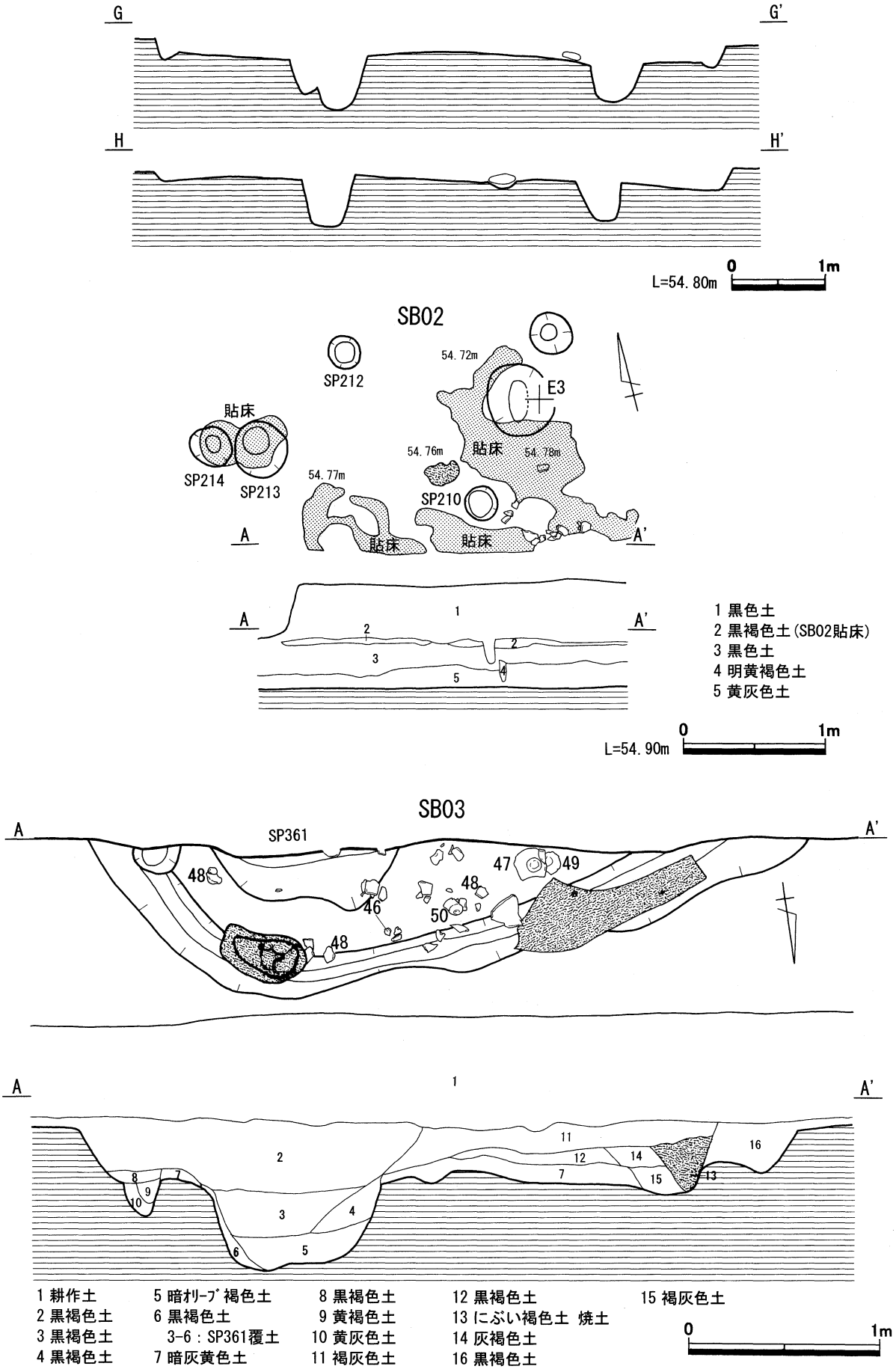
第１図　遺構全体図



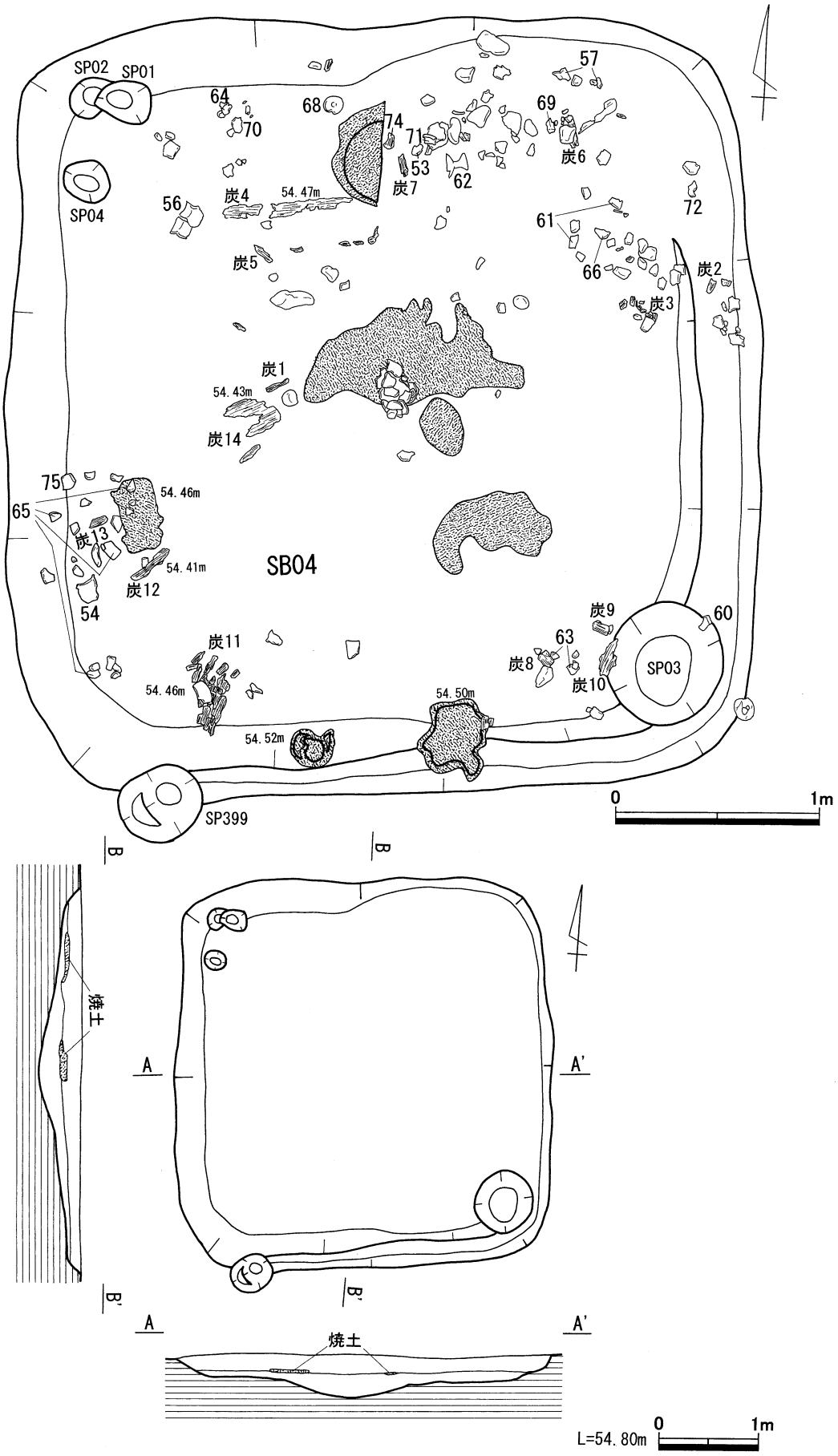
第２図　SB01実測図（１）



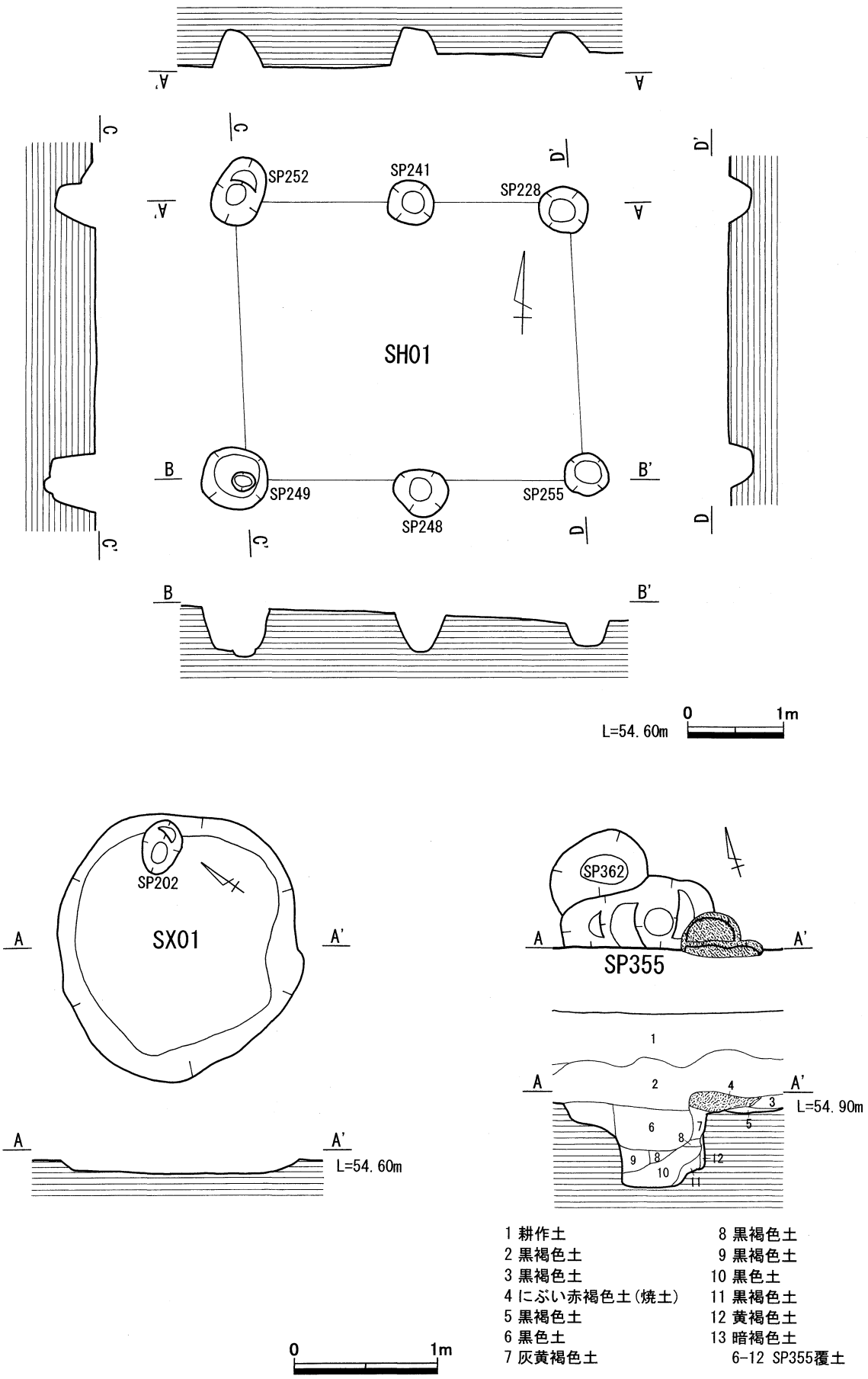
第３図　SB01実測図（２）



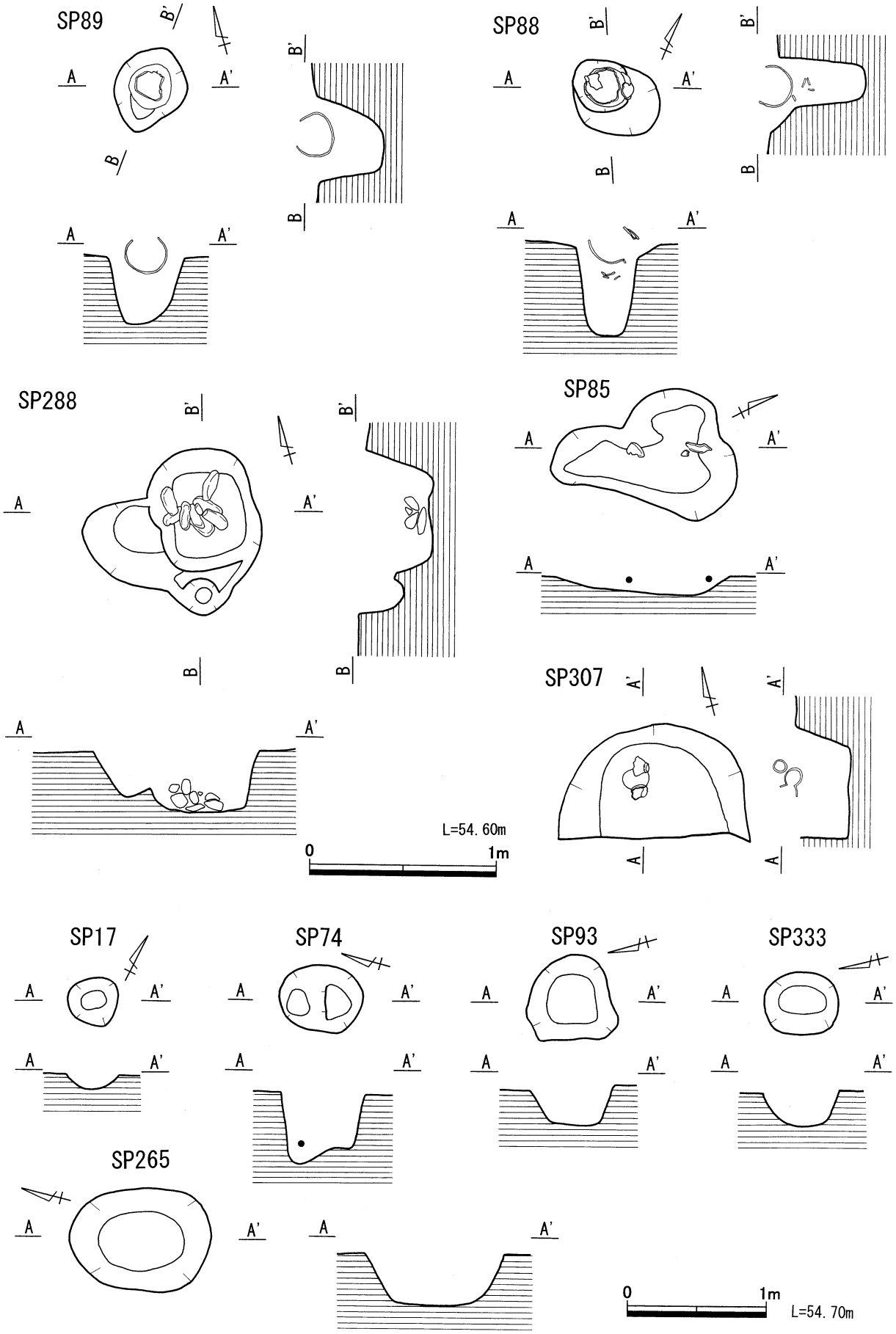
第４図　SB01（３）、SB02、SB03実測図


SP02
SP01
SP04
SP399
SP03
SB04
57
64
70
68
74
71
69
炭6
53
炭7
62
56
炭4
54.47m
72
61
66
炭5
炭2
炭3
炭1
54.43m
炭14
75
65
54.46m
炭13
54.41m
炭12
54
炭9
60
63
炭8
炭10
炭11
54.46m
54.50m
54.52m
0
1m
B
B'
焼土
A
A'
L=54.80m

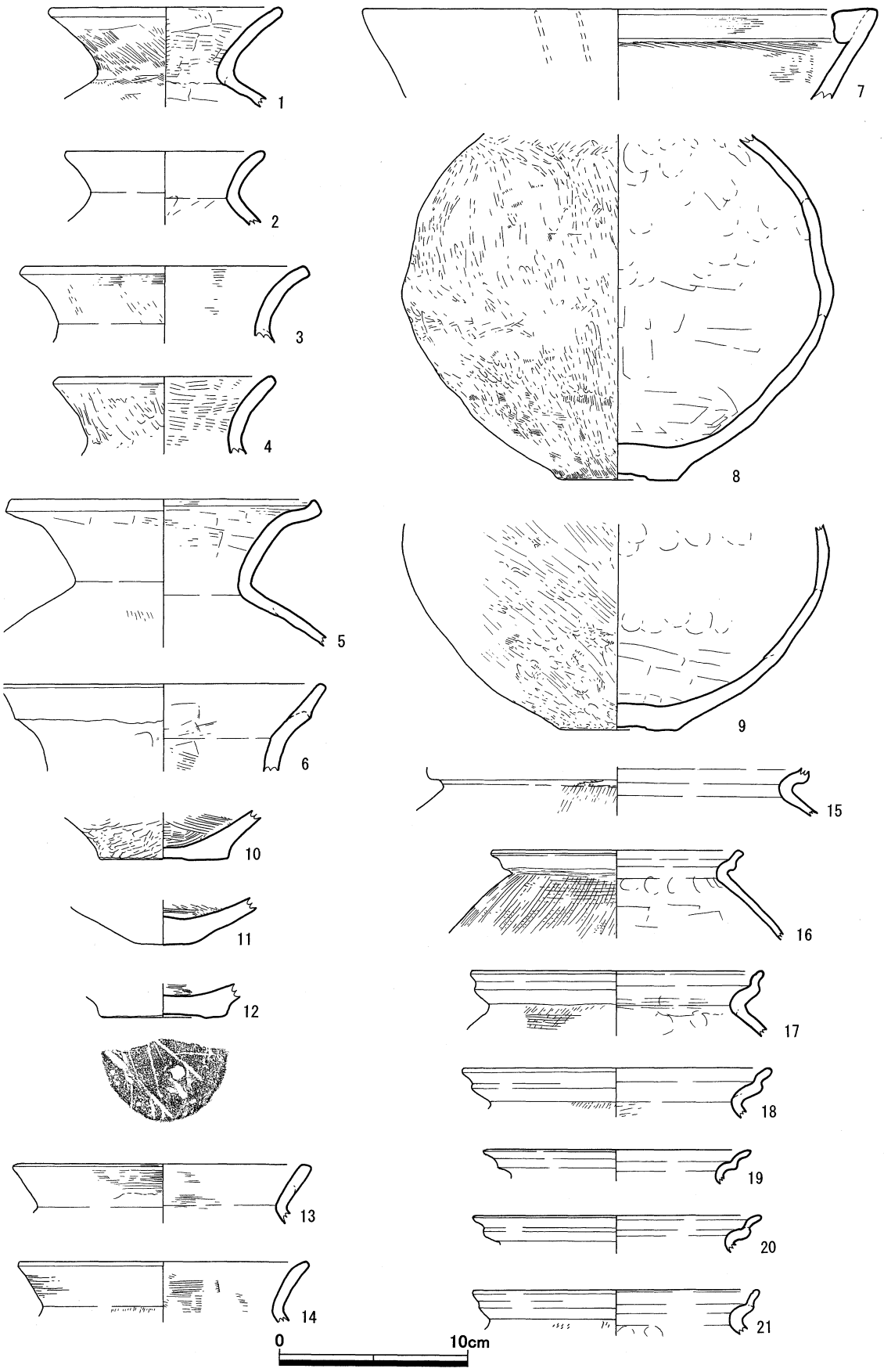
第５図　SB04実測図



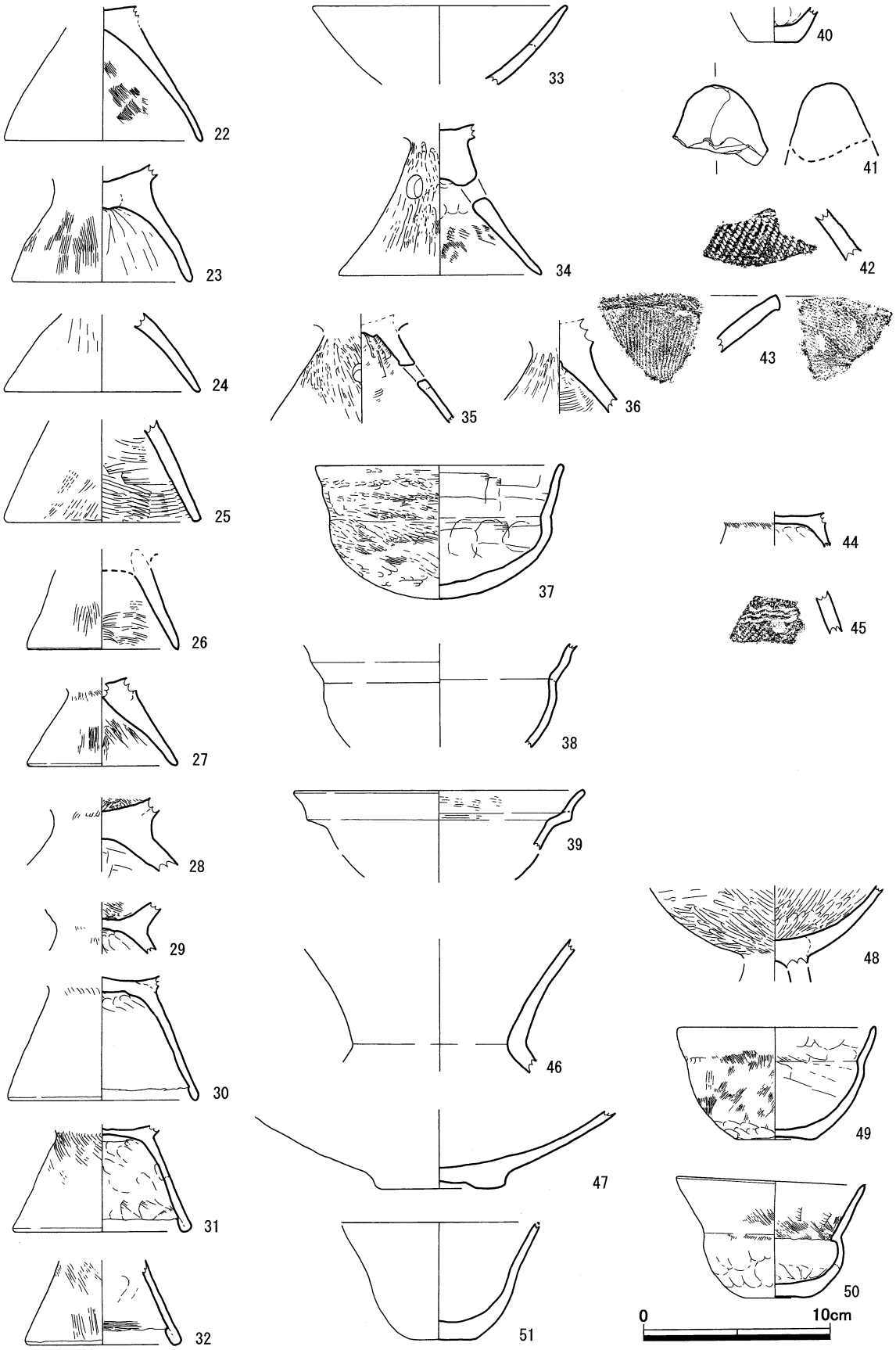
第６図　SH01、SX01、SP355実測図



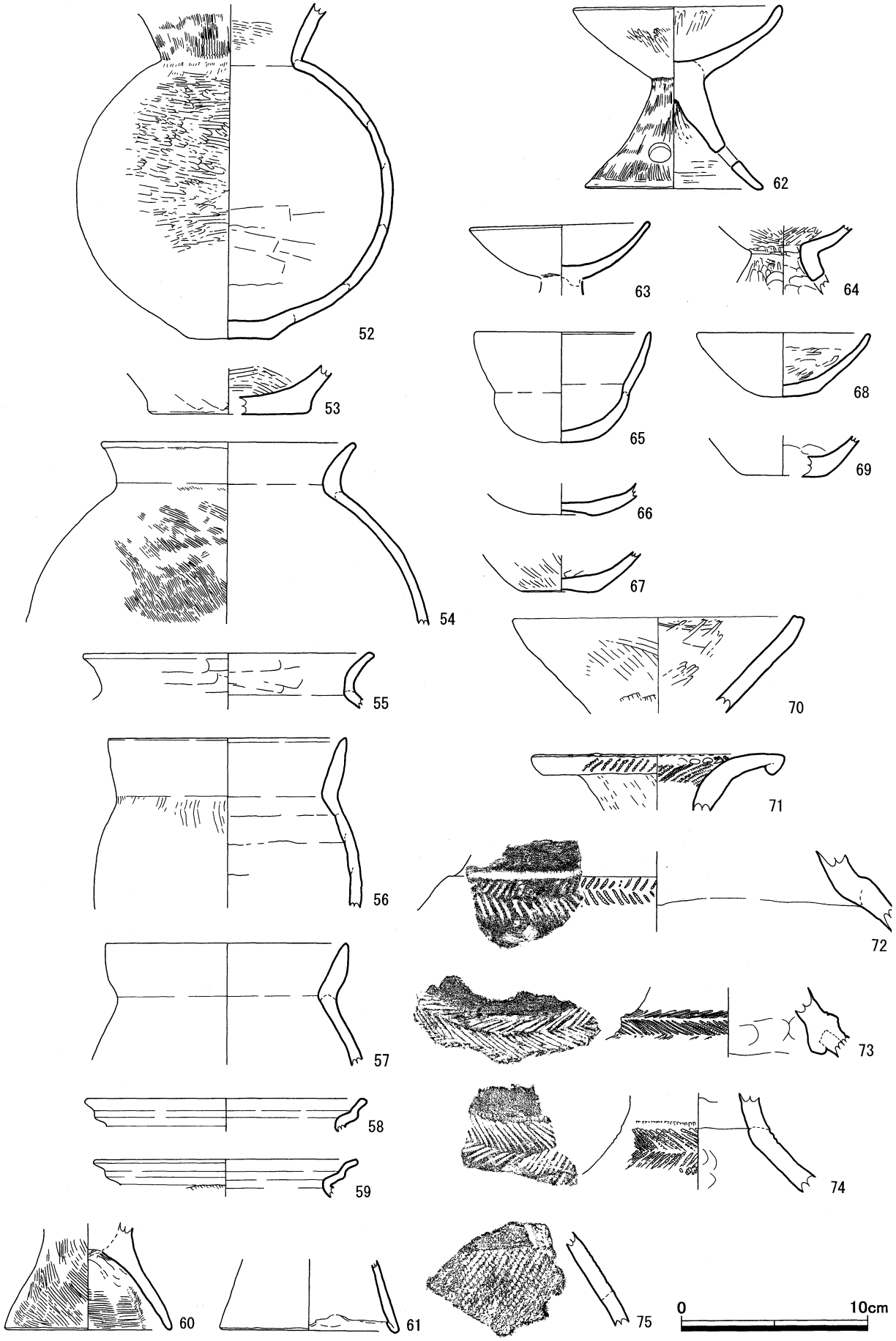
第７図　SP17、74、85、88、89、93、265、288、307、333実測図



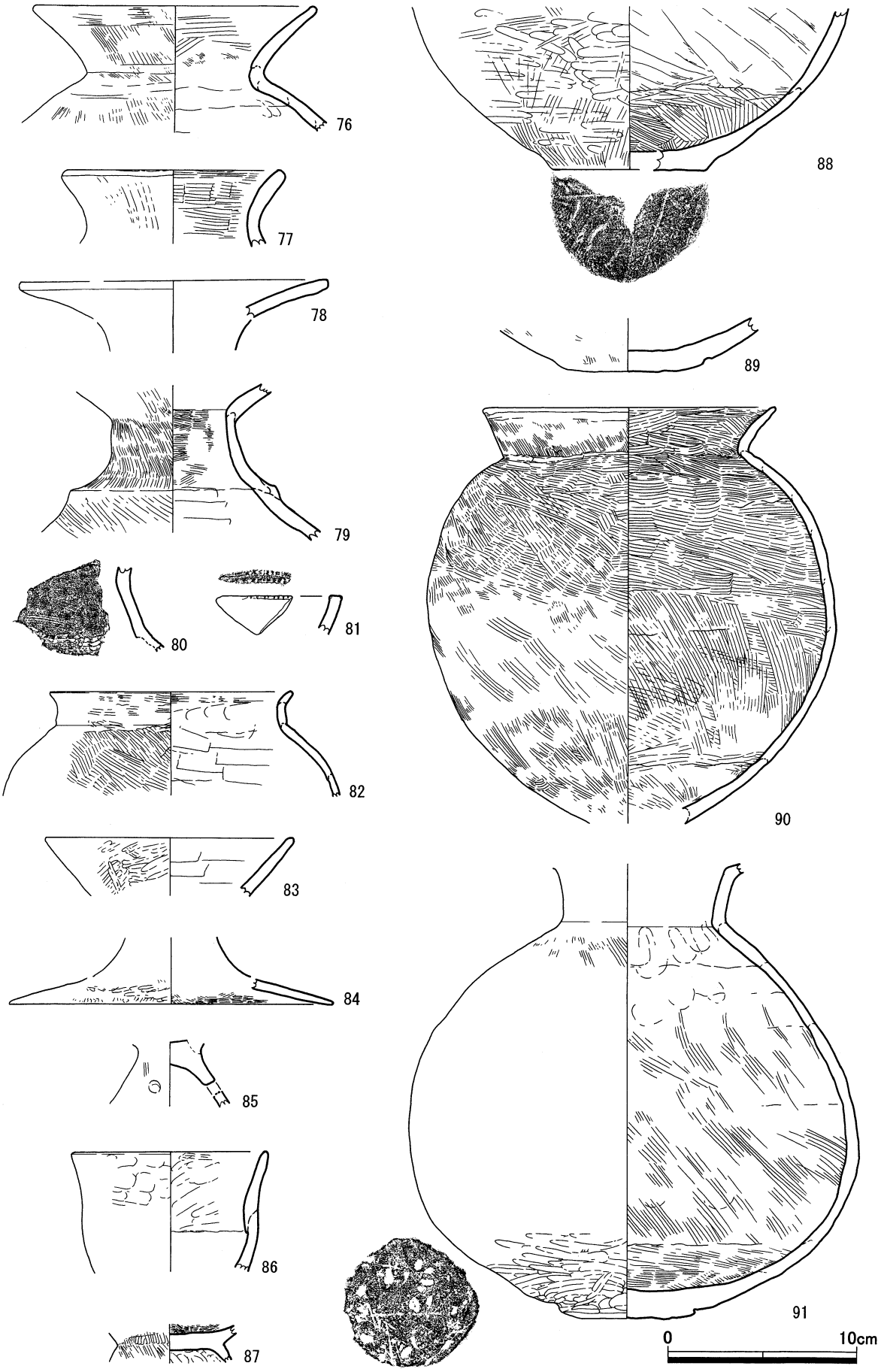
第８図　出土遺物実測図（１）



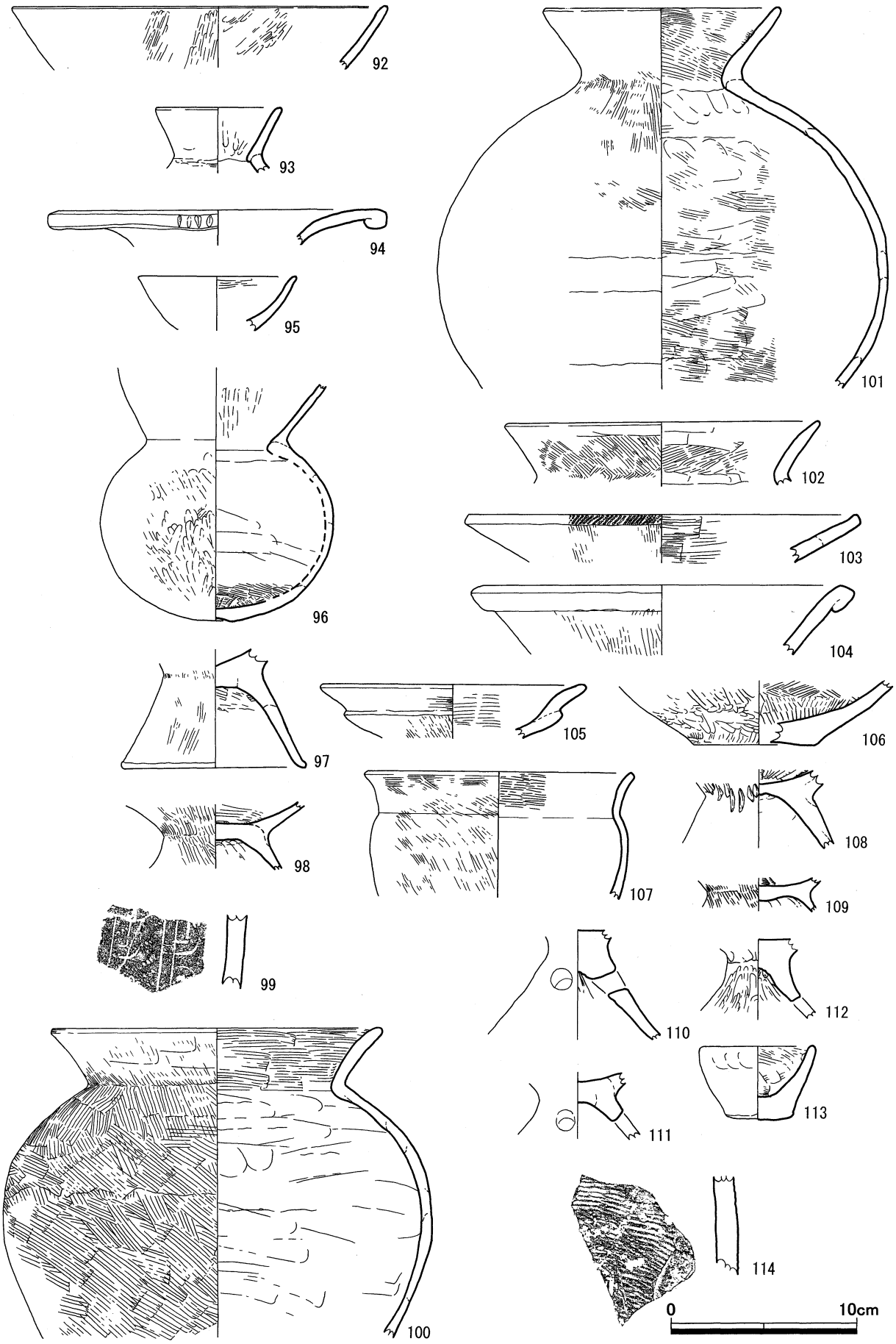
第９図　出土遺物実測図（２）



第10図　出土遺物実測図（3）



第11図　出土遺物実測図（4）



第12図　出土遺物実測図（5）

写真図版

報告書抄録

ふりがな	よしおかしたのだんいせきだい11じ・だい12じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	吉岡下ノ段遺跡第11次･第12次発掘調査報告書
編著者名	夏目不比等 井村広巳
編集機関	掛川市教育委員会
所在地	〒437-8650 静岡県掛川市長谷一丁目１番地の１　TEL 0537-21-1158
発行年月日	平成29年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
吉岡下ノ段遺跡（よしおかしたのだん）（第11次）	静岡県掛川市吉岡（しずおかけんかけがわしよしおか）	22213	231	34°47′20″	137°57′20″	2014年7月～2014年11月	1,040㎡	茶園の改植
吉岡下ノ段遺跡（よしおかしたのだん）（第12次）	静岡県掛川市吉岡（しずおかけんかけがわしよしおか）			34°47′08″	137°57′22″	2014年10月～2015年2月	830㎡	茶園の改植

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉岡下ノ段遺跡（第11次）	集落跡	縄文時代早期 縄文時代中期		土器 土器、石器	
		弥生時代後期	竪穴住居跡	土器	
		古墳時代前期 古墳時代中期	竪穴住居跡 平地住居跡 掘立柱建物跡 土坑 小穴	土器、勾玉	
吉岡下ノ段遺跡（第12次）	集落跡	縄文時代中期		土器	
		弥生時代後期		土器	
		古墳時代前期	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 小穴	土器	
		古墳時代後期		須恵器	

要約	吉岡下ノ段遺跡は原野谷川右岸に位置する。 第11次調査では、弥生時代後期から古墳時代中期までの竪穴住居跡、平地住居跡、掘立柱建物跡、土坑、小穴が発見された。 第12次調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、小穴が発見された。

吉岡下ノ段遺跡第11次 第12次発掘調査報告書

平成29年3月31日発行

編集・発行　掛川市教育委員会 社会教育課 文化財係
〒437－8650
静岡県掛川市長谷一丁目１番地の１
TEL　0537-21-1158

印　　刷　松本印刷株式会社
静岡県袋井市新屋4－5－2
TEL 0538-43-6300